
オッサンの異世界記

焼きうどん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オッサンの異世界記

【Zマーク】

Z0990Y

【作者名】

焼きうどん

【あらすじ】

「第一章」異世界に迷い込み、そこで出合ったクワガタに殺されたオッサン。次に気が付くとそのクワガタの子供として誕生していた。

それからちょっとした修業を経て新たなる人種であるムジビトに進化したオッサンは旅に出る。

「第一章」旅に出たオッサンではあるが、マイペースにのらりくらりと過ごし、一向に目的の場所へと行かない。そんな旅の道中で理

由なく命を狙われてしまつたのだが、なんとか逃げることに成功する。そして逃げ込んだ洞窟の先にあつたものとは……

「第三章」現在執筆中

『これはオッサンが紡ぐ異世界の物語』

セクハラ紛いの言動があります。

また、若干のチート的な要素があります。

おっさん、クワガタに転生

気が付くとおっさんはクワガタになっていました。

あ、この場合のおっさんは「おっさん」と言つて言つたのは一人称ね。つまり「おっさん」と「おじさん」の二つ。なぜこんな一人称かと言つと、十五歳離れた従妹に「おじさん」と呼ぶから。や、最初は「おじさんじゃなくてお兄さんだよ」と訂正してたんだよ。でもさあ、なんか三十越えた辺りからどうでもよくなつてきて、開き直るように「ああそうさおじさんだよ。なんなら一人称をおじさんにしちゃうぞ」と言つたらその従妹の父親、つまりはおっさんの叔父に「君がそんなんしたら本物のおじさんな俺はどうしたらいい?」って真剣な顔で聞かれたから「じゃあおっさんになります(笑)」みたにふざけたら「じゃあそれで決定ね」といい笑顔で従妹が言つた後に引くに引けなくなるとここまで持つてかれて今に至るという感じ。

んで、話を戻すけどおっさんはこれでも元々人間だったわけよ。

じゃあなんで今はクワガタなのかつづーと、よくわかんない。

でもある日ふと気付いたら森の中にいたんだ。それまで住宅街を歩いてたのにいきなりよ?

こりや白昼夢かと思つたけど妙にリアルな感触や匂いを感じた。だが夢だとこの時は思つてたんだ。だつて、おっさんはまだDTな中坊の頃に同じような超リアル夢を見たことがあるからね。「あ、こんなリアルな夢は久しぶりだ」って感激してたもん。ちなみにその時の夢は思春期特有の可愛らしいエロ夢だつた。巨乳なロシア娘(ここが重要ポイント)を口説いてそのたわわなおっぱいを揉む。今でも覚えてるあの感触は現実で触れた数人の女性の胸と比べると極上だったと言わざるを得ない。

え? おっさんがリア充? 現実で女性の胸を揉んだだけで何言つてんの!

言つとくけど、ほとんど素人さんじゃないかい。つーかおつぱい
パブだよ。いわゆるお金の関係です。

いや、結構良心的なお値段なんだよ？

諭吉さん、財布からフライアウォーイしていくお風呂に比べればなん
てこともないじゃないか。

おつと、パブの話はもういいね。

んじゃクワガタになつた経緯を説明しようか。

夢だと認識しながらもおつさんは森を歩いて美人なお姉ちゃんを探
しました。いや、夢だからこそ探したんです。深くはツツこまない
でね。オッサンという生き物は若人と違う意味で性欲が旺盛なんよ。
不倫してんのは大体オッサンだからね。

ちなみにオッサンと心中でカタカナ表記するのが世の中に漫然
と生れるおやじを表しています。

閑話休題

そして森の中を彷徨つていた時に出会つたのがでっかいクワガタ。
どんだけでかいかと言つとおつさんが横になつて寝た時より幅が広
くて、クワガタの目線があつさんくらいの高さまである。長さはお
つさん一人が縦に寝れるくらいかな。まあ、言つてしまえばライト
バン（車）くらいの大きさかな。

んで、「うおーでけえ……」つておつさんが感心してると、そいつ
つたら顎を広げておつさんのことをジョッキン「しちやつた。

どこまで顎を閉じれるねんつ！ つてツツコミたくなるくらいに顎
を閉じられたせいでおつさんは死んじやつた。ま、幸いなことに痛
みを感じる前に死んじやつたから実感わかないけど。でも確かに死
んだ。

んで、起きたらクワガタだつたわけさ。

なんでつて聞かれておつさんにもわかんない。ほら、あれじゃね

? 死して尚、魂だけは身体に宿っていたが、クワガタがそれを喰つたせいでその子種に魂が宿りました的な？ うん、わかんないからこれでいいか。

おつと、説明不足だつたけどおつさんは多分おつさんを殺してくれたクワガタの子供として生まれました。なぜ多分なのかはクワガタの区別なんかつかねーよつてことでご理解いただきたい。

クワガタの子供だったら幼虫じゃねーの？

と思うかもしれないが、確かに幼虫だったよ？ 生後三田田までは

……

このクワガタ異常に成長はえーの！ しかも卵は地中に産むでもなく地面上に産んで両親が子育てまでするんだ。おかしいけどあまりに普通なんで受け入れちつた。

そしたら生後四田田の朝、起きたら蛹になつてた。

そん時に脳内（あるかどうか不明だがこうして考えることが出来るのだからあるのだろう）で【キラースタッグビートル（幼虫）はキラースタッグビートル（蛹）に変態しました】って聞こえてきた。誰が言つてるか知らないけど変態はないだろ？ 確かに昆虫が幼虫から成長していく段階は変態つて言うのかもしぬないけど、オツサンに変態は禁句だよ！ もう少しオブラーートに包んで欲しいよまつたく！

てゆーかキラースタッグビートルつておつさんのことだよね？ ま、長いからK S Bつて勝手に言つてつけど

そんなこんなK S B（蛹）のまま飲まず食わずに一週間過ごしました。正直これ以上はきつついと思つてたんだけど次の日起きたら【キラースタッグビートル（蛹）はホワイトキラースタッグビートルに変態した】という脳内アナウンスが流れた。だからもう少しオブラーートに（略）

まあ、無事に成虫となつたわけだが黒光りしてゐる父親とは違い、お

つさんは白いクワガタになつた。勘違いしてはいけないのが、おつさんが特別なわけじゃなくて蛹から孵つた他のクワガタ（兄弟達）も面白いんだよ。

時間が経つたら黒くなるところともなく、成虫になつたんだから出ていけとばかりに追い出されてしまった。

そして今に至るところわけ。

こうゆう時は解説役なのがいてくれると助かるのだが、両親も兄弟も「キシヤーキシヤー」的な発音しか出来ないから何もわからないし、クワガタのボディーランゲージもイマイチ伝わらない。ところどでおつさんは途方に暮れているのです。

兄弟は皆、何処かへと行つてしまつた。

おつさんは一人（匹？）寂しく森の中を歩き続ける。
うん、予想外に疲れない。

運動不足やタバコの影響でこことこ体力ががた落ちしてたのが嘘のようだ。

つーかよく考えたらおつさんの背中には翅があるじゃないか。
よし、ならば人類の夢である舞空術でもやってみようかな。

アーヴ、キャーン……フラーイー

…………あれ？ どうやつたら飛べるわけ？

ねつねつ、食べる

結論から言おう。

おっさんは飛べました。

要領的には瞬きを高速でしながら歩いてる感じだ。

しかし、地面から二三十センチくらいをホバリングしてるだけであると言つておく。

それでも飛んだことに変わりはない、おっさんの的には大満足な結果です。

さて、飛行実験も終わつたし次は何をしようか……

うん、決めた。

まずは飯だ飯。

おっさんと言つた、このクワガタの食糧は樹液というわけではなく（しかしスウェイーツ感覚で食べることがある）肉だ。

おっさんがまだ幼虫だった頃は両親が採つてくれたのだが、今は自分で調達しなければならない。

この体になつておっさんは好き嫌いがなくなつた。

今では何食つてもうまいと感じる。

三十過ぎた頃から肉派から魚派に転職したはずなのにね。野菜はこの体になつてから食つたことはない。

だから本日は自生している野菜的なものとか果物的なのを探して食おう。

やつぱこの年になつてくると体が健康面を考慮しなじめるのか無性に野菜が欲しくなる時があるんよ。

つーか何より野性の獣狩るとかおっさんはレベル高すぎだ。ロッ

ブイヤーさんみたいな動物に角生える奴とか黒い毛並みの狼的な動物とか、ぐるぐる唸りながら一足歩行してる熊さんとかいるんだけど……おっさんには無理。

とゆーわけでここに生えてるキノコって食えんのかな？なんか黄色いけどおっさんの好きななめことかも黄色っぽいしイケるだろ。

お、そこそこうまい。

あれ？ か、身体がしび、れて……う……「」……け

【ホワイトキラースタッグビートルは麻痺回復力上昇のスキルを得た】

（数十分後）

【ホワイトキラースタッグビートルは麻痺回復力上昇のスキルを得た】

いやー参った。

ありや、ダメだわ。

素人がキノコに手を出しちゃいかんね。

食えるキノコによく似た毒キノコもあるってことを失念してた。

毎年中毒に陥る人がそこそこいるから気をつけなればな。

と、そういうしていいる内に林檎のような赤い果実を発見した。

おっさんの出身地の影響もあってか、ほとんど躊躇わずにぱくりとひと飲み。

【ホワイトキラースタッグビートルは毒状態になった】

あれ？ なんか目が霞むと言つか、苦しい……

お、おえ……
きせきわるい……

（一時間後）

【ホワイトキラースタッグビートルは毒回復力上昇のスキルを得た】
ふう、あーきつかつた。おっさんがこんなに体調悪くしたのって高校の時に友人からインフルもらって寝込んだ時以来だよ。

それよりも食える物を探さねばな。

こうなつたら野草を食うか。

お、これ山菜じゃね？

おっさん田舎育ちだから山菜はわかるのよ。おっさんの祖母がよく採ってきてたからな。

あれ……なんだか眠く……

【キラースタッグビートルは睡眠状態になった】

（数時間後）

【キラースタッグビートルは睡眠回復力上昇のスキルを得た】

いやー、なんか知らんけどよく寝た。

でもなぜだろ？……

眠ったのに疲労感やその他が解消されてない。
ま、いつか。食える野草なわけだし。

もう一つ……ぐう……

【ホワイトキラースタッギービートルは睡眠耐性のスキルを得た】

ん？ 痛つ！？ なんか痛つ！？

チクチクとした痛みに意識が覚醒する。

何事かと思って周りを見渡して見れば、おっさんをロッピイヤーが角で突き倒していた。

なんつーか地味に痛い。

爪楊枝で肌を刺さるほどの力ではないけど、なんやられてる感じ？
まあ、弱肉強食って奴かね？

そりや無防備に寝こけてる奴がいたら好機とばかりに襲いますよ。
とゆーわけでおっさんは逃げます。

戦わないのかつて？

いや、おっさんに実害はないわけだし、何より鬼を殺すのがめんど
い。

ホバリングしたおっさんのスピード舐めんなよってことでその場から離脱したわけだが、腹減った。

あれだね。結局あんまり食べてないもん。

じゃあ何を食うかって言つと木の根っこだ。おっさん今、虫なわけ
だし木の根っこも食えるでしょ。

とゆーわけで早速地面を掘る。

ほどなくして根っこを発見＆ゲット。

いただきまーす！

【ホワイトキラースタッグビートルは混乱状態になつた】

あれ？ なんでおっさんはこんなところで根っこなんか食べてんの？
あ、やべ……炬燵の電源切つたかな？
いやいやそれを言つならガスの元栓の閉め忘れも……
あーおつぱいで癒されてー……

【ホワイトキラースタッグビートルは混乱回復力上昇のスキルを得た】

はつ！？

おっさんは今何を……

とゆーかなぜだかソープに行きたくなつた。

その後、おっさんは生き物を狩ることなく自生してゐる植物などを食つて生き抜いた。
最初はなんか変な状態になるけど何回も食べると平氣になつてくるのよ。

そんなこんなおっさんがクワガタになつて三ヶ月が過ぎた。

【ホワイトキラースタッグビートルは麻痺完全耐性のスキルを得た】
【ホワイトキラースタッグビートルは毒完全耐性のスキルを得た】

【ホワイトキラースタッグビートルは睡眠完全耐性のスキルを得た】
【ホワイトキラースタッグビートルは混乱完全耐性のスキルを得た】

【不殺・特定の状態異常耐性・行動範囲が森のみで三ヶ月生きるの特殊条件を満たした。ホワイトキラースタッグビートルはエメラルドスタッグビートルへと変態した】

【エメラルドスタッグビートルになつたことで森の加護を得た。以降森での行動に補正が付きます】

【エメラルドスタッグビートルは変態したことで木々の声のスキルを得た】

【エメラルドスタッグビートルは変態したことで植物成長促進のスキルを得た】

朝起きたらおっさんはキラッキラッの濃い緑色になつてました。

おつさん、初めて会話をする

いやー驚いた。

起きたら縁のおじさん（クワガタ）になつてたとか何の[冗談よ。つーかまた変態言われた。

おつさんはダンディなロマンスグレーなのに……

いや、今は縁だからロマンスグレーじゃねーや。ロマンスグリーン? とゆーか縁になつて何か変わったわけ?

あ、保護色か。

森の中でうんたらかんたら言つてたのはそいつのことへ。それよりもまた適当に食い物探ししますかね。

お、赤い果実はつけーん!

『それ、毒あるわよ』

「いや、おつさんには効きませんから」

毒完全耐性とかゆーの持つてるからね。

この二ヶ月の間に色んな毒性植物を食つた結果だよ。

今では一口食べれば「あ、毒ある」ってわかるんだよね。

その他の耐性のおかげでおつさん何食つても大丈夫。

『そうなんだ』

「そうなんです」

『じゃあ、もつと毒が強力な実を作つた方がいいのかな?』

「いや、あらゆる毒植物を食つた毒マイスターなおつさんの意見を言わせてもらえば、この実はそこそこなレベルの毒を持ちながらも毒っぽい臭いがしないんだよね。その点は摂取する側としては嵌められた感がある」

『せつか。なら』のままでも生き物を毒殺するのは訳無いのね
「そりそり。ま、おつさん以外はね……って誰つ？」

おつさんと今まで会話したのは誰ですか?
しかし、周りを見回してもそこには誰もいない。

『クスクス』

なんかおつさんを笑つてるみたいな音が聞こえるがそこにはやはつ
誰もいない。

「……幻聴？」

寂しいおつさんの心が作り出した。エアなボイスだったのか。
おつさん的には幻聴よりもきわどい水着のおねえちゃんの幻影が見
える方が良かつた。
ここで全裸のおねえちゃんじやないのは、逆に上口さが消え失せて
しまうからだ。

森で水着はエロいが森で全裸ではエロさが足りない。
これが分からん奴は性欲に真つすぐな青い小僧だ。
そして「その水着つて葉っぱ製ですか？」と考えた奴は誇つていい
ぞ。お前は立派な戦士だ。履歴書の職歴に戦士と書きなさい。
おつさん?
おつさんはただのオッサンです。それ以上でもそれ以下でもあります
せん。

『幻聴じゃないよ。ヒューか聞こえてたことに私がビックリ』

また声が聞こえる。
「こだ……どこにいるんだ。」

声が優しげなおねーちゃんっぽいからきっと美人に違いない。

「頼むからおっさんに姿を見せなさい」

『いじりちよ』

声のした方向に田を向ければそこには先ほど食べた果実のなる木しかない。

『そう、あなたが今見るのが私』

おっさん見てる方向には先ほど食べた果実のなる木しかない。

「所詮は幻聴か……」

『いやいやいや！　私だってば！　その見つめてくれてる木が私』

木が私って……

幻聴さんはとんだファンタジー思考によつて作られたものみたいだな。

やれやれ仕方ない……

「これが？　これがええのんか？」

おっさんはとりあえず木を舐め回した。

さて、脳内の妖精さんよ。どう反応するんだい？

『や、やめて……まだ樹液は外に出てないの。私、まだ傷がついた経験がないから……』

なんかやたら艶っぽい感じで返してきたな。ここは良いではないかとか言いながら続けるべきか……

一度整理してみよう。

脳内でエアな相手を作り、それを木に見立てて会話し、その木を舐めるおっさん……

うん、気持ち悪いね。

絶対に友達になれないし、友達もいない（変態仲間はいるかも）

「おっさんは馬鹿だつ！」

『え、そんなことないよ。気持ち良かつたし』
「植物を満足させて何が楽しいんだつー！」

『なんか……』「めんね？』

「いや、君は悪くない。悪いのは全部おっさんだ」

『元気を出して』

「慰めるなよ馬鹿野郎。優しくされるとおっさん付け上がりやうからね」

『あのーちょっとといいつすか？』

『あ、はい。何ですか？』

『ひとつと光合成に集中してるんで、もう少し静かにしてもらつていいつすか？』

『い、ごめんなさい』

『いやいや、君はまだ若いから仕方ないつすよ。おーい、誰が一番酸素作れるかの競争再開しようつす』

『うーー』

『おけ』

『任せんしゃい』

『なんか脳内音声が増えた……』

しかも酸素を作る競争とかしてんじ。

正直ありがどづ。あなたたちのおかげでおっさんなりは生きていけます。

そして「」めんなさい。おっさんは「酸化炭素を吐き出すためのダメ生物です。

『なんかますますへこんでるね。大丈夫、ちょっと注意されただけで杉690452さんも怒つてないから』

なんかまた慰められた。

とゆーかおっさんに対して「お母さんもう怒つてないから大丈夫だよ」って近所のお姉さんが言う感じなのはいかがなものか。ま、そういうの大好物ですけど。

「さすが脳内音声。おっさんの好みを熟知してやがる」

『さつきから脳内音声って言つてるけど違うよ~。』

「はいはい。わかつてるわかつてる」

嘘ついた子供に「お前嘘ついたろ?」って言つても「嘘なんかついてないよ」って返してくるようなもんだな。

おっさんの脳内は生まれ変わったせいか思考が若々しいらしい。

『いや、私と会話できるってことはあなたそつゆうスキル手に入れたでしょ? 心当たりある?』

む? 何やら必死だな。

「はいはい。例えば何があるのかな?」

『えつと、木々の声つてゆーのが代表的なものだけど……』

木々の声ね。うん、確かにそんな感じの起きたら手に入れてたかもね

……つて

「え、うわ、やだ、まじ?」

『あ、やつぱり?』

「こいつおでれーた。

木の間にじが本当にまじでやつぱり木と会話してたわけ?
なら、あの変態行為も……

「色々まんがつた。許してちょんまげ」

『……うん、許すよ。あと、くわんこ』

なにかとあれあれおつわんせ初めて誰かと会話が出来ました。

おっさん、大樹と話す

おっさんは今、森の奥へと向かっている。

厳密には奥とかそういうのはおっさんにはわかんないけどクドゴリ
ン247526（毒の果実の木）が言つにはおっさんが向かう方角
は森の奥らしい。

そしておっさんがなぜ森の奥に行くかと言つと、森の奥には森の木
々の中でも長老的な存在がいるらしいからだ。

なんか「樹齢一萬年を軽く越えるから物知りだよ」とのことだ、年
功序列なおっさん的にも話を聞くのは悪くないと思ったからだ。
道中で道に迷いそうだったらそこいらにある木に聞けばいい。とゆー
か木達はおっさんに結構フレンドリーだ。

曰く、「木仲間以外で話をするなんて滅多にない」とのこと。
全くないと言う奴は全体の三割ほどらしく、時たまおっさんみたい
な木々の声のスキルを持つ者と会話したことある奴もいるわけだが。
そいつらの話を聞くと、どうやら人間やエルフという耳が長い人間、
獣人という獣臭い人間がいるらしい。いや、エルフとか獣人は人間
に数えんのか？と突っ込んだが、どうやら木達にとっては一足歩
行、ある程度の知性の二つがあれば人間としてカテゴライズしてる
らしい。おっさんがわかりやすく解説すると乳牛も肉牛ももれなく
牛ということだ。えつ？ 違う？

それにもこの木々の声というスキルは便利だ。

どこに他の生き物がいるのか教えてもらえるし、何よりどの草が食
えるとか自分の実は美味しいとかを知らせてくれるのが何よりありが
たい。

これで食料を確保するのは楽といつものだ。

そんなこんな進んでいくと開けた場所に出た。

そこには陽光を反射し、キラキラと輝く湖があり、その湖の中央にある小高い丘に大樹が聳えていた。

「綺麗だな……」

どこか神聖な空気が漂つその光景に無意識に言葉が漏れる。

おそらく長老的な木というのはあの丘の大樹に間違いないだろ。おっさんは翅を広げてその大樹の元へと向かった。

エメラルドスタッグビートルに変態（相変わらずこの表現は不服だ）して一メートルほどの高さまで飛べるようになつたのは果たして喜ぶべきことなのだろうか。

「じんにちは

大樹の元に降り立つたおっさんは第一印象が大事とばかりに挨拶をする。

いや、まじで第一印象は大事よ？

対人関係なんて第一印象で物事が進むからね。ただし、第一印象が悪いとそこから挽回するのは大変だけど、第一印象が良いとこれから悪くなる場合は前者よりもかなり早いことも付け加えておく。

『ほむ、じんにちは

おっさんの挨拶に大樹が返す。

『話は根っこワークで聞いとるよ。して、何をわざに聞きたいのかね？』

ちょっと待ちなさい。

根っこワークって何やねん。ここはツツコむべきか？いやいや、初対面の相手、しかもかなりの年上にいきなりツツコむとかどうなのよ。

でも、上司が「今の若者はわからなくても人に聞くところがない」とてちょいギレで愚痴つたりすることから考えれば、ツツコミはしなくともわからないなら聞くべきか。

そもそも大樹も聞きたいことがあるなら聞けよ的なスタンスみたいだしな。

「まず、第一に根っこワークってネーミングは誰が付けたんですか？」

知りたいのはこれだ。

根っこワークの説明？ んなもんネットワークにかかつたもんだろ。それを根っこで行つから根っこワークだ。予想でしかないけど多分合つてゐるはず。

『ほむ、難しいことを聞くのう。根っこワークは根っこワーク。昔からそう呼んじた。特に意味はない』

『簡潔な説明ありがとうございました。お蔭様でよくわかりました

上

大樹に対して礼を言う。なんか嫌味に聞こえるかもしけないな。でも納得はしてるんだよ？ 意味のない名称なんてあるところにはあるわけだし。これもその一つなのだろう。さて、次の質問に行こうか。

「それで次に聞きたいことなんですが、ここって何処なんですか？」

ある意味これが一番聞きたいことだ。

他の木々に聞いても同じことが返ってくるだけなのだが、もしかしたらこの大樹なら

『ほむ、なんじゃ、自分が暮らしてる場所もわからんのか？　ここはミズドリウムの森じゃ』

しかしこの大樹もまた他の木々と同じ言葉を返す。

確かに、『ここ』という場所を表す言葉ではあるがおっさんが聞いたいのはそういうことじゃないんだよね。

「聞きたいのは森の名称じゃなくて、『ここ』が何処の国に属しているとかなんですけど、ご存知ありませんか？」

当然、この質問も他の木々で試している。しかし、返ってくるのは「わからない」ばかりだった。

『ほむ、確かプリオーレ国じゃったかの……五千年くらい前の話じやが』

知っていた。

大樹は自分が生えてる国を知っていた。ただし、五年前ではあるが。

五千年つたら縄文時代とか弥生時代とかまで遡るよな？　もしかして類人猿？　おっさん、歴史は苦手だからわかんない。でもそんくらい昔の話。

さて、プリオーレとか言つやたら可憐らしき国におっさんは心当たりがない。しかし、もしかしたら過去にあった可能性も否定できない。だが、見たこともない生き物やエルフや獣人ってことから、ここは

ファンタジー世界だという可能性がおっさんの中では一番大きい。まずはこの辺を確かめるか。

「地球とか日本、アメリカ、中華人民共和国、アフリカ、ソビエト連邦、オーストラリア、コナイティッドキングダム・オブ・グレートブリテン・アンド・ノーザン・アイルランド。この中で一つでも聞いたことのあるものはありますか？」

『ほむ……残念ながらわしの記憶にはないのう』

「根っこワーク使つてもですか？」

『ほむ、ちょっと待つおれ……なんじやつたかのう？』

もう一度、今度は一つ一つ聞いてみる。

十分ほどの沈黙が流れ、おっさんの目が空の雲の動きを追っていると不意に大樹に声をかけられた。

『ほむ、残念ながらわしの根っこワーク圏内にはわかるものはおらんようじや』

ほむ、誰も知らないか。あつ、移つた……おっさん、ドントマインド。

まあ、大樹には悪いがあまり期待してなかつたけどね。

これでおっさんのファンタジー世界じゃね？ って想いがちょっと大きくなつた。ちなみにおっさんの中では最初からファンタジー世界でほぼ確定している。

だけどどつかの誰かが言つていた何事にも絶対はないの言葉を尊重してそうちつたらいいなどばかりに地球のどこかだという余地を僅かに残しているに過ぎない。

「わざわざすいませんでした。そういうえばなんですけど、おっさん……私は元々人間だったんですけど、ある日大きな黒いクワガタ……

ブラックキラースタッグビートルでしょうか……に殺されて気付いたらその幼生体になつてたんですけど、その現象に関して何かわかりませんか?』

わざわざ黒とかブラックつてクワガタの前に付けるおっさんはいじらしい存在ではなかろうか。

『ほむ、それは興味深い。この森の主的存在であるブラックキラースタッグビートルに殺された人間というのはわしもいくつか心当たりがある』

『ほ、詳しく述べたいものだ。』

そして主的存在といふことはつまりブラックキラースタッグビートルはおっさん(クワガタ)の父親しかいられないらしい。さて、本邦初公開。おっさんの母クワガタ親の色は灰色である。実際森の中でたまに見かけた両親以外のキラースタッグビートルには實に灰色が多い。

『ただ、森に入つて運悪く奴に出会つたがために殺された人という存在はそこそこいるでな。特定は出来ん』

『あ、えつと見た目は四十手前くらいのオッサンなんですけど……』

『すまぬが特徴を言われてもわしらにはようわからん。それがエルフや獣人、人間などの種族じゃつたらわかるんじゃが個人の特徴は雄か雌かくらいしか……の』

『いえ……』

まあ、それは仕方ないことかもな。

何せおっさんだって木を見て個別に判別するのは無理だ。

それが桜か銀杏かはわかつても桜の木の内のあるこれは傷があるなどの特徴がないと厳しいものがある。そもそも意識して見なければ

それはただの桜としてしか見ない。

……ん? よく考えたらおっさんはやたら田立つはずの特徴があつたじやないか。

「あ、あの! ある日突然森の中に現れた人間。そういう人物に心当たりは?」

おっさんは氣付いたら森の中にいた。

それならば不自然な人物として田立つたはずだ。きっと注目を集めたはず。

『根っこワークで聞いてみよ!……ほむ、確かにいたみたいじゃな』
「マジですか!?」

いかん。興奮して敬語じゃなくなつてしまつた。落ちつけ落ちつけー。

「本当ですか?」

『ほむ、だいたい六百田へりて前にそのような人物がいたそつじや』
「うつ……」

予想以上に前だつたために驚きに言葉が詰まつてしまつ。

『ほむ、すまなんだが目撃したものもよく覚えておらんらしい。何せ紅葉の前じやつたみたいだし、いきなり現れたと思つたらふらーつと歩き出して殺されてしまつたりじくてのう』

「そうですか……」

夢だと思つて歩き回つた結果、でかいクワガタに出会いて死んだわ

けか。

他人（他木?）から見たということを聞いて考えてみるとなんとも
マヌケなことだ。

まあいい。切り替えよう。

なぜならおつさんは最近加齢臭がきつくなってきた身体から入浴剤
の森の香り（エメラルドスタッグビートルになつてからふと嗅いで
みました）みたいな匂いのクワガタになつたのだから
第一の人生、この身体で楽しんで生きていくのじゃないか。

ねつねつ、大樹と話す（後書き）

ヒロインを出せる気配がない……

あと数話は出できません。ヒローかクワガタと木だけだと一～三話やる予定です。

ヒロだけ聞くと昆虫の観察日記みたいですね。

プロットやりしきもので流れはラストまで大体決まつていて、あとは思いつくままに肉付けって感じで書いてます。

早くヒロイン登場まで書いちや いたいけどペースが上がらない……

ああ……早くオッサンに真っ当なセクハラをせてや……

愚痴つてすいません。

読んでくれてありがとうござます。

出来ればこれからも拙作にお付き合っていただければ嬉しいです。

続おつさん、大樹と話す

『さて、わしからおぬしに尋ねたいことがある』

唐突といつわけでもないが、大樹がなにやら物々しげに声をかけてくる。

こうゆう時つて物語だと得てして厄介事に巻き込まれたりするんだよな。おつさんそうゆうのノーサンキューなわけよ。

「黙秘権を使用します」

どうだ！ もつぱりと断つてやつたぜ。

おつさんはノーと言える日本人。上司が帰りに呑みに行こうと言っても奢り以外では行きません。奢りなら限りなく百パーくらいで参加するけどね。

ちなみにおつさんは25歳以上の女性（発育は平均以上）でないと興味がないので「新入社員の若い女の子達も来るんだよ」と言つ誘い文句に踊らされない。ただし、「中川さん（36歳・既婚）も来るみたい」にはほとほと弱い。中川さん、美人で胸がでかいからね。おつさんの好みどストライクなのさ。人妻？ おつさん的にはその響きは世界一のバイオリニストの演奏並におつさんの心を奮わせます。

ただ、肩にポンと手を触れただけで「セクハラですよ」と言われるのはいかがなものか……

その癖、他の社員の男（美形）に同じことされても「なに、偉そうにしてんのよ」とがまんざらでもない顔で言つんだよね。

不快感を感じたらそれすなわちセクハラ。日本政府よ……ちゃんと境界線を決めてくれ。あつ、今居るのはたぶん日本じゃねーからおつさんには関係ねーか。

『して、何を尋ねたいかと言つとじやな』

ん？ あれ？ おっさん黙秘権使つたよね？
なんで話が進んでんの？

『人という種についてじや』

「はあ」

言つちやつたよ……

こつちが黙秘権使つてゐるのに聞いてきやがつたよ。
これ、もう聞くしかなくない？

「どうゆう事ですか？」

『ほむ、人という種になりたくはないかといつとじや』

よくわからん。

でも、なりたいかと聞かれればなりたいわけだが……

「なれるんですか？」

『可能性の話じやが……わしが見たところ、おぬしには人という種
になれる可能性が高い』

「どちら辺ですかね？」

『その前に人という種がどうやって誕生したか知つとるかの？』

人がどうやって誕生したか。

これは歴史が苦手なおっさんでもわかる。

猿から類人猿。そして類人猿から人へと進化していくことで人が誕
生したはずだ。いわゆる進化論だな。

まあ、アメリカなんかじや神様が全て造つたと言つ創造論を信じて

る奴がかなりいるらしいが、おっさんは断然進化論を信じてる。

「えーと、神様が造った。または別の生き物から進化した。この二つが考えられますが、私は後者だと思います」

『そう、それが正解じゃ』

正解って言われた。クイズだったの？

『人という種は進化によって元よりも優れた力を得た。まずははじめに妖精の中から進化した最初の人という種が現れ、自らをエルフと名乗った。次いでエルフが作り出した無機物に命を吹き込んだ物、つまりはゴーレムから人に進化した者が現れ、ドワーフと名乗った。次に四足の獣の中から進化した者が生まれ獣人と名乗り、その次は水の中で生きる者から進化した者は魚人と、最後に二足で歩行する猿は人間と名乗ったのじや』

「そうですか」

だからなんだよって話。

つーか人間はやっぱ猿から進化したのな。獣から進化した点では獣人とやらと同じだが、きっと獣耳がないのだろう。あとは、見たことないからわからんね。

『その進化した条件はなんじゃと思う?』

「さあ? わかりません

『少しは考えて欲しいんじゃがな。まあ、よい。人に進化したものにはある共通点があつたのじや。それは……知恵と魔力。そしてその魔力を扱う技術じや』

「なるほど」

わかつたようなわからないような……

で、それがなんでおっさんが人になりたいかどうかの話に繋がる？

『わしはおぬしを見て、言葉を交わした。その結果、おぬしは人と同じような知恵を持つていてわかった。いや、おぬしの言葉を信じるならば人であつた存在がスタッグビートル種へと知恵をそのままに生まれたことになる』

「……要約すると？」

『わしは長年生きてきた。そのうえで、初めて人へと進化できる可能性を持つ虫を見つけたのじゃ。じゃからおぬしが人に進化したいと言つのならば、手を貸そうと思つての』

「なんでそんな一文の特にもならないことを？」

ぶつちやけ裏があるだろと勘織つてしまつ。

おっさん、これでもドロドロした大人の世界にいたからね。これまで親切にされることに抵抗感があります。

『ほむ……いいじやうづ、話してやうづ。まず、最初にエルフに進化した者はタファンの森という場所に現れた。ドワーフもタファンの森が最初じや。次に獣人はバコタの森で生まれたのじゃ。魚人はどつかの海。人間はテロンの森の猿が進化した種なのじゃ』

どこので進化したとかどづでもよくな?

『で、根づくワークで一年に一度超長距離根づくワーク会議があつての』

もはや根づくワークはどづでもこいんですけど

『あいつら何年経つてもそのことを自慢げに話して悔しいんじやー』

……は？

『じゃからおぬしを進化させて、新たな人の種に立ち候つ』とて自慢したいんじや。じゃから、な？ 一緒に頑張り？』

『いっ、他の木に自慢してーだけかよ。

『やつてやつてもいいけど、世の中はギブアンドテイク。おつさん が進化することであんたは他の木に自慢出来る。だけどおつさん あんたは何をくれるわけ？』

おつさんの中で大樹のランクが下がつたことで発言がかなりおざなりになつた。

ちなみに人に進化出来るならそれだけでおつさんには利益がある。しかし、相手にお前が言つから仕方なく進化してやるんだぜつてスタンスになることによつて恩着せがましく、もつと色々な物を引き出さうとこ狡い活動中です。

『ほむ、それは進化できてから決めよつではないか』

……腐つても（物理的には腐つてないけど）一万年以上を生きる大樹か。

ここで了承すれば、進化出来たとしても「ほむ、進化できたんならそれで十分じゃないかのう」とか言い出す畏れがある。なんとしても言質はとつとかねーと。

「なんか役立つもんくれ」

『とは言つても、所詮わし木じやし』

「一万年生きてるならなんかあるだろ」

『ほむ……そりじゃな。ならばわしの力を『えよつ』

「『える？ どうやつて？』

『わしの力を濃縮して実を付けるんじゃよ』

おっさんには大樹が不敵に笑つたような気がした。

続おっさん、大樹と話す（後書き）

まず初めに、この物語はファンタジーです。
猿から人に進化するには何十年、何千年、何万年かかったとか言つ
ツツコミは聞きますん。

なぜならファンタジーだからです！

大切なので一度言いました。

納得できない部分はこれでどうにか誤魔化してください。

なお、ファンタジーでも説明出来ないような疑問があれば質問はありです。答えるかどうかは別ですが……

ただ、出来る限りは答えるたいとは思います。

作中に出できた中川さんですが、私の書き方のせいで感じ悪い人に見えるかもしねないですけど、実は悪いのは全部オッサンだつたりします。一人称なのでそこらは書けませんが、悪いのはオッサン。これだけはわかつて欲しい。

ちなみに裏設定では中川さんはオッサンと同期入社。
機会があればそこらも書こうかな……

おっさん、修業する

その後、大樹によつてプロトコースされたおっさん進化計画が実行に移された。

人になるために必要な物は、知恵・魔力・魔力を扱う技術の三つ。その内、おっさんは知恵の面はクリアーしている。

しかし、魔力に関してはさっぱりなのでそこを一から習得していくことになった。

以下はおっさんの魔力を感じられるようになるための修業のメモリアルです。

『まずは体の内に眠る魔力の波動を感じるんじや』

「……具体的な説明を求めるます」

『カーッとやって、グーッとする感じじや』

『カー……？ グー……？ 擬音つて本人以外にあんまり伝わんね

ーよ。おっさん感覚派じやなくてわりと論理派なとこあるし』

『ほむ、そうじやのう……己の中にあるドロドロしたものを吐き出すかんじかの？』

『わかった。部長のハゲーッ！ ジラの癖に偉そうにしてんじやねーよ！』

『言葉の意味はよくわからんが多分違うぞ？』

『あなたの言つた通りにやつたんだけど？』

『違う。魔力はもつと熱いもんじや。ーう……人で言つ情熱的なパトスつて奴なんじや！』

『それならおっさん得意だわ。すう……イメクラで赤ちゃんプレイとか女教師プレイがしてーー！』

『それも違う』

などといつ、客観的に見ればなにやつてんの」にこれら的な押し問答を三回ほど繰り広げた結果、

おっさんは

魔力を

感じられなかつた。

つーか当然だよ。

おっさん今まで魔力とか言つのと無縁だつたし、なにより教師役の大樹がクソの役にも立たない無能だ。

おっさんは悪くありません。

『ほむ、おぬし才能ないのう』

ぐおっ、面と向かつて言われるとは……

はいはい、正直「魔力を感じるくらいなら一日で出来るよ」になるじやる」とか言われていい気になつてましたよ。

薄々、おっさんには才能ないなつて思つてました。

しかし、あれだな。へこむわ。俯くほどじやねーけど、暗い気持ちにさせられる。

『落ち込むでない。内的魔力はダメじゃつたが、まだ外的魔力があるわい』

大樹の言葉によつておつさんの暗かつた視界に一筋の光が差し込む
よつな幻が見えた。

「その話を詳しく述べ

『今までの修業は「己」のうちにある魔力、つまりは内的魔力を感じる
ためのものじやつた。しかし、他者から放出される外的魔力を吸収
し、己の物とする。利点は魔力の波動がわかりやすく、扱いやすい
事じや』

だつたらなんでもつと早く教えてくれないのかと思うが、教えなか
つた理由つてものもあるのだらう。

利点があるつてことは欠点もあるだらう。

「よし、教えてくれ

だがおつさんに迷いはない。

なぜなら早く人になりたいからだ。

いやー、声に出してからイメクラ行きたくてたまんねーのよ。もつ
おつさんの体内時間で四ヶ月は行つてねーもん。

でも、クワガタとお医者さんごつこがしたい女性がいるだらうか？

クワガタなおつさんを鞭でシバき倒しながら罵倒してくれる女王
様がいらっしゃるだらうか？

もしかしたら世界のどこかにいるのかもしれない。だけど探すのは
めんどくさい。

だからおつさんは人にならなければならぬ。

『ほむ、覚悟を決めた良い田じや。しかし、難しいぞい？』

「望むところだ」

あつと大樹には今のおつさんの姿がイケメンに見えてるに違いない。

気持ち真面目な顔してつし。

『外的魔力を扱う上で、まずは魔力の色について説明しようかの』
そう言つて大樹が説明してくれたことをおっさんなりにまとめてみると

魔力には五色の色がある。

それは赤・青・黄・緑・無色の五つ。

赤は火を司り

青は水を司り

黄は地を司り

緑は風を司る

無色はそのいづれにも属さないものであるが、何物にも染まつてい
ないために応用性の高い代物である。しかし、その力は他の四色に
比べれば圧倒的に小さい。

あとは赤は青に弱く、青は黄に弱く、黄は緑に弱く、緑は赤に弱い
というジャンケン的な相性もあると教えられたが、そいつは今あま
り関係ない話しながらどうでもいい。

外的魔力を扱う上で最も大事なのが無色の魔力だ。

これは太陽から降り注いでいるらしい。ちなみに月からも魔力が降
り注いでいて、こちらはかなり純度が高いそうだが太陽と比べると
千分の一千くらいの量らしい。

つまり、おっさんが外的魔力を扱うためには

『イメージじや。『』の葉緑体に光を取り込むかのように魔力を取り込むイメージじや』

無茶を言いなさる。

おっさんはひなたぼっこはしても光合成はしたことありません。

『いへ……太陽よ、わしに力を分けてくれなスタンスで挑むのじや』
どこの野菜人だよ。

いや、あればダジャレ好きの人『元祖の技だつたつけ？

「太陽よ、おっさんに力を分けてくれ」

とりあえずやつてみた。

物は試しつて昔の人も言つてたしね。

……しかし何も起こらない。

「つおおお！ 猛ろ！ おっさんの葉緑体！」

当然、何も起こらない。

「太陽様、なにとぞこの矮小なるおっさんに力を分け与えてください」

下手に出てみた。

だが、何も起こらない。

「いいぜ。いつまでも付き合つてやる」

「いや、長期戦だなとおっさんは覚悟を決めました。

あれから半年ほどの時間が経つた。

その間のおっさんの視線はほとんど空にあった。

晴れの日は太陽を睨み、曇りの日は邪魔だとばかりに雲を睨みつけ、雨の日は天然のシャワーを楽しんだ。

いや、全然冷たく感じねーの。しかもおっさん、洗車して撥水コートしたての車の「ごとく水と汚れを弾きまくり。湖に浸かるのもいいけど、シャワーは痛快だ。毛穴までしつかりクル。大粒の雨の打撃が心地いいです。

閑話休題

この半年間、何度となく外的魔力の吸収を諦めようかと嘆いた。

その度に明日とともに現れる太陽さんが「小僧、貴様はやはりそれっぽっちの存在か」とやたら渋い声で話しかけてくる（完全なる幻聴、妄想の類）

そんなとこがおっさんの負けん気をくすぐる。

いつしかおっさんは日の出から太陽さんを出迎え、お願ひしますの声と共に日の光を浴びながら魔力を吸収するイメージを持ち続け、日の入りでありがとうございますと言いながら太陽さんを送り出すよになつた。

まあ、結局何が言いたいのかというと努力は人を裏切らないってこ

とだね。

【ヒメラルドスタッグビートルは無色の魔力吸収のスキルを得た】

これだよ。あるロボーンと久しぶりのこの声だよ。
もつおつさんしばらくは太陽見なくていいや。

何がお願いしますだよ。そして何がありがとうござりますだよ。所詮、おつさんと太陽の関係は勝手に魔力を排出してる側とそれを有効利用させてもらつてる側つてだけでしかない。

太陽が地上の一生物でしかないおつさんをピンポイントで見てるわけもねーわけだし。

なにより、おつさんはオッサンであつてまだジイさんじゃないわけよ。早寝早起きは柄じゃねーわ。
んじや、寝よつと。

『よし、弟子よ。修業を次の段階に進めるぞい』

最近、すっかり師匠気取りな大樹が話しかけてくる。
スキルを得たことでテンション上がつて報告したのは失敗だつた。

「いや、おつさんは寝る」

そもそもと巣に入る。

築一千年強の木造。たまに話しかけてくるけど住み心地は悪くない。
そんな物件。

「大樹。休息のために十日ばかり時間をくれ」

そんなことを言いながらおつさんは意識を睡眠モードへと移した。

おじいさんの母に聞いた『ニキ、畠山から渡る船のねらい』とこの歌は
寝てて聞いたなかつたといひますと云ふ……

おひしゃべり修業する（後書き）

要約するとオッサンが変なこと考へながら半年間ひなたぼっこに熱中した話でした。

次話で進化かな……

ある意味オッサンの進化までが序章です。

おっさん、進化の条件満たす

修業したがりの大樹をばぐらかし続けて三日。

大樹がうるさいために予定より短い期間となつたが、銳氣を養うことは出来たため、おっさんはいよいよ魔力を扱う技術を修業する。

と、その前におっさんも半年間ずっと空ばかり眺めていたわけじゃない。日の入りから日の出までは約十一時間くらいあるので、その間に大樹に色々聞いたのだ。

その中から一つ説明せねばならないものがある。

一つはスキルというものについてだ。

とは言つても詳しいことはよくわからないうらしい。
だがしかし、スキルを得るには修練や経験がものをいうらしいといふことはわかつていて。そしてスキルを得た瞬間にいつでもそれに即した行動をとることが出来る。

例えば、必死で剣を振りつづければ剣術基礎スキルを得る。これは修練により得たスキルであり、今まで野菜くらいしか切れなかつたのに直径十センチくらいの木なら断ち切ることが出来るようになるらしい。更に色々な修練をつめば剣術スキルになり、剣豪スキルに変わり、剣鬼、剣聖と変化していくみたいだ。また、その過程で剣技という必殺技を得ることもあるのだが、これもスキルとしてカウントされる。

あとはおっさんが持つてる毒とかの完全耐性。こいつは修練の面がないとは言えないが、基本的には経験から会得するスキルだ。やら毒を食つた結果、体の中で「これ毒あるじゃん。分解しようぜ」つてな具合にやってくれてるみたいだ。

習得するスキルの種類は常時発動型と意識発動型、そして種族特有型の三つがある。

内容は読んで字の「ごとく」であり、前者の一つは誰であっても会得出来ると言われている。最後の種族特有型はその種族なら最初から持つてゐるが、他の種族の者が会得するのは難しいみたいだ。

ちなみにおつさんの木々の声のスキルは多分種族特有型であり、他の種族は大樹曰く森にずっと住み着き、植物に話しかけ続け、人格的に優れた者が会得することがあるらしい。このスキルはエルフとか獣人の中に一世代に必ず一人は会得する奴が出るみたいだ。

さて、簡潔ではあるがこれがスキルの説明だ。なにかあれば後ほど詳しく述べる部分もあるかもしれない。

次にスキルを得た時に聞こえてくる【】の声について軽くだが説明しよう。

とは言つても難しく考えるようなものではなく、世界を見守つてゐる神様の声だという説が一般的（木達の中で）だ。人ならば違う見解を示していたりするのかもしれないが、おつさんもこれでいいと思つ。

とゆーかこれ以外になにがあるの？ つて感じ。おつさんの妄想つて言わればそれまでだけど、大樹も昔は聞こえたつて言つてゐるからおつさんの妄想説は否定させていただく。

ファンタジーなら神様が実在してるとかは十分有り得る話だ。以後、この声のことを天の声と呼称することにしよう。

では、魔力を扱う修業編に行こう。

「ふうう～、こおおお～、ぬううん～」

湖に漫かりながら唸るように腹の底から発声する。気分的には気功の達人みたいに気を練つていくような感じだ。

あくまでも気分だけの問題であつて大した意味はない。

さて、なぜおっさんが湖に漫かりながらこんなことをしているのかと言つと、魔力を扱う技術として広く知られているものの内の肉体活性を会得するための修業の一貫だからである。

肉体活性。つまりは魔力を使つてのドーピングだ。これが出来れば肉体の限界の枠を越えた動きも可能となる。ただ、見た目や実感的なものがわかりにくいために湖に漫からせてもらつてる。

とゆうのも目には見えない魔力の波動というものであつても、流体である水には波という形で影響を与えるからだ。視覚的にはわかりやすい。

そして今現在どうなつてているのかと言つと、おっさんを中心として波が立つてゐるわけだ。

……おっさんが動くのにあわせてだけね。

水に指を突つ込んだら波打つ。これは当然のことである。

ただし、魔力の波動で波打てばもっとすごい感じになるらしい。つまりはおっさんはまだ魔力を使っての肉体活性に成功していないわけだ。

「はあああ……ダメだ、出来る気がしない

『まだ一日目じや。諦めるには早いぞい』

「なんかコツとかないわけ?」

『コツと言つても、体内に吸収した魔力を体中に行き渡らせるだけの話じや』

それが簡単に出来たらコツとか聞きました。
つーか無理。どだいおっさんには無謀な挑戦だ。

『まずははじめに吸収した魔力が今どこにあるかはわかるじやない?』

もう諦めてバツクレようかと思つていると大樹が今更なことを聞いてくる。

吸収した魔力の存在はなんとなく感じられる。なんか飴玉を丸呑みしたみたいな変な感じが体内の一部分にあるからだ。

「わかるよ」

『それを体中に送つてやればよい』

「だから、それがわからんのよ。ビツヤツてやればいいわけ?」

『バシュウヒヤツヒギューンじや』

抽象的過ぎる……

もういいや。自分で考えてなんとかしよ。

イメージ。イメージが大切だ。

魔力を体中に行き渡らせるイメージ。

しかし、魔力とは無関係だった生を謳歌していたおっさんにはちよつとわかりにくい。

ならば魔力を電力に置き換えてみよう。そう、つまり今のおっさんは電池を積んだおもちゃだと思うことにする。

今はおもちゃに電力が伝わっていない状態。だから一切おっさんは動けない。

おっさんの動きによつて波立つ水が静まつてくる。

そして電池をプラスマイナスきちゃんと確認した上で差し込むと導線を通つておっさんの体に電気の道が通る。

そんなことをイメージした。

すると、おっさんの周りの水が波立ち始める。徐々にその波は大きくなっていく。

『ほむ、出来たようじゃの』

大樹からも合格をもらつた。

これで、おっさんは、人へと……進化する！

『さて、次じゃが……』

ですよねー。

肉体活性が出来ただけで進化出来たら苦勞しませんよねー。天の声も聞こえねーし。

『魔力を使つたスキルを使用するのじゃ』

「なるほど」

『はつきり言うとこれが一番難しいぞい。なにせ、使いたいスキルの明確なイメージがなければダメなのじゃ。人の間では弟子をとつたりしてスキルを伝えていくなどしてるそうじゃが、わしにはおぬしに伝えるべきスキルがない』

魔力を使つたスキルっていうと魔法か？

まあ、木がそんなもん持つてたらそれだけですげーわ。

それにしても魔法か……魔法つてステッキとかコンパクトミラーがないと使えないだろ。あ、これは魔女っ子の話か。

つーかよく考えたら魔法のアイテムとかあっても持てねーわ。

とりあえず、なんか魔法的なものをイメージすればいいんでしょ？どうすつかなー。

あ、やべ……思考がかめ〇め波にしか辿り着かねーわ。魔法ではな

いけど魔法的な感じだしな。

おっさんも男の子つてことだね。

「かーめー○ーめー……はーつ……」

ジールアーツ

え、うそ……なんか出でちゃいました。

おおきいの目の前の海の力が喜れば
それでも止まらぬ力めの沙
は突き進む。

め彼女、消えろ!!

おつさんの願いが届いたのかかめ○め波は木に届く前に消えてくれ

「うう、なんとかなつたか。

【エメラルドスタッグビートルは魔力波のスキルを得た】
【エメラルドスタッグビートルは進化の条件を満たした。進化する

か
?

天の声まで聞こえた。

なんか進化するか?
とかやたら馴れ馴れしいな。

しかしヨハネは既に世人は進化で物語へになつたので

『まさかこんなに早く習得するとはのう……おぬしには魔力を扱う

「才能があつたようじゃの『
……それほどでも

他に比べれば時間がからなかつたのは確かだが、こんなんでいいの？

『よつぽどスキルをイメージする力が強かつたに違いないわい』

それはあるかもな。

昔は胸が熱く燃えたものだ。いや、今もなお胸を熱くさせる作品だ。

『ならば、次の修業なんじやが……』

「あ、ちょい待ち。おっさんもう進化できるよ」

天の声は本人にしか聞こえないため、大樹は次の修業をはじめそうになつたので止める。

『え、嘘……マジ?』

「マジだ」

『まさか本当に進化出来るようになると?』

なんか聞こえたような気がするけど、気にしないでおい!。

【進化するか?】

おつと、再度天の声から催促がかかつた。
悩む必要はない。

おっさんは天の声に高らかと宣言した。

「進化するー!」

そう宣言すると同時におっさんの体が熱くなつた。湖に浸かつていたためにおっさんの濡れた体から水が水蒸気となつて蒸発していく。頭がフラフラしてきた。

呼吸も、心臓の鼓動も早くなつていぐ。

ついに彼の心から意識を手放した。

おひやご、進化の条件満たす（後書き）

書き終わってから、ふとクワガタに心臓つてあるのかと疑問に思つてしまつた。

調べた結果、どうもないらしい。似たような働きの器官はあるみたいだけど……

でも、あえて書き直したりはしないです。

なぜなら主人公もクワガタには心臓がないと知らないからです。似たような器官（背脈管といつらじこ）を心臓と勘違いしているとつてください。

おひさん、進化後の姿を見る

暗い視界

奥までどのくらい遠い距離があるのか、それともすぐ近くにあるのか

そんなことすらわからぬに闇の世界

何も見えず、何も聞こえない

だがそこに何者かの気配を感じる

「あんたは誰だ？」

問い合わせる言葉に返答はない。

「おひさん、話し相手が欲しいんだけど？」

やはり何も答えてはくれない。
もしかして気のせいなのか？

よく心霊番組とか見た後に眠りつと布団に横になつた時に何者かの
気配を感じてしまうことはないだろ？ おひさんはよくあるタ
イプだ。

だから今回もそんな感じのアレなのかもしれない。
沈黙の時間が流れる。

＜ ちた 星 つ ＞

何者かが言葉を発した。

どうやら何者かの気配はおっさんの『氣のせい』ではなかつたようだ。
しかし、不意打ち過ぎてよく聞き取ることが出来ない。

「 もう一回囁ひてくれ。ワンモアセイプレーーズ」

＜落ちたる星は一つ ＞

正直意味不明だ。

「 こつは句を言つてこむのだろうか。

「 もう少しわかりやすく言葉を頼ります。オッサンが皆物知りつて
わけじやないんだからさ」

＜一つは強き光を放ち、もう一つは鈍く光る ＞

「 なあ、何言つてこの？」

＜強き光を放つ星は混沌を導いた ＞

「 聞けつて」

＜鈍き光を放つ星は新たなる道を拓いた ＞

「 おこひひ、おっさんを無視するんじやあつません。含蓄はないか
もしれんが時たまいいこと言つんだぞ？」

「混沌を導きし星にはその存在が混沌で身を滅ぼさぬよう既に悪意から「」を護る最強の盾を受けた」

もつといよ。

「「」のオッサン、マジうざーー」とか思つてんだろ。

言つとくけどね。おっさん、女子高生とか全然興味ないからね。

諭吉三枚でどう? とか言われても断固跳ね返すから。つーか説教するから。

英世さん一人の超安値だとしても……行つちゃうか? いやいや、行かねーよ。むしろ勃たない。あ、別に歳のせいとかではなくて性癖的にノーサンキューなんです。

「故に新たな道を開拓せし星にはその存在が途切れぬよう再生の泉を授ける」

なんの」とや。ひ。

「一つの星は交わりて互いを滅ぼさんとす

「地上で輝ける星はただ一つなり」

「最後に輝くのは強き光か」

「それとも鈍き光か」

「世界は星の答えを待つてゐる」

【エメラルドスタッフビートルは新たな種虫人に進化した】

ムシピート

【虫人は再生の泉のスキルを得た】

【虫人は昆虫形態のスキルを得た】

【虫人は千里眼のスキルを得た】

【虫人は剛力のスキルを得た】

「んう……」

田を開けるとそこには透き通るような青い空が広がっていた。

『おお、田覚めたよ! じゅな』

聞き慣れた声が聞こえて来る。

声のした方へと顔を向けてみると顔の右側が水に浸かってしまう。

「『ゴホッ、ゴホッ……うえつ、気管に入った』

慌てて起き上がり、手を口へと当てて咳込む。

そう、手を口に当てるのだ。

クワガタだった体では出来なかつた行為。

口から手を離してまじまじと見てみる。

指は五本。関節の数も人間と一緒にだ。

ただ、その手の甲や腕には無骨なエメラルド色のガントレットのようなものが接着している。

次に体を見てみる。

こちらはガントレットのようなものと同じ色の鎧みたいなものを着ていた。いや、この鎧みたいなものこそがおっさんの体のようだ。

だって、股間に赤黒いカブトムシの頭部が付いてるらね。

クワガタだったのにカブトムシが付くとはこれいかに。

足も同じく脚甲のようなもので覆われており、どこに戦士やねんと思わぬもない。

手の平や足の裏、太股の内側などは装甲みたいなものに覆われておらず、やや赤みがかつた薄い黄色の皮膚が見える。感触も色も人間だった時のものと変わりない。いや、ちゃんと肌にハリがあるかもな。

つーか顔は？

顔はどうなつてんの？

おっさんは水面に自分を映して見てみた。

そこにいたのはどこぞの特撮ヒーローの方ですか？ と思つてしまいそうな存在。

顔はフルフェイスの兜のようであり、そこの一丁度人間の目のある位置に切れ長の鋭い赤い目らしきものがある。んでなぜか口の周りだけ剥き出し。エメラルド色の頭の頭頂部にはクワガタの顎を模した二本の角が生えている。

もう一度言つぞ、どこの特撮ヒーローやねん！

え……嘘。これが虫人とやらの姿？

つーかこれで人を名乗るわけ？

あ、でもちょっとかつちよいかも……

でもでも、下手したら悪の怪人に見えなくもないかも。

うーん、この頭つてヘルメットみたいに取れたりすんのかな？

……無理だった。

つーかそれより股間つ！

何か隠すもの探さないと……

『二口も黙つとるから心配したせい。もう大丈夫かの?』

おつと、大樹の存在を忘れてた。

つか……

「そんなに眠つてたのか?」

『そつじや』

どんだけ寝てるんだよ。

とゆーかあれは夢だつたんだろうか。

『それにしても無事に進化出来たようじやの』

「ああ。とりあえずなんか下半身を隠せるものないか?」

『すまんが葉つぱくらいしか……』

オーマイゴッヂー。

んでも無いよりマシか。

そして大樹から一番大きな葉つぱを受け取り、下半身に当てて蔓で固定する。

これでひとまずは安心だ。

「ふう、恥ずかしかつた……」

露出狂でもないのに下半身丸出しあきついものがある。
おつさんは衣食住足りてる日本人なわけだしな。

『それにしても……けつたいな存在になつたの?』

『カツコイイじゃん』

『ほむ、本人が言うのならわしがどういひづつべきではないな』

『そつしてくれ』

そつまつ ひおひさんは湖から出て肩を回して歩いたり、走ったり、スキップしてみたりと体の動きを確かめてみた。

うん、久しぶりに一本足で活動したけど違和感とかは全くない。

「絶・好・調つ！」

無駄に叫んでしまった。

『ほむ、それは良かつた。では、約束通りにこれをやひつ』

大樹がそつまつと遙か頭上からグレープフルーツ大の紫色の果実が落ちてきた。

それは万有引力に乗つ取り、かなりのスピードで地面に落下したにも関わらず一切傷が付いていない。

なにこれ……めちゃめちゃ怪しい。

「これは？」

『食べればわかる』

ますます怪しく思うが、さすがに今更大樹があつさんをどうこうしようとは思つていなはず。

とゆーか毒でも大丈夫だし。

そう思つた時不安は消え、果実を一口口にしてみる。

果実を一口噛むと甘酸っぱい果汁が口の中に溢れる。ぶつちやけつまい。

貪るように一 個を完食してしまった。

【虫人は斬撃無効のスキルを得た】

食い終わったと同時に天の声が聞こえた。

『どうじゃ？ つまへこつたかの？』

「これって……」

『わしが長い生の途中で伐採されないために身につけたスキルを実として落としたのじゃよ』

そんなこと出来るのか？

いや、実際やつたんだから出来るんだろうな。

それにも斬撃無効とは……木としては生睡を飲み込むほど欲しいスキルではなかろうか

『今更わしを伐採しようとする醉狂な奴もおらんから気にせず受け取つてくれい。おぬしがわしの我が儘に付きあつてくれたこと本当に感謝するぞい』

「こや、いかがりこり色々教えてもらつて……」

『といひでじやがー』

大樹に礼を述べようとしたところ、遮るように大樹が割り込んできた。

「……なに？」

せつかく礼を述べようとしたところを遮られたのは若干不機嫌だ。

つーかおつせんの感謝の言葉を聞けよ。
なんかモヤモヤすんじゃん。

『おぬしが起きる前に臨時で超長距離根っこワーク会議を開いて他の木に自慢したらの、皆して嘘じやとか言こおるんじや』

「……で？」

まあ、なんとなく先の展開が予想出来るが。

『じゃから他の木におぬしの姿を見せてやつてくれんか？』

大樹の願いにどう答えるべきだらうか。

進化出来たのは大樹のおかげだし、願いを聞き届けてあげるのはやぶさかではないが、めんどいんだよなー。

「保留で」

『そこをなんとか』

「えーでも～……」

『タファンの森の大樹だけでいいんじゃ』

タファン？

えーと、確かエルフとドワーフの生まれた森だけか。つまり一番自由慢できる立場にいる奴つてことか。

『別に期限は定めん。ただおぬしが生きてる間にタファンの大樹に会ってくれれば良いのじゃ』

結局おっさんは大樹の願いを聞き届け、タファンの森の方向へと旅に出ることになつたのだった。

おひさご、進化後の姿を見る（後書き）

さて、オッサンの進化後の姿はどうでしたでしょうか。

私の中では

クワガタ系仮面ライダー + ビーファイターのクワガタ + ライダーマンそしてライダーで言う装甲が無い部分が肌つて感じみたいなビジュアルです。

最初は完全なるライダー系の容姿を想像してたんですが、やはり『人』なので『人』の部分がなくちゃねつてことで今のイメージになりました。

まあ、あくまでも作者のイメージなんで細かい部分は読者様のイメージで考えてもなんら問題ありません。

ただ、鎧みたいな着てて、頭にクワガタの顎みたいな角がある、エメラルドグリーン。この三つだけは外せません。

さて、あと五話以内にヒロイン出せるかなー？

ヒューかヒロインを出す前にあらすじをきちんと書こうと思います。ヒューのも投稿するために適当に書いたものなので……

ねつねつ、人と田舎の（前書き）

今回、会話文がちょっと読みづらいかもしません。ニュアンスだけでも読み取って頂ければ幸いです。

おひさご、人と田舎つ

大樹の願いからタフアンの森に向かうことになつたおひさん。
めんどくさいけど、生きていらつに行けば期限は定めないらしい、
ゆっくりと行こう。

そう思つたおひさんはクワガタとして生まれ育つたミズドリウムの
森を散歩するよう歩いていく。

インセクトフォーゼ

おひさんのスキルの一つにある昆虫形態を使えば前のクワガタの姿
になることが出来るため飛ぶことも可能だつたのだが、せっかく一
本足で歩けるようになつたのだ。この感動が続くうちは歩きたい。
途中で出会つた肉食な動物達からは隠れて森の出口（便宜上そう呼
ぶ）に向かっていく。戦つたりしないのかつて？ 理由がないのに
喧嘩を吹つかけるとか好戦的じやないおひさんには無理な話だわ。
戦わないで済むならその方がいいに決まつて。とゆーか脳内で快
楽に変換出来ない痛みは御免被る。

大樹から聞いたらしく、歩いていると色々な木々からおひさんが人
へと進化したことへの祝福の言葉やこれから旅路へ対しての激励
の言葉がかかる。

うう……皆なんてええ木なんだ。優しくされると泣きやうになるな。
年取ると涙腺が緩くなつて困る。

おひさん、感動物にすこぶる弱いんだよ。

途中から見て内容が全然わからんでも、最後の方だけ見て泣いた
ことなんてしょっちゅうある。

特に養子の子が自分は養子だから愛されてないと想い込んでたけど
実は養父母にすこべ愛されてた、みたいなシチュエーションにはす
つじく弱い。

……」んな話はどうでもいいか。

む、そろそろ出口みたいだ。

そういうや初めて森の外に出るな。

どんな世界が開けているのか実に楽しみである。

『あ、そこ危ないですよ』

「へ？ のあつ！？」

『人間がなんか仕掛けましたから……って遅かつたですね』

現在、おっさんは網に捕らわれた状態で宙吊りになつてます。これ、忍者とかがくせ者捕らえるための罠に似てんな。

『大丈夫？』

「あ、へーきへーき」

仕掛けを施された木がおっさんに話かけてくる。先ほどちよつと遅い警告もこの木のものだ。

「獲物がかかつたぞーっ！」

「よつしゃー！ 久しぶりに肉が食えるべ

「わーのしかげがよかつだんだがうな」

「オラの戦術眼がよがつだんだべ」

ほどほどに訛りのある言葉で現れたのは四人の屈強な男達。全員、皮の鎧に身を包み込んでおり耳とかの諸々のパーツは人間と変わりない。明度の違いはあれど全員黒髪であり、どことなくアジアンな顔立ちをしている。

なんかこえーな。

オヤジ狩りの一団じやねーよな？

ダンディハント

「さーで、獲物は……あれ、なんだべ?」

「人でねーが?」

「おいおい、やばぐねが? 間違つて人ば罠さかけでまつだ」

「おーい、大丈夫だが?」

ふむ、話し合いを聞くにいい人達っぽいな。

「大丈夫大丈夫。それより降ろしてくれない?」

「へば、ちょっとこさ待つでろ」

しばらくして地面へと降ろされた。

「すいませんでした」

四人が揃つておっさんに頭を下げる。

「まさが、こんな田舎いながの森に人が入つでくるなんて思つでながつだ
はんで」

「いやいや、おっさんも驚いたよ。巧妙な罠仕掛けるねー」

「だべ? 自信作だ」

男達の一人が下げてた頭を上げて誇らしげに語る。

「自信があるのもわかるな。全然わからなかつた」

まあ、考え事してて注意力が散漫だつただけだが。

そうじやなかつたら、木の注意によつて避けていたことだろつ。

「んでも、ホーンラビットとがを捕まえるにはこんぐれえの罠じや
ねーとダメなんだ」

「あいづら、ちゅうじでも違和感ば感じたら眼にまちがよんねーが
んな」
「んだんだ」

ホーンラビットって、あのロップイヤーさんか？

忘れもしない、寝てるおっさんを角で突いてたあいつらの姿だけは-
……よく考えたらあんまり恨みに思ってないんだよね。どうでもいい
いって書つか……

「ホーンラビットってうめーの？」

「ん？ まあ、セイソイだな」

「ハイキングベアーの方がうめえぜっちょ、ありやつええがら」

ハイキングベアーとは多分一足歩行してた熊のことだね。
おっさんはこいつを見かけたらすぐに逃げる。

「うん、そつか。大変だね。じゃあ、とりあえずお詫びの品をくれ

「は？」

「え……」

場が畠然とした空氣に包まれる。

そりやそうだ。

元々の話、獲物を捕らえるために仕掛けた罠にかかったマヌケはお
っさんの方ではある。罪悪感もあって謝罪した彼らではあったが、
おっさんの友好的な態度に胸を撫で下ろしていくに違いない。
だが甘い。

普段のおっさんなら笑って許して終わりだらうが、今のおっさんの
状況は無一文。

「ひみつ機会は活用せねば。

「えつと……」

「とりあえず金銭での詫びを入れてくれ」

「オラ達、ほどんじ自給自足だがり……金はあんま持つでねえ」

「よしわかつた。あんた達全員その場でジャンプしろ」

おつさんの言葉に対して男達は素直にその場で跳びはねた。

おつさんは素直な奴は大好きです。つーか素直すぎる氣もあるけどね。

そして男達のジャンプに合わせて聞こえる金属音。

「お、持つてんじやん。出しなさい」

「い、いや……これはナイフの音だあ」

「とつあえず出しなさい」

無駄に強気なおつさん。

だがしかし、内心逆上されたらどうしようかとドキドキものです。だけどここからのおドオドした感じが、その心配は杞憂だと思われる。

オツサンとは反発する若者は苦手な奴が多いが、従順な若者には強気な生き物です。おつさんもその内の一人さ。

差し出されたのは刃渡り10㌢ちょいの外見果物ナイフみたいな物。つーか果物ナイフにしか見えない。

りんごでも採りにきたのか？

まあ、毒りんご的なしかないけどね。

狩りに出た人間の装備としては貧弱だ。ナイフの良し悪しが分からぬいおつさんでもこれはナマクラだと判断出来る。

「はー、返す」

「あ、どうも……」

「他の奴らも提出ー」

おっさんの中にはまたも男達は素直にそれぞれ金属音の元を差し出してくる。

ほんと、じんなに素直で良い奴ら初めてだ。
差し出されたのは全員似たり寄つたりの品で、おっさんの食指は全くとこつていいほど動かない。

「はあ……」

自然とため息がこぼれる。

ため息をひとつ吐くと幸せがひとつ逃げてくなんて俗説もあるが、
この際仕方ないだろ？

「……なんが、すいません」

謝られた。

ここからは全然悪くないのに。

やべ……おっさんの罪悪感がチクチクと刺激される。

「いかにも調子に乗ってしまったようだ……」

「いやいや、オラ達が悪いんです」

「なんだ。貧乏で何もあげられるもん持つでねえのがわりいんだ」

「お前ら……」

いい人過ぎやしませんか？

「好きだぜ」
「……え」
「あ……」

「ぬう……」

「オラ、嫁つこがいるんだばつちよ……」

「ナリこつ意味ではない。おっさんは女好きだよ?」

めちゃくちゅって頭にすべへらこな。

「それにしても優しこのはいが、優し過ぎのやつお前ひ

「だつて……なあ?」

「ああ」

「んだ」

「何? なんで知り合い同士、田で会話してんの。おっさんは話の輪に入れてよ」

「だつて、あんた……鎧は着てつけども股間は葉っぱで隠してるべ
らいだから、哀れで……」

……うん、まあ、そうだね。

おっさん、そんな格好してたね。
自然と受け入れてたよ。

とゆーか胸とかは鎧じやなくて一応、おっさんの肌なんだけどね。
感触あるし……

つまり、全裸に葉っぱだけだつた。

「……じゃあ、腰に羽織るもんない?」
「どんぞ」

差し出されたのは四枚のタオル。
おっさんはそれで簡易版の褲を作成し、葉っぱの代わりに股間を隠すのだった。

……あ、激しい動きだと取れちゃうな。

おひねこ、人と出合つ（後書き）

いつか来るかもしない質問を先に回答しておきます

Q・なぜ言葉が通じるのか？

A・ファンタジーだからです

Q・主人公は戦わないのか？

A・そのうちあるかもしませんが、少なくともそこそこ先の話です

Q・主人公の名前って？

A・一応、次話にて名乗る予定

私が現段階で思い付くのはこれくらいですかね。

他に何かあれば遠慮なくどうぞ。ただ、ネタバレになるような質問には回答できません。

おつさん、名乗る

タオルのお礼と書いてはなんだが、スキル木々の声を活かして狩人達の狩りを手伝うこととした。

要はホーンラビットがよく通る道やホーンラビットの餌場などを教えてもらえばいいだけの話だ。樹木達はおつさんの味方なので基本的に何でも教えてくれる。

狩人達も良い狩場知ってるよと書いてやつたら両手を挙げて大喜びした。

そんなに喜んでくれるのは嬉しいが、結果が出てからにして欲しいものだ。

あと、もう少しあつさんの素性を疑うとかないわけ？

客観的に見ると結構怪しい奴よ？

まあ、説明するのもめんどくさいから聞かれない方が都合いいんだけどね。

よし、気分がいいからサービスだ。食える山菜とかキノコも採つてやんよ。

結果として狩りは成功だった。

成果はホーンラビット六匹。いや、ラビットだから六羽の方が正しいのか？

とりあえず成功だ。

おつさんの指定したいくつかのポイントに狩人Cがおつさんの引っ掛けた罠を設置し、獲物がかかるまでひたすら待つ。そしてかつた獲物を狩人A、Dと協力して捕まる。その後にまた罠を仕掛ける。

これを狩人達が繰り返している間におつさんは狩人Bを連れて食用

植物を取りに行つた。

狩人Bもそこそこ食用植物には詳しかつたが、木の声を直に聞けるおっさんほど森の植物に詳しい奴はいない。

一時間もすれば両手に抱えきれないほどの食料を得た。

それにしても動物を殺す瞬間つて惨いよな。おっさんも真つ当な人間だつた頃に田舎で飼つてた鶏を絞め殺して羽根筆つたことがあるけど、途中で祖母ばあちゃんに変わつてもらつたもん。

今じや、食料確保してゐる間に時々見かける事のある弱肉強食の世界によつて見慣れた光景とは言え見ると気持ちが悪くなつてくる。

「大丈夫だか？」

「……そんなに大丈夫じゃない」

「あんた、グロ耐性のスキル持つてないのが？」

グロ耐性のスキル。

そんなもんがあるなら是非とも欲しいもんだ。

「どうやつ……」

どうやつたら獲得できる? と聞こいつとした口を開きます。

スキルを得る方法は経験か修業。

ならばグロいものを率先して見たり、運悪く見てしまつた奴が得るスキルなのだろう。

ネット画像とか写真とかならまだいいけど、隣でグチャグチャやつてんの見るのはいやだ。

「大丈夫だあ）。解体作業ば百匹も見れば取れつから」

励ますな。

別にグロ耐性ないからって落ち込んでるわけじゃない。

「んでも、これだけ取ればカカアに怒おこられなぐでいいな」

「これもあんたさんのおがげだ～」

「あんたも村さ来い。わーの作った野菜ばやる」

「オラの作った野菜はうめど～」

すっげえ笑顔でおっさんの方を見てる狩人達。
笑顔が眩しいぜ。

それにもしても、野菜作ってる奴つてお礼とかに大抵自作の野菜あげるって言い出すよな。おっさんの実家の連中もそうだったし、農家の友達もそうだった。

まあ、嬉しいんだけどね。

「狩人A、B、C、D……じゃあ、誰か泊めて？」

沈黙が降臨した。

なんか悪いこと言つたかな？

あれか？ 「泊めて」はまずいか？

芸能人が田舎に泊まるテレビ番組でも難儀することがあるからなー。でもテレビが入るわけじゃないからハードル低くね？

いや、よく考えると今日会つた奴を泊めること自体がレベル高すぎか。

例え彼らの家が掘つ建て小屋であつても褒める自信があるのに残念だ。

「なあ」

沈黙を破るようにAが口を開く。

「狩人エー、ビー、シー、ティーっておいら達のことだが？」

「うん、そうだけど。」

なるほど、まずは他愛ない話をしつつお泊りを拒否るわけだ。
はつきり言つてくれていいのに……

「そういうえば、お互い名乗りあつてながたな～」

「まんざ名乗りあつのが礼儀でねえが」

「んだ」

とこつわけでお互いに自己紹介する運びとなつた。

とつあえず簡潔にまとめてこいつ。

「だば、おらがらいべが」

狩人A。本来の名前はスナー。

スナーとか言いつつ、肌は日に焼けて茶色だ。

彼は四人の中で一番でかい。

また、Aを冠するだけあつて彼らの中のリーダー的存在だ。既婚者。

なお、嫁の尻に敷かれているらしい。また、嫁が妊娠中。

「次はわの番だな」

狩人B。本来の名前はトイース。

一緒に森で収集した男だ。

顔立ちはまだ二十代だというのに可哀相な頭をしている。でも既婚者。

「だらわーがいぐど」

狩人D。本来の名前はスサウ。

罠の名人。

身長は小学生くらいしかないけれども、あごひげの影響でかなり年がいつてるように見える。やはり既婚者。

「最後はオラだな」

狩人D。本来の名前はウエスト。

他の三人に比べると細い。だが、筋肉質だ。

また、彼らの中では頭がいいらしい。はあ……既婚者。

全員既婚者だよバカヤロー！

なんだよ。三十過ぎても結婚出来なかつたおっさんへの当てつけか？
くやしくないよ？ だって、三十過ぎても結婚してない野郎なんて
いっぴいいるしー。

「んで、あんたは？」

今度はおっさんの名前はたか……

「おっさんの名前はたか……」

ちょっと待て。本名を名乗つていいものか……

こいつらの名前を聞く限り日本の名前だと浮いちゃわね？

とゆーかすでに以前のおっさんは死んじやつてるわけだから新しい名前が必要ではなかろうか。

とは言つても西洋風な名前なんて咄嗟に思いつかん。本名を^{もじ}據るか？
……ないな。

うーん……一旦持ち帰つて考えたい。

だけど、考えれば考えるほど塙塙に嵌まる気がする。

だったら……」いつよつ。

「おっさんには名前がない。この森で生まれ、この森で育ったが故に。だからどうだい、君達がおっさんに名前を付けてくれないか？」

「おら達が？」

聞き返すスニーに頷いて返す。

自分で名前を考えるのが面倒ならば、他人に考えてもりおっ作戦だ。

「でも、なんでわー達が？」

「んだ。自分で付ければいいべ」

まあ、こりくるわな。

理由がめんどくさかつたからじゃダメだよな。

どうやつて言い訳しよう……

「それはだな……」

考える。考えるんだ。

自分を叱咤激励する。

すると、天啓のようにパツと頭に最適な言い訳が浮かんだ。

「名前ってのはさ、自分で付けるものなのか？ 君達だって親に付けられただろう？ つまり、血の繋がりがあるとはいえ他者に名付けられたはずだ」

おっさんの言葉に四人が理解の表情を浮かべる。

「だからこそ、信用出来る君達におつたこの名前を付けてもらいたいんだ」

「ここで信用していることもアピールしておいて、お泊まりの許可をもらいややすくする算段を練る。

ふふふ、おっさんたらなんてクレバーなんだ。

「よ、よし。おら達がいい名前付げでやつからー。」

「任せどば」

「どんなんがいいべ？」

「テソロとかどんだ？」

「それは今度生まれるおらの子供の名前だべー。」

四人で固まつて話し合つてくれている。

はてさて、一体どんな名前を付けられるのかな？

よほど変じやなければ、どんな名前であつても受け入れるつもりだ。

その名前でこれから生きていこうと頼り。

近くにある木に寄り掛かつて座り、結果を待つこととする。

『あんつ』

「おつと、すまん」

びつから寄り掛かつた時に木の性感帯に触れてしまつたようだ。

『いいんですよ。それより名前付けられるみたいですね』

「え？ あ、うん」

『その旨を報告しましたら、ラウルス様がわしが名付けると言つてましたよ』

「へー」

ちなみにラウルスとは大樹の名前である。

だけどおっさんの中では大樹は大樹。名前などない。

「参考までに何て言つてんの?」

『えーと、ですねえ……ムシジビトーかムシジビト で迷つてゐるやうです』

「却下つつといで

『はい』

大樹に名前付けてもらひことを考えつかなくて良かつた。

そういうえば、修業中にこの森のほとんどの木の名付け親は大樹だと聞いたことがあつたな。あの杉15065みたいな感じのセンスの力ケラもない奴。

絶対名付けられたくないね。

自分の案が即座に却下されたことで大樹が激しく落ち込んだ事はここで語るような事ではあるまい。

そういうしてゐる内に話し合いの終わった狩人達がおっさんの元に近寄つてきた。

「いい名前付けてくれたのかな?」

「最終的に三つ候補ができるだ

「ふーん、そつから選ぶわけね」

おっさんにも選択肢を『え』ことで、華を持たせてくれてるのかな?

「どんなんがあんの？」

「エメ、ラルド、グリーンの三つだ」

そつかその三つの中ならどれかな……って……？

「なにそれっ！？ 全部見た田からじやん！ なんでそんな安直になつた？」

エメ、ラルド、グリーン。繋げて読めばエメラルドグリーン。まんまだ。

「いや～、パツと思いつぐのがなぐてえ」

「スサウがプリンプリンとかふぞろげっからあ～

「おめだつて、悪ノリしてお前がアナルにじょつとか言つたつべ

なんでここのりこんなに学生のノリなの？

判断間違つちやつたかな～。

とりあえず真面目に考えてみる。プリンプリンとアナルはないな。でも、アナルつて響きはちょっと惹かれるものがあるから将来息子が出来たら擦として使わせてもらおう。んで、エメラルドグリーンに関してだが、安直ではあるがわかりやすい。

面倒だし、この中から選んで。

まず、エメ。

エメちゃんと呼ぶ姿を想像してみる。

なんかひょうきん者のイメージだな。ダンディーなおっさんには合はない。よつて却下。

次に、ラルド。

これ単体で見れば、そこそこな代物だ。響きがいい。おっさんの名

前の第一候補にしよう。

最後に、グリーン。

歌を唄うイメージがある。響きは悪くない。だけどどことなく主人公のライバル的ポジションっぽい感じがするのはなぜだろう？

「ラルドだな」

吟味した結果、やはりこれが一番しっくりくる。

「おっさんの名前は今日からラルドだ」

「そうが」

「よひすく、ラルドさん」

「いい名前だあ」

「名付けだオラ達も納得だべ」

【虫人は固有名ラルドを得た】

天の声が聞こえた。

おっさんの名前はラルドで本決まりしてしまったようだ。
だが、これでいい。

おっさんはこの世界で生きていいくのだから。

こうして名前を得たおっさんは狩人達に付いていくて、彼らの村へと訪れるのだった。

ちなみに泊めてくれと頼んだ時に沈黙が降りたのは、おっさんが自分達を記号の如く認識しているのに気付いてちょっと傷付いたためらしい。

泊める事自体は奥さんに聞いてみないとわからないとのことだった。

なお、おっちゃんはラードとこつね前が豚の脂のことで知る由もなかつた……

ねつねつ、名乗る（後書き）

固有名詞はだいたい適當につけてます。
主人公の名前も本当にエメラルドグリーンから取つたんですが、まさか適当に取つた名前がこんな意味を持つとは……まあ、ありかなしで言えればあります。むしろ彼には合つてる気がします。

おつさん、旅立つ

「ラルドさん、ここのキノゴって食えつべか?」

拝啓、大樹様。

「おつさんは食える。だけど、トイース達はダメだ。食つたら体が痺れて動けなくなるぞ?」

お元気ですか?

まあ、根っこワークでお互いの近況はよく知つてゐるしが、改めて報告しようと思ひます。

「危ねーディだつたなー」

おつさんは今、三ヶ月ほど前に出会つた狩人達の村で彼らと同じく狩人として生活しています。

「ここの実は食えるべか?」

最初は苦難の連続でした。

だつて村人の視線、特に女性の目がドライアイスみたいに冷たかつたからです。

「うん、食えるよ。スノーの嫁さんみたいに産後の人なら丁度いいんじやないか?」

それもこれも、村に着いた時におつさんが腰に装着していた簡易型の褲ふんどしが外れていたのにも関わらず、それに気付かないで村の中を闊

歩したのが悪いんだと思います。

露出狂の誤解を解くのに大変苦労いたしました。

今ではちゃんとした褲を着用しています。あくまでも褲のみで、他はなんも着てません。なぜなら装甲的な身体のせいでおっさんに合う服がないからです。

まあ、慣れましたけどね。

「おお、キャロルにいいつつーんならいつぱに採つて帰んべ」

女性の反応はすごぶる悪かったとしか言いようがありません。

あっちに行つては逃げるように視界から消え去り、そっちに行つては露骨に嫌な顔をされました。

だけどなぜでしょうか。

……ゾクゾクしました（悦）

「キャロルつて、いいケツしてんだよな」

あの冷たい視線がたまりません。

しかし、彼女らは皆旦那付きです。つまりは人妻。

基本的に旦那が知らない野郎なら大興奮してしまいますが、先に旦那達と仲良くなつてしまつと、人妻と言うよりも○○の嫁と思つてしまい、正直萎えます。ゾクゾク感は半減です。

おっさんは友人の嫁に手を出すほどひどなしではありませんからね（笑）

「ラルドさん。いや、ラルド……嫁に手え出したらぶつ殺すかんな！」

あ、友人も増えました。

男なんて一緒に酒飲んで夢でも語り合えば、そこそこ仲良くなれま

す。

あの夢なんかねえよつて奴らは、下ネタで落としました。
“じこつても男のH口さは変わらないなどしみじみ思いました。

「いや、キャロルはケツはいいんだが、胸が更地過ぎて欲情しない
んだよね。だからスノーはきっとロックライミングが趣味なんだ
など常々思つてる」

話は変わりますが、つい先日、村の畑におっさんが植えた作物の収
穫がこの間ありました。

早過ぎると思うかもしだれませんが、実はおっさんには植物の成長を
促進する秘められた能力があつたのです。

「それは抱いてるおらに失礼しがれでねえが。キャロルは確かに胸はねえ
けんども、美人だ」

きつかけはおっさんが種蒔きに参加した後のこと。
成長具合が気になつて仕方がなかつたので、早く芽を出せと祈つた
ことからはじまります。

その後、あれよあれよという間に作物が成長していつたんです。
これによつて、おっさんはどうやら植物成長促進というスキルを持
つていたことが判明しました。そういうえばエメラルドスタッグビー
トルになつた時にそんな感じの天の声が聞こえたかもしれません。

「うん、美人（笑）だよな。ま、おっさんはもっとボン・キュツ・
ボンなおねーちゃんがいいけど」

植物成長促進のスキルが判明してから女性達の態度がすゞく軟化し
ました。

でも、じことなく残念な気持ちなのはなぜでしょ？……

「だったらオラの嫁ば狙つてんのが？」

村長さんにも村人として永住しないかと言われました。おっさんとの心の距離を縮めようと必死なのが端で見ててもよくわかれます。

「ウエストの嫁はまつきつ言つて顔の造形が好みじゃないなー

どうするかはまだ決めてません。

だけど、わりと前向きに検討しようかと思つています。

「ラルダさんは女の好みにつるれ過ぎるんでねえべが？」

この村はおっさんに仕事をくれました。そしておっさんが生活するのに必要な物を無償で提供しててくれました。

「好みつてゆーか、二十五歳以上でナイスバディな美人がいってだけ。これだけ満たせばどうでもいい。おっ、美味そうなキノコみつけ」

仕事ではないなくてはならない存在として重宝されています。無駄に自信がつきました。

落ち込むこともあるけれど、おっさん、この村が好きです。

「明日にでも村出る」とにした
「……え？」

突然のおっさんの発言に驚いた表情でその場にいた全員がおっさんの顔を見る。
今度は何を言い出したんだコイツ？ みたいな表情がありありと浮かんでいる。

ここは村で唯一の酒場。

内装は西部劇にでも出できそうな造りで、扉は例のパコパコするタイプのやつだ（ウエスタン扉）

二階に宿泊も出来るので、おっさんは現在そこに住まわせてもらっている。

今日は狩りの成果もそこそこ良かつたので東西南北の四人と祝杯を挙げてるというわけだ。

ちなみに東西南北とはトース、ウエスト、スサウ、スノーを一ぐくりにした呼び名だ。

その現場でおっさんは自身の今後の予定を告げた。

はつきりいえば急な話だ。おっさんは事前になんのそぶりも見せたことはなかつた。とゆーかさつき決めたんだから当たり前だ。

突然の引退は周りに迷惑をかけることも理解している。

だけどおっさんは元々外様だし、問題はないと思つ。

手紙口調でこの村が好きだとは言つたが、ずっといふとまへ言つてない。

あくまでも前向きに検討すると言つた政治家答弁だ。むしろいづこ

う発言が実現されることはあまりないのではないか？」

つーか最近、大樹が「まだタファンの森には行かんのか？」って根つーJワークを通じて村にある木に言付けてくる。

どうやら永住しなうな勢いで村に馴染むおっさんを杞憂してるらしい。

そこまで血饑したいのかよ。

「随分と急でねえが？」

「んだ」

「用事があるんだよ」

「だけんども……」

引き止めようと言葉を紡ぐ東西南北の面々。

お前ら、そこまでおっさんが好きか。

人気者だなー。

だけども、おっさんが村を出る決意をしたのはお前らのせいでもあるんだぞ？

ぶつちやけ羨ましいんだよ。

嫁と仲良くキヤツキヤウフフしやがつて……

目に毒、心に鱗なんだよ。

この村は二十歳越えた奴は男女を問わず、ほとんど結婚済みだ。
なんかしらないけど心に焦りが生まれる。

結婚願望はそれなりだつたんだけどなー。

まあ、でも……

「こつかいの村には帰つてくるよ。今度は嫁を連れてな

農家とか狩人とかはおっさん的には天職っぽいしな。
それにはやはり東西南北との固い友情はあるわけだし。

「……だつたらー、せめでもう少し出発ば延ばせねえべか?
「んだ、明日つてのは急過ぎるつべ」

いや、確かに急だけじゃー……

「事前に言つたら村長が全力で引き止めにきそうなんだよなー。それ……」

「それに?」

一拍置いて四人の顔を見回す。

おっさんが何を言つのかを期待して、生睡^ハクリつて感じだ。
やれやれ……なら、その期待に応えてやるうつかな。

「親しい奴にだけ告げてフリと消えるつてのかつによくね?」

さすらいのダンディさ加減に痺れるぜ。

「ねえわ」

東西南北が口を揃えて言つた。

まったく、ダンディつてのが分かつてねーなー。

翌日、宣言通りにおっさんはまだ日も昇つていない早朝に村を出た。
村人の朝は異常に早いのだから仕方ない。

起きられなかつたらまづいのでおつさんは徹夜だ。
ずっと酒を飲んでいた影響でフランフランである。

見送りは四人の男達のみ。

ここからもおひこに付き合つて夜通し飲んでたので具合が悪そつだ。

なんかもつ、出発は明日でもいいんぢやないかと思わなくもないが、そしたら明日は明日でこんな状態になつてそなうので無理を推して今日出発する。

「ほりりで見送りはいいぞ」

「だらもつ家さ歸るじやー」

「んだらまだなー」

「まだ来いよ」

「だらまんつ」

名残惜しけは微塵もない。

わりとあつさりと東西南北は背を向けて歩き出す。
さ、寂しいなんて少ししか思つてないぞ?

去つていく東西南北の背を見つめていると、不意にスノーが振り返る。

「ラルドセーん! 嫁ば見つけだらまた帰つてこよー。」

そしてスノーと同じよひこ三人も振り返つおひこと声をかけてくる。

「帰つてくるまでにラルドセーんの家ば造つておぐがらなー」

「こい女つがまえろよー」

「どうあえず素を出すのは控えどナーナー

口々に投げかけられるホール。

そう、彼らと交わした言葉にさよならはない。

いつか再び命えると確信し、『また』と全員が言った。おっさんは囚人の気持ちに応えるように声を張り上げる。

「また…………カシ…………」

やばい……声を張り上げたせいで胸から込み上げてくるものが……

ここに込み上げてくるのが涙でなくどうする……

ゲロはダメだ。

折角の微感動場面が台なしだ。

せめて……あいつらが各々帰るまで耐えるんだ……

くそっ、ここまで手を振つてやがる。さっさと帰れ……

くわづ……むづ……ダムが……決壊する……

しばらぐお待ち下さい

はあー、スッキリした。

んじやいこつと。

背後は振り返らない。

むじろ振り返ることができない。

おっさんの吐瀉物はそのままだ。

きっと大地へと還り、綺麗な花を咲かせることだらう。

「へしておつさんはやつと旅に出た。

東西南北の四人は折角の旅立ちのシーンを台なしにした一人の男の背中が見えなくなるまで見送つていた。

「吐いだな」

「うん、吐いだ」

「盛大にな」

「台なしだべ」

「んでも、ラルドさんらしいな」

「あ、それわがるべ」

「あん人はあれでいいんだ」

「ちゅーか、わーもなんが吐きそうなんだけど……」

「もらいゲ口かよ」

「あ、ダメだ……ウオエツ！」

「あーあーあー……」

「まつだく……」

四人は笑いながら家路へと向かう。

四人が一晩中飲んでいたことによつて無断外泊の形になつてしまつたがために、嫁が家でどういう心境で待つてゐるかなど考えもしないで……

ちなみに最も被害が大きかつたのはスナーであつた。

おつかれ、旅立つ（後書き）

オッサンの村での生活をダイジョブでお送りしました。
植物成長促進のスキルは作者自身も忘れかけてましたね。

それは今にも雨の降り出しそうな雲に覆われた日のことだった。
すでに村から旅立つて四日といつところだ。

たつた四日と悔る」となけれ

おっさんは昆虫形態のスキルを使ってクワガタの姿になることが出来る。

つまりは飛べるのだ。

そんなおっさんの移動距離は一般ピー・ポーとは比べものにならないほどだからね。

まあ、初日は途中でへばつてあんまり進めなかつたけど……

だけどそれを帳消しにして有り余るオッサンの勇姿。割れながら惚れ惚れする。

しかしながらだ。

おっさんは性格のせいなのか分からぬけど、わりと友達はいるタイプなのよ。

まあ、逆に嫌われる場合はとことん嫌われやすくもあるんだけどね。まあ、それは置いておいて、つまり何が言いたいかと云つておっさんは寂しいんですつ！

そりや、移動をやめればそりやにある木に話しかけて相手してもらうんだけどさー。移動中はそんなこと出来ないわけで……東西南北の奴らと交流持つたことで人と触れ合つことを思い出して寂しさ倍増しちゃつてんだよ。

一人旅も嫌いじゃないけど、ワイワイ楽しい旅の方が好きだ。
旅は道連れつて言つんだし、東西南北の連中も連れてくじやよかつた。

どつかに旅してゐる集団とかいなかな？

いたら混ぜてもらうのにな。

まあ、おっさん以外全員が知り合ひつて状況は疎外感が半端ないけど、話を下ネタに持つていけばおっさんのターンに持ち込める。

「なあ、周辺に誰かいないかな？」

ということで近くにいる木に周辺の情報を聞いてみる。

木の一本も生えてない荒れ地などなら別だが、一般的な大地の状況について彼らが知らないことは少ない。

彼らは無駄に他人の秘密を知つてゐる。また、それを木にしか言えなかつた反動なのかやたら口が軽い。トイースが外で嫁と子作りに励んだ場所とかはあんまり聞きたくなかつたぜ……

『任せんしゃい。十秒あれば根っこワークで周辺の奴らから情報がくるけん』

何より、何度も言つてる気がするが、こいつらはおっさんに協力的なのだ。

おっさんのことは根っこワークを使って情報がいつてるらしく、いきなり話しかけても嫌がつたり疑問を感じることはなく、むしろ喜々として話し合ひに応じてくれる。

程なくして、周辺にいる者達の情報を受け取つたおっさんはそいつらのいるところへ向かつた。

その集団の姿はそつと動かぬうちに見えた。

とは言つてもまだ距離はそこそこ離れている。

しかし、おっさんの田には新聞の活字よりはっきりとその様子が見て取れた。

これはおっさんが進化することで手に入れた千里眼のスキルの恩恵だ。

千里とは大体四千キロくらいだった気がするが、さすがにそこまでは見えない。しかし、十キロぐらいならば余裕で見ることが出来る。本気を出せばもっとといけるに違いないが、まだ試してはいない。とゆーか青看板みたいな「〇〇まで〇キロ」みたいな指標がないからしきりがないよね。

さて、話は変わって集団の様子を述べよう。

集団とは言つても見える範囲には五人しかいない。テントを張つてるからその中に誰かいるかもしれないの、五人以上ということだ。それでこの集団、物々しいことこの上ない。体には重そうな鎧、腰や手には剣やら槍やらを携えている。顔はヤの付く職業のお方みたいな強面で、傷やら入れ墨みたいなのが付いている。

ぶつちやけ怖い。

なんつー物々しい集団なんだ。

こんな奴らに財布出せつて言われたらおっさん即効で逃げるが。え？ 差し出さないのかつて？

嫌だよ、もつたいない。

あいつら人からカツアゲした金で絶対キヤバクラとか風俗行くんだよ？

おっさんだつて滅多にいけないつーのにそのおっさんの金で行くとか許せますか？ いや、許せません。

それで捕まつて殴られて脅されるならそれがおっさんの運命。逃げられたらラッキー。

むしろ財布に入つてゐる免許証やら保険証見られる方が怖いよ……

まあ、なんだかんだ言つてそういう方々とまともに会話したことがないから好き勝手言えるんだけどね。

うーん……それにしても声をかけるべきかかけざるべきか悩むな……普段なら悩まずにスルーするんだが、寂しさ募るほつちなおっさん的には会話出来るなりこの際ヤーさんでもいいとか思つてきてるわけで……ん？ スルーする？ ぶほつ！ スルーするとか秀逸なダジャレが偶然出来てしまつた。

言いたい。これは誰かに伝えたい。

よし、彼らに言つてみよう。

なーに、おっさん渾身のダジャレに全員大爆笑するだろ？ だから全てはノープロブレムだ！

などと、浅はかにも思つていた時期がおっさんにもありました。現在おっさんは縄で縛られて轡を噛ませて地面に横たえられています。

なぜ、こんな状態になつたのか。

理由は簡単に推測出来るかもしけんが、あえて言おう。

おっさんは盛大に滑つたのだ！

あれだよな。

発見されて開口一番に「貴様何者だっ！」とか「怪しい奴めっ！」とか威圧的に言つてんのに「あんた達が見えたから仲間に入れて

貰おうと思つたんだ。ホントはスルーすると「なんだうけどね？スルーする、スルーする……笑えない？」とか言つたのがダメだつたのだろう。

もう、ダジャレを放つた瞬間に「あ、これダメだ」と思いましたよ。それなのにダジャレだつてことに気付いてない可能性を考えてスルーするつてとこの説明までしちゃつた。

寒さは倍率ドン更に倍。

清々しいまでに事態は悪い方向に転がり、怪しい奴つてことで取つ捕まつた。

縛つたのがむか苦しい男なら纏を噛ませたのもむか苦しい男。

テンショントがるわー。

せめて女はいないものか。

「報告にあつたのはその男かしら？」

おっさんのが想いが天に届いたのか、鈴のような響きを持つ声があっさんの耳に届く。

視線を動かしたおっさんの目に飛び込んできたのは、深紅のローブを身に纏う高校生くらいの女の子の姿だつた。

周りにいる男達よりも頭一つ分は背が低いが周りの男達はおっさんよりもでかいので、女性としては高身長であろう背丈。これだけ見ればおっさんのストライクゾーンにいるのだが、腰元辺りまで伸びたローブに負けないくらいに鮮烈な赤色をした髪をツインテールにしており、それが彼女の容姿を幼く演出している。ま、胸の発育具合が残念なのも一つの要素か。勝ち気そうに釣り上がつた瞳やこちらを見て微笑む仕草などはおっさんの好みなのだが残念なことに……

おっさんの好みではない！

要はストレートだつたらストライクだつたのに、大きく縦に割れるカーブを放つたせいでベース手前でワンバウンドしてキャッチチャーに届きました的な感じ。

美少女ではある。それは認めよ^う。だが、おつさんは美少女には興味がない。美少女から美女にクラスアップしてからお会いしたかつた。あ、胸ももう少し成長して欲しいな。

「アイリス様、この者いかがいたしましょうか?」

「殺しなさい」

「はい?」

え、何て言ったのこの娘?

殺しなさいとかいきなり過ぎやしないか?

もしかしておつさんの心の声が聞こえちゃつたのかな?

「かし」まつました。おこ

重厚な鎧に身を包んだ巨漢の声に、おつさんの近くにいた細身の男が腰から剣を抜き放つ。

その剣は鈍い光を放ちながら上段へと振り上げられた。

「んーんー!」

必死に止めてくれるよう^に声を張り上げるが、如何せん轡によつてその声が他者に理解される^にとはない。

「あら、何か言つてゐるよ^ううね?」

「今生への別れか怨嗟の言の葉かと」

「それは是非とも聞いてみたいわね」

「かしこまりました。纏を外せ」

巨漢の男の言葉に剣を振り上げたままの細身の男とは別の顔に入れ墨のある気合いで入ったに一ちゃんがおっさんたんの纏を外す。

「さあ、あなたの死に際の呪いの言葉を聞かせてちょうだい

少女がやたら期待の籠った瞳でおっさんを見つめる。

どうやら少女は特殊なご趣味をお持ちのようだ。

これが俗に言う変態なかもしれない。

「とりあえずおっさんを殺すのは待とつか？」

「嫌よ」

「なして？」

「だつてわたくし人が死ぬ直前の絶望や怨嗟の声が好きなんでもの。殺さなければ聞けないでしょ？」

それが本音からくるものなら、この娘はかなり危ないよな？

おっさんつてば知らず知らずのうちに虎穴に入つてたわけか……才

一マイガット！

「……殺さないで下せ」

「ダメー！」

おっさんの切実な願いは可憐らしく断られた。

どうする？

どうすんの？

どうすりやいいの？

おっさんめっちゃピンチじゃん！？

絶体絶命とかそんな雰囲気じゃん。

「ハハで丸め込むとかそんなこと出来るレベルじゃない気がする。あつちはおつさんを殺す気満々過ぎてどうしようもない。よし、いじは法を盾にしよう。」

「人殺しは犯罪ですよ？」

「あら、いじがどこかの町の往来で、わたくし達の他に誰か目撃者でもいれば別ですけどこには町ではありませんし、周囲にわたくし達以外の誰かおられますかしら？」

「しませーん。

木に確認してもらつたけどあんたらしか人はいませんでしたー。くそつ、なら一か八かで良心に訴えてみよう。

「おつさんには妊娠中の妻と三人の子供が腹を空かしておつさんの帰りを待つてるんだ」

「子供がお腹を空かせるなんてあなたの罪だわ。無計画で作るからダメなのよ。どうせ養いきれなくて口減らしに捨てるという更なる罪を犯す前にわたくしが断罪して差し上げるわ」

なんか怒られた。

彼女は自分が言つてることが田茶苦茶だと気付いてるだろ？

「……もういいわ。やっぱり死ぬ間際でないといふ声では鳴いてくれないみたい。殺しなさい」

下される死刑執行の言葉。

振り上げられた剣がおつさんの首へと降りられるのがスローモーションのように緩やかに見える。

終わった。

よくよく考えればすでにおっさんの生は大分前に終了している。

今は何の因果か意識はそのままに新たな生を与えられたに過ぎない。その与えられた生を返還する時が来ただけのこと。

これでおっさんに主人公補正といつものが存在するならば、空から雷が落ちて剣を振り下ろす男に落ちるのだろうが、そんなことがおっさんに起こるわけがない。

あ、でもとりあえず「大樹、東西南北……わりい、おっさん死んだ」とか言って笑つた方がいいんかな？

しかし、今更間に合わないよね？ どんだけ早口で言わなきゃなんのよつて話だし。

ならば足搔くだけ無駄なのかもしね。

ちょっと理不尽が過ぎすぎて納得出来ない部分もあるが、無理矢理でいいから納得しどう。

理不尽が過ぎすぎ……ぶほつ。

キンシと甲高い音。

それはおっさんの首へと当たつた剣から発せられた。

しかしその剣はすでに元の姿とは掛け離れ、刀身を半ばから失つていた。

辺りに静寂が満ちる。

誰もが起じた事象に唖然として言葉を紡ぐことが出来ない。

そんな中、おひかえの耳には聞こえない声が聞こえていた。

【ハルドは武具破壊のスキルを得た】

おひで、捕まる（後書き）

主人公がポジティブ過ぎる……
作者がネガティブな反動かもしけないっすね

一里は約3・927キロメートル。といつことで千里は約四千キロメートルです。間違いないですよね？

本来の千里眼は遠隔地の出来事や将来の事柄、隠された物事などを見通すことのできる能力とのことです、主人公の千里眼は今のところ遠くがよく見えるだけです。

おっさん、逃げる

「た、助かった……のか？」

思わず口から声が発せられる。

それはこの場の静寂を切り裂いてその場の全員に正気を取り戻すには十分過ぎた。

「お、おれの剣が……」

細身の男はすく悲しそうな顔でその場に両膝をついた。
まあ、自分の剣が折れたのだ。大的にしてればしてただけその衝撃
も大きいだろう。

それにもなぜ剣が折れたのか?
いや、そもそもなぜおっさんは死んでない?

「あなた……一体何をしましたの?」

少女がその鈴のような声を欺瞞色に染めて聞いてくるが、おっさん
の方が聞きたいくらいだよ。

何をしたかの問いは簡単だ。答えは何もしていない。
とゆーか縛られてるんだから何も出来ないと言つのが正しい。
んじや、どうしておっさんは死んでないのか。
普通、剣で斬られれば人は死ぬ。

ん?
剣で……斬る?

あ、斬撃無効だつ!

大樹にもらつた斬撃無効のスキルがおっさんの命を繋いだのだ。

いやー、もうつたはいいけど使つ場面ないし、実感したことにもなかつたからすっかり忘れてた。

「わたくしの間に答えなれー」

おつさんのが思考に耽つていろ」とで返答しないことにマイナーフレッシュするのか、苛立ちの感じられる声音で少女がせつつこいくる。

「おつさんが何したかは自分で考えてね」

「むやみやたらに正直に言つ」ともあるまい。

斬撃が効かないんだつたら槍で突き刺しなさいってなる可能性が高いわけだし。

「くつ、なるほどね。剣が当たる間際に笑つたのは自分が死ないと確信していたのね」

はて？ 剣が当たる間際におつさんつてば笑つたつけ？ そりや、笑つた方がいいのかな位の思考はあつたけど実際には……あ、そういえばくだらないことにウケてたかも。 とつさに浮かんだダジャレほど後々思い返して見るところそ寒いことが多いんだよな。

そもそもその話、理不尽が過ぎすぎてなんてダジャレでもなんでもなく、ただ『すき』つて言葉を一つ多く使つただけだ。

「アイリス様、わたしがザラ殿に代わりこの者を処刑しましょー」

あ、まだ諦めてなかつた。

当然か。

次に進み出たのは上半身マツチヨな男だった。

ただ……顔がチワワだ。

え、嘘？

何これ可愛い。顔ちつちーゃい。

「いいわ。クピン、やりなさい」
「御意」

名前も可愛い。

マツチヨなのが残念かと思ひきや、それがギャップになつて更に可愛い。

つて、和んでる場合じやねーつー！

ヤベーよ。早く逃げねーと殺される。
でもビツヤツして？

「ふんつー。」

とりあえずおつさんを束縛する縄に力を込めてみる。

【剛力のスキルが発動した】

天の声が聞こえる。意識発動型のスキルは発動と同時に天の声の知らせがある。おつさんが現状持つてゐる意識発動型のスキルは千里眼、魔力波、インセクトフォーゼ昆虫形態、そして剛力の四つだ。

スキルを発動させるとブチブチツという音がなつてあつさりと拘束が解けてしまう。

そういえば、抵抗らしい抵抗したことなかつたけどいつもあつさりといくものなのか。
最初からやつとけば良かった……いや、使ってないから忘れてただけなんだけどね。

「逃げちゃダメ。〈赤熱の鎖よ 拘束せよ〉」

おっさんのおつさんの拘束が解けたのを見た少女が腕を振るつて言葉を紡ぐ。するどいからともなく現れた赤い鎖がおっさんを拘束する。

「あつつい。」

ジューという肉が焼ける音が耳に届く。この鎖、熱いなんてもんじやない。

「ウフフッ、その苦悶の顔堪らないわ」

少女はおっさんの顔を見てその表情を喜悦に歪ませる。

「 あ殺しなさい」

「 覚悟は良いか?」

「 熱いとゆーか痛くなつてきた」

チワワが背中に背負つていた大きな剣を構える。

何キロあるのかわからないほどに重量感タップリの無骨なデザイン。数多の獲物を斬つてきたのか、その刃はところどころ刃零れしている。

しかしそんなことに今のおっさんが注目出来るはずはない。

熱くて痛くて悶えることしか出来ないのだ。ぶつちやけ、チワワが何もせずともこれだけでいざれ死ぬ。

くそー、これが蠅燭から垂れた溶けた蠅ならば「こ褒美なのに……イメージだ、イメージしろ。このあつつい鎖は女王様の賜つたものでしかないんだ、と。あ、大分マシになつてきた。

「そりば」

大剣が振り下ろされる。

「へふっ」

その一撃は斬撃無効のスキルによりおっさんを切り裂くことは出来なかつた。だが、その重量とチワワの腕力でおっさんの体が地面にめり込んだ。

痛い。確かにこれも痛いのだが……

「鎖の方が痛い……」

素直な感想がこれだ。

もつ、マジで拷問だよこれ。まあ、イメージの影響でうつと興奮するけど。

「まだ生きているだと？」

チワワが驚愕している。

驚いた顔がまた可愛いなオイ。

そういうえばさつきました新しいスキルを手に入れたんだよな。

武具破壊ってことで多少の当たりは付けられるけど具体的な条件とかはわからん。しかし、幸いにも大剣はまだおっさんに接触してゐわけだし試してみる価値はある。

「壊れる」

【武具破壊のスキルが発動した】

天の声とともにチワワの剣に輝が入り、そのまま砕け散った。

「なつー。」

少女、周りの男達から声が挙がる。

おっさんとしては鎧も壊れて欲しかったが残念ながらそうはうまくことが運ばなかつたのは悔しい。

「……なるほど。武器破壊のスキルですか……他者の武器を幾千幾万も破壊したものが至ると言われている境地。有象無象かと思いましたが、存外あなたは武人でしたのね」

「違います」

勘違いもはなはだしいことこの上ない。

おっさんが壊した武器なんて細身の男のものが初めてだ。だつたら何故おっさんがスキルを得たのかという疑問に突き当たるが、得たものは得たのだから仕方がない。細かいことは考えないようにして。

「謙遜は煩わしいからいいですわ。あなたに武器破壊のスキルがあると知れば恐れるに値しませんわ。ドラゴンを殺す前に武器を壊されでは敵いませんから、わたくしの魔法で殺して差し上げますわ」

「ドラゴン、だと？」

いるのか？

いや、ここがファンタジーな世界だというのならいても不思議ではない。

「あら、知らなかつたんですね？　いいえ、違いますわね。あなたも狙つていてしらばつくれてるのですわね？」

「どういう、ことだ？」

「演技がお上手ですね。まあ、あなたの狙いがドラゴン討伐による勇名か魔法具の媒介としての最高級品であるドラゴンの素材なのがわかりませんけれども目的が同じならばあなたはわたくしの敵。是が非でも殺しますわ。ライバルは少ないほうがあなたはわたくしの敵。」

「いやいやいや、おっさんドラゴンに興味ねーから」

「ああ、遺言は済みまして？」

「聞いたやいねえよ……」

くそつ、やべーな。逃げなきやいかんが、剛力のスキルを使用しても鎖が引きちぎれない。それならば昆虫形態を……

「インセクトフォーゼ昆虫形態！」

【失敗。対象に接触する不純物あり。インセクトフォーゼ昆虫形態時分のスペースを確保しろ】

えー……つそーん……

そんな条件があつたんだ。

「何をわけの分からないうことを……死になさい。く古の炎よ 全てを滅ぼせ！」

少女の言葉とともにその背後に炎が現れる。

それは雪のように白く、圧倒的な熱量を誇る炎の塊。

しかし、間近にいる少女は汗ひとつ搔いていない。周囲にいた男達は最も傍にいた巨漢の男以外は熱いのか少女から距離をあいている。おっさんにとって幸いなのは白い炎が現れたその瞬間に体を拘束していた鎖が消えたことだ。これなら逃げられる！

「昆虫形態」
インセクトフォーズ

【昆虫形態のスキルが発動した】

おっさんの姿がエメラルドグリーンのクロガタへと変わる。
しかし己くと迫る白き炎はすぐ目の前まで迫っていた。

「うおりやああ！」

火事場の馬鹿力とでも言つのかがむしゃらに羽ばたいて上昇した結果、辛うじて炎の一撃をかわす。
でもその炎の余波は凄まじく、おっさんの体のあちこちが焦げた。

「面妖なスキルを持つてますわね」

空のおっさんへと目を向けた少女が面白いものでも見たかのような微笑みを顔に携える。

「あんたは危ないもん持つてるね」

「危ないなんてとんでもないですわ。魔法ほど高尚な力なんてありませんわ。魔法とは……」

「そうですか。んじゃおっさんは逃げます。あばよ、貧乳」「こら、わたくしがせつから魔法について講釈をしてあげようつと言うのですから聞きなさい！ とゆーか今なんつた！？」

おお、すっげードスの効いた声。

こりや殺意割り増しだな。

殺されても敵わん。逃げられる時に逃げる。

そもそも人恋しいからと言つて関わつて良かつた人種ではなかつた。

「逃がしませんわ。↙真紅の魔弾よ 敵を穿て↙」

「ぬおつ」

向かつてぐる赤いスーパー・ボールみたいな奴を華麗にかわしていく。ふふふ、おっさんがクワガタ姿でどんだけ飛んでもと思つてんだ。これくらい避けるのなんて楽勝だ。

「何をしますのー。『弓』もなんでも使ってあいつを落としなさいーつー！」

「は、はいっ！」

むおつ、今度は『矢』かよ。

まあ、狙撃ライフルとかがなくてよかつた。さすがにライフルの弾はアニメのキャラクターでもない限りはよけらんねーからな。

さて、逃げることに集中しないとかすがにヤバい。おっさんの全カ、その身に受けやがれ！

なんとか追撃をかわしてながら逃げていると次第にボツリボツリと雨が降り、次第に雨足を強くしてきた。

そのせいなのかどうかわからぬが、少女の追撃は止み、おっさんも一安心といふことで近くの森へと身を隠した。

しかしあれだ。天然のシャワーは有り難いんだが、降り注ぐ雨が強すぎて一メートル先も見えない。

どこか雨宿りが出来るところが必要だつ。

おっさんはそんな場所をわざわざ探す必要はない。

ここは森。つまりおっさんのホームグラウンドなのだからそういうの

木にでも適当な場所を聞けば良いのだ。

教えてもらつたのは森の奥地にある洞窟。
入口は人が一人ようやく入れるほどに狭く、中は先が見えないほど
に暗い。

熊とかが住んでるわけではなさそうだが、蛇とかがいそうだ。

「ふいー」

人型になつて洞窟に入つたおっさんは入口付近に寄り掛かつて座り、
大きく息を吐いた。

なんとも言えない体験だった。

まあ、一度殺された身からすればすでに通つた道だと開き直れるの
だが、やはり問答無用で殺されるというのは慣れないものだ。
斬撃無効のお陰で斬られることはなかつたが、少女の魔法で火傷を

……あれ？　ない？　火傷の跡がないぞ？　火傷しなかつたのか？
いやいやいやあれで火傷しないなんてことはありえねーよ。でも
現に火傷はしてない。

「わけわからんねえ……」

この世界はおっさんの想像を斜めにした出来事がよく起つる。
だからと言つて自分で考えても埒がない。まあ、難しく考えてもし
ようがないのかもな。

誰か説明してくれる人が現れるまで保留にしつづ。
今は火傷しなくて良かつたつてことで一件落着。おっさんはハッピ
ー、はい終わり。うん、これでいい。

それにして腹減つてきたな……

おっさんのが持つていていた日保ちする食料なんかの荷物は少女らに捕まつた場所に置いてきてしまつた。

森にいけば食べられる物を採集出来るだらうがさすがに土砂降りの中をと言つのは億劫だ。

では選択肢としてあるのは、我慢するか洞窟の奥に行つてみるかしないわけだが、軽率な真似は危険だということを実感したばかりのおっさんは雨が晴れることを信じて待つことを選択したのだった。

ねつむえ、逃げる（後書き）

アニメのキャラクターでもない限りとか同じ架空の存在である小説のキャラクターが言つことに我ながら違和感を覚えています。なーんか次の展開が読めるぞって思われるかもしれません、そいつは胸のうちに秘めといて下せご。

おっさん、洞窟の中で……

洞窟に入つてからどれくらいの時間が経つたのだろうか。少なくとも丸一日近くは経とうとしているのかもしれない。その間ずっと天候の回復を祈つていたのだが、その祈りは通じず空の機嫌は悪くなつていくばかりだ。

雨が強くなるだけでなく、風が吹きすぎ、雷公様が絶え間無く降り注いでいる。もうこれは嵐と言つても過言ではない。とゆーか嵐そのものだ。

洞窟の入口付近にいては風に煽られた雨が侵入していくので、おっさんは現在、洞窟内をちょっととばかり進んだところにいる。腹の虫はすでに限界の域に到達しようどジワジワと近付いてくるところだ。

たつた一日でと思うかもしけんが、この体は存外燃費が悪いのだ。車で例えるならば一リットルで五キロくらいだろうか。昨今の低燃費の風潮で一リットル三十キロ走る車も開発されているところに嘆かわしいことだ。

まあ、おっさんが乗つてた車は一リットル十五キロ程度でそれを基準にしてるから、大体人の三倍は食料を消費すると考えてくれ。おっさんが村にいた頃に畠仕事をすることになつたのも、お前はよく食うんだから自分で作れみたいな揶揄があつたからこそだ。

とりあえず、おっさんは人より食うので食料を確保せねば餓死してしまう恐れがあることはわかつて頂けたかと思つ。

そして、外に出るのは天気の都合上無理となれば残る選択肢は洞窟の奥に何かないか探すしかない。

どんな生物がいるか分からぬから危険？ そんなものこの空腹の前では関係ない。

むしろどんな生物であろうとも不意をついて殺して食つてやるべから

いの意気込みを見せなければなるまい。

弱肉強食焼肉定食、所詮この世は食うか食われるか。道具がないから火をおこすことが出来ないのが残念だ。

暗い暗い洞窟を進んでいく。

その歩みは牛歩の如くゆっくりと、細心の注意を払いながら恐る恐るといった調子だ。

この洞窟は内部が入り組んでおり、先を見通すことが出来ないが、身を隠しながら進むにはうってつけだった。

どれほど進んだのだろう。

入口から計れば大した距離を進んでないかもしれないし、もしかしたら結構な距離を進んでいるかもしれない。

そんな曖昧な感覚でしかなかつたが、この光景を見ればそんなことは吹き飛んでしまった。

洞窟内を進んだ先にあつたのはとてつもなく広い空間だった。暗く狭かつた洞窟の中を進んでたどり着いたというのにそこは仄かに明るく、野球場が丸々入る大きさで、天井は見上げるほどに広い。

「ん？」

天井を見上げていた視線を戻すとおっさんの入ってきた道とは反対側に明らかに人の手によるものと思われる扉があつた。

「行つてみるか……」

扉の前に立つたおっさんは意を決して扉をノックしてみる。次いで

「んぐださい」

声をかけてみたが反応は返つてこない。

聞こえなかつたのかと思い扉に手をかけて開けてから中に声をかけることにする。

そして開け放つた扉の中に見たのは確かに人が暮らしていると思われる場所だつた。

洞窟の中に作られた住居とでも言つのだろうか。

天井は約三トライメートルの高さがあり、通路の幅はおっさんがインセク昆虫形態のスキルを使ってクワガタになつても余るくらいはある。

「すいませーん」

声をかけたがやはり反応はない。

誰もいないのだろうか？ それとも居留守？

どつちにしろ人が来るまで扉の前で待機しているべきではないのか。しかし、そんな考えは惰弱だとばかりに腹の虫が催促する。おっさん自身も限界が近い。それがおっさんから冷静な判断力を奪つていく。

そしてそのまま扉の内部へとおっさんの足は進んでいった。

扉内部の通路の横には部屋のように区切られたスペースがあり、中を覗いて見れば寝台であろうものが確かにあつた。

その他にも調理場や書庫などの確かに人が住んでいる形跡がある。

「すいませーん。誰か居ませんかー？」

声をかけてみる。

これが住居ならば侵入したのはおっさんだ。

不法侵入など泥棒の所業だ。そんなことは分かつていい。

なのでおっさんは迷い込んだ旅人という設定だ。設定というかその

ものなのだが、そういうスタンスをアピールしないと住んでる人に会つた瞬間に切り掛かつて来られそうだ。

あの赤髪少女みたいに人の話を聞かないような人物だつたら出会つた瞬間にアウトだが、あれはわりと稀な例だろ？。

「あのー、すいませーん」

しかし、おっさんがいくら声をかけようとも反応は返つてこない。うーん……とりあえず誰もいないと仮定して調理場を漁るつか。いやいや、そんなんしたらもう言い訳できない。とりあえず誰かいなかくまなく探してみよう。

いくつかある部屋の中を探してみたが、人の姿を確認することは出来ない。

やはり誰もいないのだろうか。

最後に残つたのは通路の奥にある扉。

他の部屋には扉がないのにここだけには扉が存在する。そのことに微妙に嫌な予感がしないでもないが、ここだけ見ないといつことは出来ない。

生睡を飲み込み、扉に手をかけ開けてみる。

しかし、そこには誰もおらず十畳ほどの空間があつた。

ただし、中がちょっとおかしい。

なんとゆーかファンシーな世界観なのだ。

壁一面がピンク色でぬいぐるみやらおもちゃやらがいっぱい。お、幼児が使う滑り台まである。

部屋の中央には普通の三倍はある大きさのベビーベッドらしきものがあり、その頭上にはクルクル回るおもちゃ、通称オルゴールメリーオーである。

完璧に赤ちゃんの部屋だ。

とゆーか品揃えが豊富過ぎてこの部屋の持ち主の親バカ度がよくわ

かる。

ただ、その部屋の持ち主である存在の姿はない。その代わりにベビーベッドにはダチョウの卵より大きな真っ白い卵が鎮座している。今のおっさんは猛烈な空腹に襲われている。そんな時に卵なんてご飯に合いそうなものを見つけたのだが、こんな部屋に君臨する卵を食材として見ることが出来るのだろうか？いや、わかる。あれは食材として決して見てはいけないものだ。

だけど好奇心がくすぐられてしまうのは仕方あるまい。

一体あれは何の卵なのか。そして卵生の生物におもちゃなどをわざ用意するのはどんな人なのかと疑問が沸いてでてくる。

溢れる好奇心を抑え切れず卵へと近付く。

そしてそつと手を触れてみた。

手触りはツルツルで微かに温かい。

【無色の魔力溜まりを感知。吸収成功】

【ラルドは認識偽装のスキルを得た】

【ラルドは衝撃無効のスキルを得た】

【ラルドは時間遅延のスキルを得た】

え、何？何事？

いきなり天の声が聞こえたけど……

つてあれ？この卵つてこんなでかくなかったよな？

なんか小学一年生のお子さんが丸々入つてそうなくらいに巨大化してんだけど……

あまりの出来事におっさんビックリというか呆気にとられます。

しかし、そんな時間も長くは続かない。
なぜなら卵にひびが入ったからだ。

「え、嘘？ 生まれんの？ えーつー？」

「はい、パニック状態です。

体が自動的に動き、卵から一步、一歩と後ずさる。ついには壁へと背中がくつついた。

そういうしているうちに卵は割れ、中から出でてきたのは卵と同じく真っ白な体の翼のあるトカゲ。

違う。

どう見ても竜だ。

竜はおっさんの見てる前で翼を大きく広げ、辺りをキョロキョロと見回す。

そしてその蒼い瞳がおっさんへと向むかれ、ぱっかりと皿が合つてしまつた。

「

竜が何事か叫ぶが、それはおっさんでは判別出来ない。聞いたままを表現すれば、ギャウーだろうか。

竜が口を広げておっさんへと飛び掛かってくる。

生物の親というのは大体が子供のために餌を用意するものだ。実際おっさんも幼虫時代は親であろうクワガタに餌をもらつていた。ならば竜がおっさんことを親が用意した餌だと認識しても不思議ではない。

「お、おっさんを食べたら腹壊すよ！ 装甲とか邪魔でしょ！」

理解していないだろ？とは思いつつも必死で弁明を試みる。

無駄な弁明をする前に逃げると思うかもしれないが足が竦んでしまつて動かない。

ファンタジーな世界とは割り切ついていてもその象徴たる竜の前では

おっさんとの思考など関係なく、じわ田の前にしてみると体の方が反応してくれないのだ。

だが、竜はおっさんの予想に反して田の前で静止し、おっさんの顔をペロペロと舐め出した。

「ほえ？」

思わずマヌケな声が漏れる。
しかしそんなことは意にも返していないのか、竜のペロペロ攻撃は尚も続く。

うわあ、顔が竜の唾液でベチョベチョだ。

「ストップストップ舐めるのやめなさい」

竜の頭に手を置いて行為を制止する。
ちゃんとおっさんの意図が伝わったのか竜はペロペロするのをやめてくれた。だが、今度は頭をおっさんの胸にグリグリと押し付けてくる。

その……なんだ、もしかしておっさんじばこの竜の親とか思われてたりすんの？

「おっさんはお前のお父さんじばなによ？」

そつは告げても理解はしていないので、
グリグリ攻撃が止むことはない。

なんとゆーか、いつも懐かれるとおっさんの父性を刺激されるな。
だがおっさんが親でないのは純然たる事実だ。
それに、本当の親御さんに申し訳ない。

だつてベビー用品をこんだけ揃えるくじこじの子が生まれるのを楽しみにしたんだろ？から……

「リリーっ！」

その時だ。

扉を蹴破る勢いで一人の女性が部屋の中へと入ってきた。

その女性は一言で表すなら美人と言う以外に言葉が浮かばない。髪の色は光沢を持った白で歳をとつて増えて来る白髪とは似ても似つかない。髪の長さは肩くらいで水分を多分に含んでいるのかボタリボタリと髪の先から水滴が落ちている。

どこかのパーティーに出てたんですかと聞きたくなるような艶やかな青のドレスも同様に水に濡れてその肢体に張り付いており、メロン畠と言いたくなるような胸元やむっちりとした臀部をより艶やかに演出している。

「卵が割れる……っ！」

女性は愕然とした表情を浮かべた次の瞬間にこちらに視線を移し、まずは竜の姿を見て頬を緩めたかと思いきや、ギロリとおっさんのことを睨む。

彼女が部屋の中に入つて初めて真っすぐに顔を見たのだが、少し長めの睫毛や目鼻立ちが綺麗に整つているため、やはり美人である。そしておっさんが勝手に認定した左目の目元にある泣き黒子がやら色っぽい。

ただおっさんを睨んでいたためなのか竜を見ていた時は穏やかで少し垂れ気味だつた蒼い瞳は鋭角に吊り上がり、口は歯ぎしりが聞こえてきそうなほどに瞼み締められている。

「リリーに何をしたあつ！」

女性が声を怒り一色に染め、おっさん「近付いてくる。
そして同時におっさんの顔に向かって彼女の握られた拳が迫つてくれるのが見えた。

あ、これ問答無用で殴られるやつだわ。

ねつねつ、洞窟の中……（後編）

おつとじりめで来たって感じです。

ただ、またおつさんが強化されてしまった……

全然戦つてないのにまた防御力アップ

タグがあらすじにての皿を入れるべきなのかどうか……

女性の拳はおっさん顔の中心を正確に打ち抜いた。

「普通に痛いつ！」

なつ！？

激痛に顔をしかめるおっさんと驚愕の表情を浮かべる女性。
おっさんの味わった痛みは例えるまでもなく人に殴打された時のそ
れだ。
だというのにその衝撃自体は全くないためのけ反るということはな
く、ただ単に痛みだけが顔を起点に全身に回る。

「効いてないですって……」

に座り、痛いと嘆いたじさん

二〇一九年六月二日

女性はおっさんたちの「シッコ」を無視して距離をとり、構える。

「限定、部分解除」

女性の喉^の咳^きと共にその右腕^{うで}が白い鱗^{うろこ}と爪^{つめ}を持ち肥大化^{ひだいか}する。女性の華奢^{はせ}な身体^{からだ}には似つかわしくないその腕^{うで}は、今なおおっさん^{さん}の胸^{むね}に顔^{おもて}を擦りつける竜^{りゆう}のものと酷似^{くそく}していた。

「見かけによらずたくましい腕をお持ちですね……」

あれはやばくね？

殺る気が伝わつてくるんですけど

「とりあえず落ち着いて話でも……」

「黙れっ！」

そうは言つても……

とゆーか、なんでこいつも立て続けに人の話を聞かない女と出会つのだろうか。

おお、ゴシドよ……おっさんはあんたになんかしましたつけ？

「リリーに施された護りを解くだけに留まらず、拐かそつなんて万死の刑に処してもまだ足りないわ」

要するに凄く怒つてますと彼女は言いたいらしく。

事の成り行きを弁明したいのだが、ひとつせ聞いてくれないんだがうな……

だつたら……

「武装を解除しろ。ここがどうなつてもいいのか？」

胸に擦りつけられる竜の頭を抱え込みながら女性を脅迫する。

第三者の目から見ればおっさんは悪だ。

だが、こつでもしないと話聞いてくれそうにないんだもん。

「……下種め」

女性の腕が元の白魚のような腕へと戻つていく。

ああ、心が痛い。

だけど睨みつけるその瞳は、こ褒美と言えなくもない。

「おっさんの話を聞いて貰おう。あと、こくつか質問がある。拒否

「お、こら顔を舐めるんじゃない」
「權はない。拒否すればこの竜がどうなるかわかつてゐだらうな……」

ペロペロ攻撃リターンズ。
おつさんの顔は飴じやないんだから、甘くないよ。むじひ塩つ氣があるはずだからね。

「…………リリーに手出しまはしないで」

「君がわっふ…………素直にぬおつ…………おつさんのおまつ…………要求をのほほ…………受け入れてくれるのならにあつ…………だからやめなさいつてば」

「クウーノ…………」

「そんな叱られたワソロ口みたいな声で鳴いてもダメだよ。おつさんは今から大人の話し合ひって奴をするんだからね」

竜に言い聞かせるかのように囁つと顔を舐めるのは止めてくれたのだが、おつさんの胸板とこづかの装甲に顔を擦りつけるようにして甘えてくる。

まあ、顔を舐めないだけマシか。

さて、これからこの女性への質問タイムだ。
しかしその前に……

「まず、食べ物を恵んでくれませんか?」

腹を満たすことを優先しよう。

与えられた食料は黒いパンと干し肉だった。欲を言えばスープ的な汁物が欲しいのだが、用意してくれと言つて素直に従つてくれるかは不安だ。

そりやあこつちには人質ならぬ竜質がいるのだから表向きは素直に聞いてくれるかもしぬないが、これ以上好感度を落とす行為はいただけない。

今もおっさんがパンを咀嚼する行為の一拳手一投足を注視し、下手なことをしたら暴力に訴えて立場を逆転されかねない。

「さて、話し合いをはじめようか」

「……望みはなに?」

「だから話し合いだつてば」

「リリーの心臓? それとも鱗や爪、牙かしら?」

「いや、聞いてよ……」

「でもおあいにくまだまだけど、リリーはまだ生まれて間もない幼竜に過ぎないわ。あなたの欲するドラゴンの魔力素材としてはまだ大した力を持つていね。だからリリーを今すぐ解放して。代わりに私があなたへ心臓を提供するから」

おっさんの話を聞いてないのか、それともあえてそつしているのか女性は一気にまくし立てる。

「だからまずはおっさんの話を聞きなさいっ！」

故に怒鳴り付けるように声を発した。

まずは何事も話し合いが肝心だ。

相手を話し合いのテーブルに着かせる」とは先の少女の時は失敗したが、今度こそはと意気込みをかける。

「わかった……」

おっちゃんの熱意が通じたのか女性が話を聞く態勢をとつてくれたのは僥倖だ。

「まぢは円滑な話しあてのためにお互に自己紹介を行つた。まぢはおっちゃんからね。名前はラルド。ダンディかつストイックな男で未婚です。あえてもう一度言つと未婚です。好みのタイプは君のような果物屋さんを開けるボディの女性です」

「ラルド……ふつ

なんか名前を鼻で笑われてしまった。

ヒューがおっちゃんの好みのタイプはスルーですか？
まあ、今思つと好感度がダウングラムするようなことを言つてしまつたのでスルーしてくれるのは有り難い。

「次はそつちね」

「クラベジーナ」

女性の答えは簡素な単語ひとつだ。
恐らくではあるが、

「それが君の名前かな？」

おっちゃんの言葉にクラベジーナさんはコクニと一回だけ頷いた。
なんとも素つ気ないことだ。

「えじやまぢはおっちゃんの釈明を聞いてくれ……」

そうしておっさんばかりここまで来たのかと、なぜか竜が卵から生まれておっさんに懷いたという状況を一からバカみたいに正直に説明した。

この場において嘘を混ぜるのは大した益を生まないし、ばれた時に厄介だからな。

「……それを信じると？」

「出来れば信じて欲しいかな」

「たまたまここへ入り込み、偶然リリーの卵に触れたら、なぜかりリリーが生まれて懐かれた。ドラゴンの魔力素材には全く興味がない。そんなじ都合主義のような豚の言葉を信じると言うのか」

「そうだよ……つていうか今、おっさんのこと豚って言つた？」

「お前はラルドといつ名前なのだろう？　ならば豚だ！」

全く脈絡がない。

でも豚と呼ばれても悪い気はしないな。

「まあ、いい。リリーを解放して即刻ここから出でつけ。ここを口外しないと言つのならば殺はしないでやる」

それに正直が過ぎて立場が逆転しかやつた。

おっさんと竜の様子を見れば、竜質としてどういふじようと思つてないことが丸わかりなのも原因の一端を担つてゐるかも知れない。

「よし、リリー

「リリーが汚れるから名前で呼ぶな

……君はクラベジーナさんの元に行きなさい

……行く気配がないな。

「ないしょ？　とばかりにクラベジーナさんへと視線を移す。

「リリー？ そんな豚なんかに構つてないで」
「おひこおひこで？」

しかし、リリーはクラベジーナさんの言葉を無視しておっさんに纏わり付く。

「リ、リリー？」

クラベジーナさんの顔に困惑と焦燥が浮かぶ。

ハツキリ言えばリリーの中ではおっさん>クラベジーナさんの構図が作り上げられていると言つてよいのかもしれない。

「豚、どうにつけど？」

「……おっさんが聞きたいよ」

「あんたリリーに何かしたわけ？」

「神に誓つてないはず……だよね？」

おっさんがしたことと言えば卵に触つて、リリーが生まれて、リリーがあっさんを見たかと思つたら懐かれた。ただそれだけ。しかしそのプロセスの中に何かしらしでかしてないとは言い切れない。

「ちなみに竜つて生まれて初めて見た存在を親だと思う生物？」

「断じて違うわ。確かにドラゴンは初めて見た存在を親と思うけど、ドラゴンは同種の魔力を感じ取つてからドラゴン以外の種を親とは認識しないわ。だからたかが人間のあんたを親と誤認するのは有り得ない話だわ。ほんつつつとおおおおに何もしてないのね？」

念を押されて聞かれてもなー。
頭を働かせる。

そもそもおっさんはカテ「ゴリー」で見ると人ではあるがただの人つてのには当てはまらないかもしれない。

なにせ虫人ムシヒトだ。そのせいなのか。

いや、竜は同種の存在を感じ取っているのならば、おっさんはアウトだ。だつて竜じやないもん。

じゃあ、何が原因だ？

考え込んでいると天啓のようにプロローグと考えが降つて湧いてきた。

確か、おっさんが卵に触れた時に無色の魔力吸收のスキルが発動したはずだ。

これによって吸収したのが竜の魔力ならば、それを感じ取つたりリーガおっさんを同種として認識してしまつた可能性がある。だが、正直にこれを告げたらおっさんの命がますいことにならないか？

結局お前のせいだとか言われて殴られるオチが見える。

隠すべきだ。そう、これはおっさんの秘め事にするべき事項である。

「な、なんにも知らないよ？」

「なにか心当たりがあるのね？」

な、なぜわかつた。

クラベジーナさんは読心術でも心得ているのか……

「ない。何もない。おっさんまるで何もわからないです」

「言え」

「何も知らないってば！」

「だつたらなぜ拳動不審になるのかしら？」

「おっさんは元から拳動不審だよ」

「……はあっ、まあ、リリーがあんたを父親として認識している以

「おっやアクラベジーナさんは追求を諦めてくれたみたいだ。

「すでにあなたを父親として認識してしまっている以上、あなたを殺せばリリーが悲しむ。だから今はあなたを殺さないわ」

「この子と私はどうゆう……」

「あなたには関係ない」

おっやんの質問は途中でぱりぱりと切られてしまった。

「とりあえずリリーの親権をあなたから私に移すわ」

「出来るの？」

「出来るのって直つかするの。あなたは父親ではないといふことをこの子に認識させし私が母親だと認識させる。これしか問題解決の手はないわ。少なくとも言葉を覚える前に本能に刷り込まないと……」

「……」

クラベジーナさんの呟いた言葉の最後の方は小さく過ぎて聞き取ることが出来なかつた。

それにしても……

「親権がどうのこのいつて、おっさん達、なんか夫婦みたいだね。クラベジーナさんのことジーナって呼んでいいかな？」

まあ、親権を争つてゐるのなら崩壊間際ではあるけどね。でも、これを期にクラベジーナさん、いや、ジーナと仲良くなれたらいいなと思う。

「嫌」

しかし、回答はただ一言だった。

手厳しい。

だが、脳内ではジーナと呼ばせてもらっています。

「あー……そうだ。もしかしたらなんだけど、クラベジーナさんって竜？」

「……ええ」

「だよね。腕とか竜っぽいのに変わったし、リリーの代わりに心臓をどうのいひのいつてたからやつかもってちょっと思つてたんだ」

腕が変わるの見なかつたら、そういう考えなど微塵も起きなかつたに違ひないが、さすがにあれを見てしまつとやつに「ううん」と考へも起きたる。

「リの子の母親ってクラベジーナさんなんだ」

人妻で子持ち。

旦那を知らないだけに何か滾るものがありますなあ。

「……あんたには関係ない」

しかし、そこでジーナは言葉を濁してしまつた。

もしかして、リリーの本当の母親ではないのだらうか？

それにしても、ジーナと仲良くなるといつのは前途多難なようである。

ねいわざ、語つ合ひつ（後書き）

リリーもクラベジーナも最近買った『幻想世界1-1カ国語
ング事典』を参考にさせていただいております。
便利です（^__^）

おひしゃく、下半身が……

「で、親権を移すってどうやんの?」

裁判所で協議するみたいな」とは出来ない以上、具体的な案が必要だ。

「さあ? 私もこんなこと初めてだし……とつあえずリリーの田の前から消えて。期間は一生」
「ふむ、それが一番確実なのかもね。ただ……外はまだ嵐だよね?」
「ええ」

笑顔で肯定された。

「とつあえず嵐が止むまではリリー呼ぶなってば」
「この子の視界に入らないといふで過(オ)セてくれない? おっさんも用事があるから嵐さえ収まれば出ていくから」
「……いいわ」

「おお、却下されて今すぐ出ていけとか言われるかと思つたけど話がわかるね。

「んじゃ、おっさんはテキトーにへつらうでるからあとアロシク

やつぱり壊くつこニーを引つべきがして部屋を出でこいとする。

「ちよ、リリー。付いて行つちやダメよ!?

後ろの方でジーナが慌てたような声を上げるので振り返つて見れば、リリーがおっさんとのあとを追つて走ってきていた。

「いいかい？ おっさんはこれにてロボンから君のお母さんと一緒にここにいなさい」

「

うん、全然わかつてないね。

だつてすっげー嬉しそうに鳴いてるもん。

竜の表情とかよくわからぬけど確実に笑顔だわ。

「ひつなつたら実力行使だ」

身を翻して部屋の外に出て即座に扉を閉める。
いやー、おっさんの人生で五本の指に入るスピードだつたよ。

「

おっさんが扉の外で達成感に包まれていると部屋の中からリリーのものらしき歎哭の叫びが聞こえてくる。

ああ、出合つてまだ一時間未満だといつものリマドおっさんのこと……

なんて感慨に耽る余裕などなかつた。

ドンッという音と共に局所的な地震が起きる。
音の発生源は今しがた閉めた扉からだ。

中の様子を伺うことなど出来ないが、ジーナの「リリー、止めなさい！」って声が聞こえたことから何が起きているのかは推し測る

」とが出来る。

おっさんのが扉から数歩離れるのと扉に亀裂が入るのはほとんど同時に
だつた。

亀裂が入つてしまつとあとは容易に扉は粉碎されてしまい、中から
白き幼竜であるリリーが現れた。

「

リリーはおっさんの姿をその視界に入れると喜びの声を上げて近寄
つてきた。

「ダメって言ひたじやん……」

「こひまでやるのか。

いや、竜に人の常識など説いても詮無いことなのかもしれん。
それにもしても、よく扉もあれだけ持つたものだ。五発くらいは耐え
たんじやないか？

すつげー頑丈。

「ちょっと、なんですぐに遠くへ行かなかつたのよ」

リリーのあとに続いてジーナが部屋から出でてくる。
顔に不満と書いてありそうな表情だ。

「まさか扉を破壊するなんて思わなかつたんだよ……ヒューカ力づ
くで止められなかつたの？」

「バカ。そんなことしたらリリーが怪我するかもしれないじゃない

言葉が出ません。

「こつはアレだ。典型的な子供を叱れない親バカつて奴かもしれな

い。だてて元供用のおもひぢやを貰い揃えてないな。

「じゃあ、今度はいつまへやるから協力アロシク」

「……ダメよ」

「は？」

「リリーがあんな声で泣くんだもの……可哀相過ぎやわ」

「もしもし？ それじゃ目的は達成されないのでは？ 」「心を鬼にするべきだよ」

「鬼になるならあなたがなりなさい。私には無理」

諦めるのはえーな……

まあ、おっさんが原因であるわけだし、おっさんと出来ることならなんでも協力しなければなるまい。

おっさんの挑戦が今、始まる。

で、程なくして終わった。

結果は惨敗。

リリーったら何してもおっさんの居場所嗅ぎ付けやがんの。何度も見えなことこりに移動できたのに即効見つかって、はいペロペロです。

「もう一回」

ジーナが無感情に告げる。

序盤までは協力してくれたのに最早ただの傍観者に近い存在と化していた。

「うーん、でももう外に出るしか方法がないんだけど……」

外はいまだに嵐。

台風のリポーターじゃないんだから、そんな中に突撃するのは御免だ。

「外はダメよ。万が一にでもリリーがあんたに付いていたら最悪の結果が待ってる」

「ならクラベジーナさんが全力で押し止めればいい話だと思つんだけどな」

「リリーには怪我一つなく育つて欲しいの。そう誓つたから……」

誰にとは聞くべきではないのだろう。物凄く気になりますけどね。それにしてもリリーのことはどうするべきか。

ジーナが実力行使を忌避している以上、打つ手がないと言ふ。それにジーナの言葉から察するにおっさんが実力行使でビリビリするのを止められそうだ。暴力でもって。

まあ、そもそも何の罪もないリリーに対して実力を持つて排除する考えなど端から除外の対象だ。実力自体がないとも言えるがね。ならばいっそ

「もうおっさんが父親でいいんじゃね？」

出来ないと言うのならば受け入れてしまった方が良い。

しかも、おっさんが父親ってことはジーナは母親だ。

つまりリリーを通しておっさんとジーナの間に内縁が生じる。あれ？ 悪くないどころかこれって名案だろ。

おっさん田茶苦茶冴えています。

「嫌よ」

「即答ですね」

やつぱ旦那とかいて、その辺りを気にしてゐるのかな?
気配のカケラすらもないのに即ま忌ましい奴だ。

「リリーの父親が豚とか有り得ないわ」

「……それだけ?」

「十分な理由でしょ」

「いや、ジーナの旦那の立場がなくなるからとか……」

「は? なんで私に旦那がいる設定なのよ。とゆーかジーナって呼
ぶな」

旦那はいない、だと!?

未婚の母つて奴か!
た、堪らん……

「鼻息荒い、気持ち悪い」

「おつとスマン。ついついジーナの属性に興奮してしまった

「だからジーナつて呼ぶなってば!」

「H A H A H A、ソーリー ソーリー ヒゲスオーリイー

「殺す」

あ、痛い。

マウントポジション取られた。

ジーナつてば無心に殴つてるよ。

しかしながらな……このアングルは絶景だ。

したから見上げる二つの丘のなんと見事なことよ。

熱情を持て余すとはこのことか……

「ひのひ」

突然ジーナが可憐^{かれい}らしい悲鳴を上げ、瞬きほどの時間でその場から飛び退く。

一体どうしたと顎^{あご}つのだらうか……

理由はすぐにわかつたが深くは語るまじ。ただ、カブトムシがヘラクレスとまではいかないがアトラスくらいにはなつていただけは告げておく。

ジーナはその変化でも感じ取つたのだらう。

「な、なんで……バカ、変態つ！」

「男ならば当然の反応だつづーの。まあ、おつさんも恥ずかしいけどね」

顔を真っ赤にするジーナ。

しかしおつさんは断固として不可抗力の看板を掲げたい。

未だに褲^{ふんどし}一丁なのはおつさんに合つズボンがないからに他ならない。

でも恥ずかしいことは恥ずかしい。溜まってるんだろうな……

「とりあえず何か腰に羽織るもんくれ」

「」の台詞、虫人^{ムシペイ}になつてから一回目である。

これを言つた瞬間におつさんに哀愁^{あしゆ}さが滲み出てやしないだらうか?

「せひひ」

顔に吊あがつたるむつにジーナがおつさんに衣類を渡す。

それを手にひとつおっさんは驚愕するしかなかつた。
なぜならば……

「ス、スカートだと……」

渡されたのは青いスカート。

それもミニだ。

下半身に当てて確認してみたが太ももの真ん中辺りまでしかない。

「いやー、ジーナは冗談きつついなー。おっさんの性別は男だよ
「冗談もなにもあんたに渡せるのはそれしかないわよ
「いやいや、タオルとかでいいんだよ？」
「取れたら嫌じやない」

確かにそつかもしんないけどさ。

「じゃ、じゃあせめてロングなスカートを……」

もはやスカートを着用する覚悟は決めた。
ズボンとかがあればまだいいのだろうが、村の男連中のものでもダメだつたのだからジーナのサイズではパツツンパツツンビニローラ入
りもしないだろう。
だつたらもう妥協するしかないじゃない。

「気に入つてるからダメ」

「そーゆー問題？」

「お氣に入りの服をあんたが着ていると想像しただけで寒氣が走る
わ」
「つう……」れしかないのか……」

渋々ながら着用してみるのだが……

「ウエストがきつい」

「当然ね」

全然閉まりません。

「そこでこれよ」

そう言ってジーナが取り出したのは安全ピンみたいな形のもの。つーかもう安全ピンだ。

それを数珠繋ぎにしたものの端っこを開まらないスカートへと刺して留めた。

「これでよし」

よくはない。

だつて男の尊厳とか諸々が崩れてくもん。

でも待て。世の中にはメンズスカートという分野のオサレアイテムも存在する。

これもそれだ。

例えメンズスカートは一般的にズボンの上から着用するものであつてもそれは一般的な話であつて、一般的じゃないならばズボンを履かなくともオッケーなんだ。

改めて自分の下半身を見てみる。

スカートから褲が見えるのは「愛嬌」としてオシャレとして見ると悪くないかもしれないかもしれない。

「気に入った」

笑顔でジーナに伝える。

しかし、その発言を聞いたジーナの顔は確実にドン引きだつた。

「気持ち悪い」

彼女の言葉がおっさん的心を貫ぐ。

現実とは斯くも厳しいものであつた……

ねつねつ、下半身が……（後書き）

R-15なり。これくらいこの表現は許されますよね?
これでも一度ほど書き直したんですよ……

おっさん、相互理解を深める

ジーナは反対しているが、おっさん自身はリリーの父親になると決意を固めた。

確かに母親であるジーナの意思は重要だが、もっと重要なのは子供であるリリーの意思だ。

そのリリーがおっさんに懐いている以上、父親と名乗るのは絶対にダメと言えるわけはなかった。

渋々、本当に渋々ながらもおっさんが父親と自称することを認めてくれたジーナとリリーと共におっさんは暮らすことになった。

一つ屋根の下に赤の他人同士が住む。まあ、厳密には屋根の下ではないのだがそれは瑣末な問題である。

要はおっさんとジーナは同棲状態といつわけだ。

これはもはやアレがあれしてコレがこれする状況になつても大丈夫つてことに違ひない。

大樹の用事？

ふん、そんなもんはおっさんが死ぬまでに果たせば問題ないのだ。大樹と美女との同棲ならばどちらを選ぶかは火を見るより明らかである。

「ところで、ジーナって竜なんだよね？ でも見た目人間そのものなのは進化したから？」

腕が竜っぽくなるのはわかつたが、ジーナは腕を竜っぽく出来る人間としか思えない。

おっさんも心臓云々のことをジーナが言わなければそうだと思つていたことだらう。

「だからジーナと呼ぶなつて……いや、もうジーナでいいか……
私が人の姿をとるのは進化などではない。既に人より優れた存在であるドラゴンが人の姿をとる。それは進化ではなく退化ではないか？人の姿になるのは擬態のよつなものだ。私の父親が人間だつたらしくてな。だから人間の姿をとつている」

「ふーん、それじゃ父親がエルフだつたりドワーフだつたりしたらそれになれるわけ？」

「そうだ」

なら、仮におっさんとジーナの間に子供が出来たら虫人になれるつてわけか。

「リリーは何になれるの？ やつぱ人間？」

「リリーは……確かエルフだつたか」

「つまりエルフとヤツて出来たんだ」

「もう少しオブラーートに包んで話せないのか……。まあ、認めたくはないがあのくそエルフがリリーの父親には違いない。認めたくな

いがな」

どことなく他人事なんだよな。

それにしてもなんで憎々しげに肯定するんだろうか。

もしかしてリリーの本当の父親はかなりの遊び人とか？

とにかくリリーの本当の父親の話は避けた方がよからう。

「どれくらいでエルフの姿になれるのかな？ つーか今更だけりりーって息子と娘どつち？ まあ、名前の響きからして娘っぽいんだけど、生まれる前から名付けてたみたいだしね」

「ドラゴンは雌しか生まれない」

「じゃあ娘か」

元の世界の親父＆お袋様。

いきなりですがあなたの方の息子に娘が出来ました。

あなた達にとつたら孫です。

体長はすでにおつさんより多少でかいですが、元気な『竜』です。
いや、冗談とかじやなくマジ。

天国から見えるならば見守つてやつて下さい。
もし、まだ生きてるなら身体に氣をつけて年金が受給出来るまで長生きしてくれ。

「んで、どれくらいで擬態だつて？ それが出来るようになんの？」

「大体、半年から一年くらいの間だ。言葉を話せるようになつた辺りで親が教えてやるんだ」

「えつ、おつさんだと出来なくない？」

「私が教えるから問題ない」

そうだよね。

あれ？ ジャあおつさん、親としてなにをすればいいわけ？

父親初体験だから何していいのかわからん。しかも、娘は竜だ。人間とはまた勝手が違うだろ？

「なら、おつさんは生き様を見せるか」

「どうしてかわからないが、果てしなく不安だ」

失敬な。

おつさんの生き様が素晴らしいのならばそれを手本にすればいいし、ダメならば反面教師にすればいいだけの話だというのに……いや、別におつさんの生き様がダメだつて思つてるわけじゃないからね？

「とゆーか今度は私が言いたいことがあるのだが、その前にその変

な兜くらいは取れ」

そう言つてジーナはおっさんの顔を見つめる。だが、おっさんは兜など被つてはいない。

まあ、兜を被つているように見えるのは否定しないがな。

そのことをジーナに言つてみたが当然信じてもらえず、なら取つてみるみたいな流れになつて頭を引っ張るジーナと踏ん張るおっさんの構図が出来上がり、おっさんの首がもぎ取れるんじやないかくらいの痛みに耐えた結果、おっさんと兜みたいな頭は着脱不可ということを信じてもらうことが出来た。

「まつたく、お前はなんなんだ？」

「おっさんは虫人^{ムシヒト}つて言つ、虫から進化した新たな人らしいよ」

「……で？」

「でつて……」

「その話のオチ」

「いやマジだからオチとかないよ？」

「本当にのか？」

「イーエスツ！ 見てくれ。昆虫形態^{インセクトフォーメ}

【昆虫形態のスキルが発動した】

「

天の声と共におっさんの姿がクワガタヘと変身する。物理的には有り得ないが、その大きさはリリー並いでかい。ジーナがそれを確認したところで昆虫形態^{インセクトフォーメ}を解いて人型に戻る。どこをどうやつたらそうなるのかわからないが、褲^{ふんどし}もスカートも昆虫形態^{セクトフォーメ}をすると消え去り、人型に戻ると履いた状態で戻れるという不思議現象が起こる。

そのことに細かいツツ「ミはしない。なぜならおっさんにとっては

都合がいいのでな。

「……頭痛い」

言葉通り頭を抱えるような仕草をするジーナ。まあ、新種の人種つて言われても普通は信じられるわけはないよな。今は脳が処理しようとして踏ん張っているのだな。でも、ジーナには知つておいてもらいたかった。何より……

「竜つて狙われてるんだろう？ なんでかは推測でしかないけど理解はしてるつもりだ。要は珍しいからだ。なら、竜並に珍しいおっさんは同様に狙われる恐れがある。なら、運命共同体としておっさんはジーナ達に相応しいでしょ」

「……そうか。最悪、お前を差しだけばリリーは助かるかもな」

なんか怖いこと言われてる。

でもまあ、娘のために命を賭けろと言われたら従うのもやぶさかではない。

しかし命を賭けるほどリリーに愛着があるかと聞かれればまだ首を傾げてしまう段階かもしれない。

そこらへんは追い追いの話だ。

「それはそれとしてちからから竜竜と言つてこるが、私達はドラゴンだ。多少イラッとするから直せ」

「わかった

素直に頷く。

彼女なりのこだわりなのだろう。尊重でできるところはするべきだ。

「とにかく、お前いくつだ？」

「なぜにそんなことを？」

「いや、外見から判断はつかんし、自分のことはおつかないと嘆か
いらふと氣になつてな」

おつかんの年齢か……

うーんと、今の世界でクワガタになつてからは一年くらいか？　でも、元の世界では二十代も半ばを越えてるし……あれ、でも人間として死んでからクワガタになるまでの時間とかあつたけどそれも入れるべき？なんかじつはやになつてわからぬー。

「永遠の十七歳です」

とつあえずそう答えてみた。

別にテキトーに言つたわけじゃないぞ？

物語とかつて大体十七歳とか高校一年生が多いんだもん。

とゆーか十代後半が大半じゃん。

だからおつかんも主人公気分を味わいたかつたとゆーか……

まあ、人間生とクワガタ生を足して二で割つたら大体そんくらいだから少し鱗を読んで……あつ、ジーナがすげー胡散臭そうな田であつさんを見る。

そりや、十代で自分のことはおつかんとか言つ奴はいないよ？
でもいいじゃん。

おつかんはいつまで経つても気持ちは少年なのだから……

「とつあえず心はおつかんの氣持ち」

「で、本当は？」

ああ、逃げられない。

ジーナの田は真実を追求する探偵の「」とおっさんを捕らえて離れない。

もう、足した年齢を言ひやうか？

否、押し通る！

「十七歳です」

「無理してゐ感が出てゐる。まあいい、それほど興味もないしな」

「ああん、酷い。でも……いい」

何がいいつてその冷めた視線と態度だね。

相性バツチリじゃね？

実はおっさんもジーナの年が知りたいのだが、女性に年齢を聞くのは野暮つてもんだ。

これでジーナが二十五より下ならばそれだけで今のおっさんの気持ちが萎えてしまう。

だが、折を見て聞いてみよ。

とりあえず今は、

「リリー、みるこへな

おっさん達の会話の間、ずっと戻えてきていたリリーの頭を撫でてやる。

するとリリーは嬉しそうに田を締めておっさんの行為を享受した。うむ、可愛いな。

「ちつ、リリーに気安く触るなど言いたいがリリーが嬉しそつて受け入れているから、文句が言えない……」

「ジーナも撫でてやればいいじゃん」

「そうだな」

ジーナは立ち上がりてリリーに歩み寄り、背中を撫でた。リリーはその行為に対しても気持ち良さそうな唸り声を発す。

「ああっ、リリーったら可愛いわ。す、キュー！ も、可愛い過ぎる。ハアハア……」

そんなリリーの反応がジーナの心の琴線に触れたのだらう。めちゃくちゃ興奮しながらリリーに頬擦りし出す。そしてそれを受けたリリーはおっさんに頬擦りし始めた。これはおっさんも何かに頬擦りした方がいいのか？具体的にはジーナの胸とかに……

うん、撲殺される未来しか見えないから控えておこう。

とにかく、こうしておっさんとジーナとリリーの一人と一匹の生活はスタートしたのだった。

おひやご、相互理解を深める（後書き）

色々な補足回でした。

まだこの世界でのドラゴンの設定や主人公のパーソナルな設定はあるのですが、大体の感じを掴んでくれば幸いです。

クラベジーナと料理（前書き）

器話のよしなものです。

クラベジーナと料理

ジーナ達と過（）すことに決めた日の翌日。
と言つてもここは洞窟の中なので朝と夜の区別はないので、眠つて
から日が覚めた時のことだ。

おっさんはそこはかとなく漂つ異臭によつて強制的に脳を覚醒させ
るに至つた。

「なんだこの臭い」

声を発してから再び漂つ香りを鼻から吸い込む。

「うづうづ」

感想を言えれば、鼻の奥に不快な痛みと涙を誘つ臭いだ。
例えるなら「ガソリン」と「火薬」を足して一倍した感じが近いだらう
か。

おっさんガソリンの臭いって微妙に好きで、目の前にあればとりあえずチャレンジするんだけどここには「ハーサンキュー」だ。

鼻を摘みながら起き上がって隣を見てみれば、おっさんから離れようとしたために一緒に寝ることになつたリリーがぐつたりしていた。

「リリー大丈夫か？」

「……」

明らかに元気ねーな。

原因は言つまでもなく」の異臭だらけ。

立ち上がりて臭いの元を探すことにするが、おっさんがどこに行つとも付いてこようとするリリーが微動だにしないことから粗筋参つてゐる様子が伺える。

おっさんを見つめるリリーの口には「逝つてらひしゃい」と語つてしまふように見えた。

臭いの発生源は簡単に見つかった。

そこはこの住居における厨房で、ジーナが鍋で何かを煮込んでいた。

「あ、おはよ。よく眠れたかしら?」
「……多分」

この臭いがなければ快眠だつただろうがね。

「何やつてんの?」
「何つて、料理よ料理。リリーに精をつけてもらわなくちゃならな
いからね。はりきつちやつた」

料理ではなくて何かの実験じゃないのかと言つてやになるのをからうじて押し止める。
まだ臭いが酷いというだけの判断材料しかない。これがまずいとは限らないのだ。

「ちなみに何をお作りになられたのでしょうか?」
「シチューに決まつてゐるでしょ。匂いで分かるじゃない。安心しな
れど。ついでにあなたの分も作つてあげてるから」

シチューってこんな臭いだつたっけ……

つーか鍋の中が紫なんですね(ジ)

いや、おっさんが知らないだけで紫のシチューがこの世界に存在しているのかもしない。

お：さんの常識に三で嵌めるのは間違しの元た

「朝からシチュート重くない?」

「何言つてんの？ シチューは凄く栄養価が高いんだから精をつけ
るって意味でこれほど適した料理はないわ！」

それ自体は間違つてはいなかもしんない。

「あ、ありがたいね。ところで味見はした?」

ここで予防線を張る。

「一つめのベタな展開として料理音痴は味見をしない」というのがある。
ならば味見と称した毒味を本人にさせるのが一番だ。

「今する。……うん、美味しい」

ジーナは小さな皿にシチュー（仮）を味見して満足したように微笑む。

「ほら、あなたも」

差し出される小皿。

それは今までジーナが使用していたもので……

「 いただきます」

おっさんはそれを躊躇なく口にした。

まあ、味の面ではジーナ自身のお墨付きもあるし大丈夫だろ？
問題は食べた後に胃から立ち昇つてくるであらう異臭しかない。

だが、その判断は間違いだつたと言わざるを得ない。

口にした瞬間、おっさんの背後に雷のエフェクトが発生したかのよ
うな衝撃が口の中に広がり、視界が白一色に染まる。

意識が戻つて無理矢理シチュー（仮）を嚥下すると食道を通る時に
通つた道をシチュー（仮）が焼いていく。

無事に胃に達したとしても胃酸と互角の戦いをみせ、なおかつ異臭
となつて食道を逆流していく。

はつきり言おう、クソまずい…！

おっさんの人生でもナンバーワンのまずいだ。

これなら砂場で作った泥団子の方がマシと言えるレベル。

一体何を入れればこの化学兵器を料理しながら作成できるのだろう
か。

意識を失い、動きを止めそうになる頭を女王様に罵詈雑言を浴びせ
掛けられる妄想をすることで必死に駆動させる。

そうでもしなければ忽ち意識は闇の彼方へと消え去り、お花畠と三
が見えるだろう。

くそつ、おっさんには毒は効かないはずだ。だつたらこれだけの力
を持つことは毒ですらなこと言つのか…

「どうだ？」

ジーナが期待を込めた瞳でおっさんを見つめる。

「クソよつまűー」

正直は美德だ。

これを美味しいとかのたまつたジーナの味覚は信用してはいけない。美味しいとでも言おつものなら、二食これになる。それだけは嫌だ。

「味覚大丈夫か？」

「え、ジーナの？」

「私じゃなくてお前のだ。こんなに美味しいのに」

ジーナは再び小皿に移したシチュー（仮）を口に運ぶ。そしてやつぱり美味しいと一言呟いた。

もはやシチュー（仮）ではなくヘドロと呼ぶに相応しい液体をなんでもないかのように攝取するとは……アンビリーバボーやで。

「さ、出来た。早速リリーに持つていつてあげなきや」

「そのヘドロを？」

「味音痴は黙つてろ。とゆーかそれ以上私を不快にさせる発言をすればお前の○○○を××××つて に沈めてやる」

「すいません」

さすがに○○○を××××されるのは勘弁だわ。

とゆーか味音痴言られたよ……

確かにおつさんの味覚なんて大きく分けると美味しい・食えるけどまずい・食えないほどまずい・至つて普通の四つくらいしかない。あとは辛いとか甘いみたいな味の感想を判断するくらいだ。これらは一般的な範囲からはあまり外れてないはず。

そななおつさんの味覚はあのヘドロを絶対に食えないほどクソますいと新たに五つ田の評価を作り出した。

なおかつ味の感想は『痛い』だ。

こいつをリリーに食わせるのはいかがなものか。

しかしおつさんはリリーに食べさせる前に無理矢理ヘドロを全て平

らげるほどガツツはない。

……すまない。リリーよ、犠牲になつてくれたまえ。

「…………」

ジーナが厨房から去つた後、リリーのあげた悲痛な叫び声がえらく耳に残つた。

「た、大変よ！ リリーが……リリーが……！」

慌てた様子でジーナが厨房に舞い戻つてくる。
まあ、何が起こつたかおっさんは察してゐるわけだが……

「どうした？」

一応聞かねばなるまい。

「それがいきなり意識を失つちゃつたの」

予想通りではある。

「ハラナオールとドクケセールとキキメバイーゾはあるか？」

「あ、あるわ」

「んじや、ハラナオールとドクケセールをすり潰して水を加えて混ぜ合わせ、一煮立ちさせたものにキキメバイーゾを加えたものを飲ませればとりあえず大丈夫なはずだ。すぐに用意しよう。手伝つてくれ

「う、うん」

急いで準備をする。

リリーはおっさんより丈夫そだから死にはしないだろ？が、早ければ早い方がいい。

ちなみにこのレシピは村に暮らしていた時にトイースの嫁から教わったものだ。なんでもこれであらかたの毒や病状は癒せるらしい。でもどちらかと言つと「口酔いでお世話をなる薬だ。

「で、リリーはどうだつたんだ？ 詳しく教えてくれ」

「シチューを口にしたらこきなり皿を向いて口から泡を吹いたの。病氣かしり……」

「十中八九このシチューという名のべドロが原因ですから」

「またそれ？ いい加減にしないと……」

「お仕置き？ ねえ、お仕置きすんの？」

「なんでちょっと嬉しそうなのよ……」

「とまあ、半分冗談だからいつたん横に置いといて、ジーナの作ったシチュー（仮）が色々な意味でまずい代物だつてのは間違いないよ。毒が効かないおっさんをも殺しかねないほどにね。はつきり言えばジーナの味覚は變つてことだね」

「ビニがどう変なのよ」

変だと言われて自覚のある奴もいれば自覚のない奴もいる。ジーナは後者だ。

こういう奴には自身がいかに周りとズレているのか思い知らせるほか自覚を促す処方箋はない。

しかし、現在ジーナの周りにいるのはおっさんとリリーのみ。そのうち未だ言葉を話せないリリーは数にいれていいものか迷うからとりあえず除外しておく。

すると、おっさんしかいなわけだが、おっさんの言葉をジーナが素直に受け入れてくれるかどうかは心許ない。

だが、男にはやらねばならない時がある。

「だからこれクソまずいんだって」

「どこが？」

「そりゃあ……全てが」

「あなたの味覚に合わなかつただけでしょ。自分が美味しいないと感じたものが共通の意識だと思つちゃダメよ」

「それは逆にも言えることだよ。ジーナが美味しいと思えるものが全てにおいて正しいわけじゃない。そもそもおっさんの知つてるシチューフて料理に紫色なものは存在しない。普通は白だし、許せて黄色（カボチャ入り）とかそんなもんだ。あと、これ臭い。何より

↙中略↙ だから、ジーナの料理は体に毒でしかないんだ。

んで、臭い。ドウ コーランダースタン？」

「長すぎて全然入つてこない。あと、なんかねちつっこい」

おっさんの体内時間にして約十分間は無駄になつたようだ。

「よし、薬が出来たようだな。早速リリーに飲ませるとしよう」

そう言つてジーナは完成後ある程度冷ましたおっさんの謹製の薬を持って厨房を出ていった。

「……おっさんもいー」

そのままにしてジーナに続いてリリーの元へと向かつた。

「ほり、リリーお薬飲みなれー」

「

嫌がつてゐる。

リリーがすげー嫌がつてゐる。

ヒューかもう涙目だ。

じつやら薬を作つてゐる間に田を覚ましていたらしく、そこに再び何かを食べさせようとするジーナに恐怖すら覚えていふ様子だ。そしてその瞳がおっさん姿を捉えるとお父さん助けてとばかりに縋るような視線を向けてくる。

「ほり、リリー」

ジーナは頑なに閉じられたリリーの口を無理矢理こじ開けようと上あごに手を当てて力を込めていふが、リリーもリリーで必死に抵抗している。

なんかもつ見てられないな。

「ジーナ貸しなさい」

ジーナの手から薬を奪い、リリーの田の前に立つ。

「大丈夫。これはジーナの作ったものじゃなく、おっさんが作ったから安全だよ（結構苦いけどね）」

おっさんの言葉にジーナが何か言いたそうな顔をするが、空氣を読んだのか黙つて様子を見していくれる。

「ね？」

「

おっさんの言葉が通じたのか、それともおっさんが食べさせたから

なのか、何となく後者だと思つがリリーが素直に口を開いてくれたのでそこに薬を注ぎ込む。

「

」

リリーは顔をしかめるようにしたが、それでもジーナの料理よりはマシだったのだろう。きちんと薬を飲み込んだ。

「うん、いい子だね」

リリーの頭を撫でてやるとリリーも嬉しそうに手を組めた。

「あんたばっかりずるーー 私も撫でるわ

(ビクッ)

「リ、リリー……？」

ジーナがリリーの頭に触れようとした瞬間、リリーの体が妙な反応を起こし、震え出した。

客観的に見るとどちらも可哀相だな。

ジーナは良かれと思い愛情をたっぷり込めてあのヘドロを作り上げたのだろう。だが、その愛情によつて怖い目にあつたリリーの反応もまた当然だとえる。なにせ初めてといつていい食べ物があれでは浮かばれない。

まあ、どっちが悪いか言われればジーナが十割悪いけどね。だからおっさんほんは心を鬼にして言わねばなるまい。

「リリーはジーナの料理に恐怖を覚えたようだ。これ以上嫌われたくなればおっさんの監督の元で料理を作るか、一度と作るな」

「……わかったわよ」

さすがにリリーの反応で自分に非があることを理解したのだらう。
ジーナが神妙に頷く。

やはりおっさんの言葉よりもリリーの言動の方がよっぽど効くみたいだ。

こつして『ジーナ料理毒化事件第一章』は幕を閉じた。

なお、ジーナ作のシチューはスタッフ（ジーナ）が半分ほどは美味しく頂きました。しかし、別のスタッフ（おっさん＆リリー）が美味しく頂けなかつたのと臭いに耐えられなかつたことが原因でもう半分は捨てました。

大地よ、環境を汚染してすまん……

クラベジーナと料理（後書き）

次話は早ければ今日中、遅くとも明後日には投稿予定です。

ねむる、やむじむあります

あれから六日ほど日の日数が経つた。

時間の感覚は相変わらず「」の体内時計を日安に活動している。

時計といつものは大都市でもないと手に入らないらしく、村で生活していた時は太陽の位置で時間を計っていたのだが、今は洞窟内であり、それすらも出来ない。

しかし洞窟内の生活もそう悪いものではないと思ひ。

暇なら「」口口したりリリーと遊んでやつたり、ジーナに今までのことを語つたりした。

基本的に喋るのはおっさんばかりだが、それでもおっさんの話を聞きながらジーナは頷いて相槌を打つたりしてくれるので聞き役としては及第点を挙げたい。

まあ、いざジーナの話を聞くにも適当にまぐらかされてしまつのは残念無念といったところだ。

生活の必需品とも言える水に関しては洞窟内をちょっと行ったところに澄んだ水の湧き出る場所があり、困ることはなかつた。ちなみに料理に関してだが、ジーナがちょっとアレ過れるのでおっさんが作ることになつた。

確かにおっさんは一人暮らししてたし自炊もしないことはないけど、基本コンビニのお弁当やら外食にお世話になつてた人ですよ？ 夜なんてビールと枝豆、焼き鳥だけで十分だ。

このトライアングルは高級フレンチのフルコースすら打倒すると思つてます。

まあ、そんな考えの奴に纖細な料理を期待するのは間違いだ。カレーのルウや味噌、醤油があればもう少し多彩な料理を作つてやれるのだが、如何せん調味料が塩と胡椒しかない。なんか赤い香辛

料もあるにはあるが調理初心者には手が出しづらいのが現状だ。

だったらもう作れるのなんて野菜炒めとかくらいしかないじゃない。

一回、小麦粉もあるし塩と水もあるからうどんでも打つたろかい！と意気込んだが、結果はボロボロでグズグズの麵をぶつこんだ塩味スープの素うどんとなつたので諦めた。

そしてまた野菜炒めへと料理は戻る。

そうしておっさんが作り上げた一品にジーナだけでなく、リリーも「またかよ……」みたいな視線を投げかけるが無視だ。だつて……

ジーナの料理よりはマシだから！！

リリーもそれが分かつてゐるのだろう。

視線は不満そうだが、出されたものは黙々と食べてくれる。だがしかし、ジーナは違つた。

「もう野菜を炒めて塩と胡椒を振つただけのインパクトのない食事には飽きたわ。明日は私が作る」

決意を秘めた瞳。

そして有無を言わさぬ迫力がそこにあった。

「リリー、明日は塩を舐めて過ぐすことになりそうだ」

「

「そりつ、何で最初から食べよつともしない」

「だつて……なあ？」

「

おっさんの問い掛けにリリーが何度も頷く。

この六日の間にリリーはこちらの話す言葉を理解するまでに成長し

た。

成長早すぎないかとも思ひが、おっさんはキラースタッグビートル時代に十日強で幼虫から成虫になつた経験があるので、それに比べたらまあ遅いよなつてわりとすんなり受け入れちゃつてます。リリーの成長による利点としては意志疎通が図れることと、長い時間は未だに無理だが一、二時間くらいは傍から離れても大丈夫になつた点だろう。

「大丈夫よ。あんた、私が料理する時は監視するんでしょ。だからあんたも食べられるものしか出来ようがないじゃない」

その設定をすっかり忘れてた。

だつてジーナつてば、あれ以来全然料理しないんだもん。しかし、おっさんが監督するならばジーナも変なものは入れらんないはずだ。とゆーか入れそうになつたら全力で阻止すればいい。

「リリー、どうやら塩の結晶以外も口に出来そうだぞ」

「ああ、本当だともー。おっさんに任せなさい」

「

「うん、お父さん頑張る」

「なんでリリーの言葉が通じるの……。これはあいつの方がリリーをわかっているってこと? いいえ、違うわ。あれは単なるあてずつぽうに決まつてる! 豚、私の方がリリーを愛してるんだからねつ!」

「え、宣言がいきなり過ぎる。どうからそのセリフが導き出されたんだ? ははーん、さては生理でイライふべしつ! ?痛い」

「デリカシーがない。あと、殴られたのならのけ反るくらいしきつ!」

そうは言つても、衝撃無効だから痛みしか感じないんだよねー。
それにもしても顎とか頬じゃなく脣を狙つて拳打を叩き込むのはどうなのよ。

まあ、殴られるのは嫌いじゃないけどさ。

「前向きに検討し、直していきたいと思います」

インパクツの瞬間におりさんの意志でのけ反ることが出来れば可能である。

こいつは高等技術だが、ジーナのサディスティックな心を満たすには留得せねばなるまい。

「べ、別にそこまで真剣な顔して考えなくともいいんだぞ？」

なんでセヒで一歩引くんだ。

もつとガンガン来いよ。

お前を殴つても面白みがないからどこかで別の獲物でも探そつかなー的なおつせんをくすぐる言葉が欲しいといつのこと。

「いや、おりさんはジーナからのじまつ……ジーナの心の安寧のために努力するよ」

「じまつてなんだ？」

「褒美（拳）のことですとは言えない。

話を逸らさねば……

えーと……あ、そうだ。

「薪があと少しでなくなるんだけどどうすんの？」

料理をするには火が必要だ。

その火を起こす燃料は薪を使用している。

なんともアナログだが、洞窟内にガスが通つてたらそれはそれで怖い。つーか村でも薪が主燃料だった。

「あからさまに話題を変えたな。まあ、いい。薪がないなら取つてこい」

「どうひつて……外か」

「ちょっと待つてろ」

そう言つてジーナはどこかへと向かい、すぐに戻ってきた。そしてその手に握られていたのは一降りの斧。

「これで適当な木を切つて持つてこい」

「なぬ？」

その言葉に耳を疑つた。

「えつと……薪つて落ちてる木を拾うんじゃないの？」

「それじゃいつまでかかるか分からぬし、量も心許ないでしょ。ほら」

押し付けるように斧を渡される。

柄は木製で、刃の部分は鉄で出来ているそれはずつしりと重かった。

「さつさと行け。リリーはお母さんと一緒にいましょうね。絵本読んでもげるからね。今日は何がいいかな……」

「……無理だ」

「は？」

「おっさんには無理だ」

「たかが木を切るだけのことの何が無理なのよ？」

「おっさん、木と会話できるんだよ」

「ふーん、で？」

何その目。

町中の人混みの中でいきなり奇声を発した人を見つめる視線と同じじゃない。

くそつ、これまでの経緯を話す中で大樹や他の木達と会話したことを見いたのがいけなかつたのか。

「だからきっとおっさんには木を切る時に木々の上げる断末魔の声が聞こえるはずなんだ！」

「それは多分幻聴だつて」

「違うよ。そうゆうスキル持つてるんだよ。」

「やうだとして、あんたは明日も明後日も温かい食事を食べられることどどっちが大事なの？」

「いってきまーす」

仕方ないよね。

どことなくヒンヤリとした気温の洞窟内であつたかいじ飯は楽しみの一つかんだ。

例え、毎日野菜炒めだとしてもそれが温もりを持つていいるだけでホツとする。

世のお父さん方があくせく働いて夜に帰宅した時に、ラップのかかつたじ飯をレンジでチンするのはそこに家族の温かさを求めるからなのだらう。

おっさんもまたその温かさが恋しい。

それが出来立てとなるならばなすことだ。

利己主義と罵られようが一生恨むと言われようがやらなければいけないことなのだ。

「とゆーわけで木を切りたいわけだが……」

洞窟を出て一番先に目に入った木に話し掛ける。

この出口はおっさんが進入した洞窟の入口とはまた別で、結構広めの通路を抜けた先にある。

ジーナ曰く、森の深部に出来るから滅多なことでは人に見つかる事はないのだと呟づ。

『あなた恐ろしや……』

『確かにア○ルといつのは魔性の穴だよね。うん、恐ろしい』

『ワラワを伐採するといつのか……』

『ツツコミなしか。確かにこの状況でいつべきじやなかつたけどね。それはそれとして、別に君でなくちやダメってわけじやないよ。なんか嫌われ者の木とかいないの?』

『そのような者など……』

『キるならワターシキをキリなさい』

『そ、そなたは……』

名乗り出たのは、手と手を合わせて輪を作れば収まるような幹の太さの細長い木だ。

『ワターシがいる。それだけでミナセーんにメイワークかけマース。

『ワラワとそなたは良き友ではないか!』

『スミマーセン。でも……』

なんか切りにくくなる会話してゐるな。

『シャツチョさんヤツチャでくだセーイ』

「おっさんはいいところ係長止まりだつての。それにしても本当に切つていいんだな？」

『ハーヴ、ワターシ背だけちょっとおっしゃれるセーでホツカのミナサーんのせいちょのジャマーね』

「君の決意、しかと受け取つた。こくわつ」

実際問題、斧で木を切つたことなんておっさんの経験にはない。故に野球のバッティングをするように構え、幹目掛けでおもづくを振つてやつた。

『ギヤー』

ああ、予想通りの悲鳴。

ただ木を切るという行為が悪行のよつとおっさんこのしかかる。

『鬼！』

『悪魔！』

『ひどいわ！』

『よせ！ 彼もまたつらいんだ』

『くそつ、僕達はただ見ていることしか出来ない……』

『見届けてやるうじやないか。彼の覚悟とフレギューラの最期をな

なんか勝手に周りで話が纏まつたらしい。

つーかフレギューラって名前なのか……

どうやらここつらは大樹の管轄から外れてるよつだ。何じろ名前がわりかし普通だからな。

辺りは静まり返り、聞こえるのはおっさんが振るう斧がフレギューラ

「うとやうに見たる顔と雄鳴のみだ。

いや、時々『ひつ』とか言つてゐるは聞いへる。

正直なんだかつらこものがある。

「ふん」

『ヤラレタ』

フレギューラの最期の言葉はあつたが、だつた。
おつれんせへフレギューラに向かひて心で呟いた。

「めんね。

『どわひ、じひち倒れてへんなよ』
『ちよつと痛いんですナビ』
『ハザー、マジハザー』

つてあらへ。

『ああもう邪魔じや』

「え、もう少しなんかないの? つーかお前、フレギューラを友だ
とか言つてなかつた?」

『わうじや、フレギューラはワラワの友じやつた』

『いや、その友が切り倒されたんですけど……』

『おう、そうじやな。しかし、フレギューラはすでにフレギューラ
ではなく、かつてフレギューラであつたただの木材じや。疾く持つ
てこつとくれ』

「……はい」

頷きはしたが、納得は出来ない。

切つてる間はすっげー罵つた癖に。

木が相手だからただただ心が痛かったのに……
つまり、木は所詮木。

おっさんは感覚が違うものらしい。

イマイチ掴めん。

こうしておっさんは薪の材料としてかつてプレギューラであった木材を手に入れ、剛力のスキルを発動させてそのまま洞窟の中へと持つていった。

「アイリス様、奴がいました」

「そのようですね」

穏やかに過ぎる時間もそう長くは続かない。

おひれど、帰宅する

剛力のスキルのお陰で苦もなく木を運んで来れたので報告のためにジーナの元へと向かひ。

木を広間に置いて住居の扉を開くと仄かに生活臭が漂つてくれる。

「ただいま」

中へ向けて声をかける。

「ごめんくださいでもお邪魔しますでもなく

『ただいま』

自分から思わずといった調子で放たれた言葉が自分はもうここに住人であると感じてるんだな、と思わせられてしまひ。

そんな考えに浸りながら中からの返答を待つが、一向にお帰りなさいつて言葉は帰つてこない。

「ただいまーー！」

今度はもう少し大きな声で呼びかけるが最早返答があるなどといつ淡い期待はない。

普通に住居の中を進み、ジーナらがいるであろう奥にあるっこりーの部屋の扉（直しました）を開けた。

「ただいま

「ああ」

「ただいま

「ああ」

「……ただいま」

「うん」

「ただい」

「しつこいな！ 今、今日田中田の繪本がクライマックスでいいと
ころなんだから静かにしなさいよ。」

「だつて、ジーナがおかえりダーリン（ハート）つけて返してくれな
いからー。」

「おっさんは温かく迎えられたいの。」

普段は怒声だらうと罵詈雑言だらうとジーナからならば悦びに変換
出来るナデしつづけ時は温かい言葉が欲しいの。

「いや、なにから」

「一回。一回でここから言ひて。一生のお願い」

「必死過ぎて気持ち悪い」

「うおー、これもやばつ懲くないわ。」

温かさとは真逆の冷たい言葉でもおっさんの心はホットになるんで
すな。

「

「ココー、ええ子や……」

冷たい言葉の後だから温かを倍増だね。
冷徹と温暖のハーモニーがおっさんの心の鐘を打ち鳴らした。

「ねえ、リリーは何て言ったの？」

「おかえりなさいみたいなニコアンスかな？ とにかく嬉しいね
」

「……するこ」

「おっさんにおかえりと言える素直なところが？」

「私もリリーにおかげって言われたい」

ですよね。

なんとゆーか、ジーナにとつたらおっさんなんてホントビリウでもこい存在なんだろ? な。

「ところで、切つてきた木を広間に置いてるんだけビリウあればいいの?」

「うん? ああ、そうね……切つたばっかりなら水分含んでて薪としては使えないから、まずは薪割りしてその後乾かしておかないといけないわね」

「へー、そりなんだ」

「そうなのよ。んで、すでに乾燥させた薪が広間の隠し部屋にあるから薪を割つたらそこに入れといて」

「分かつた……ん?」

なんかおかしいこと言われなかつたか?

「すでに乾燥させた薪が隠し部屋にある……?」

「なに?」

「え、嘘。薪の備蓄あんの?」

「ええ」

あつむりと肯定される。

じゃあ、おっさんがあつむりたことほなんだつたのか。

「備蓄あるな? おっさんが木を切りに行く必要がなかつたんじや

……」

「こずれその備蓄もなくなるんだから、あらかじめ増やしておぐのは悪いことじやないでしょ。あと、リリーと一緒に木になりたか

つたし

「絶対、後の方が本音じゃん」

要はおっさんはハブられたのではなかろうか。

「だつていつもあんたばつかりリリーと一緒にいるでしょ
「その」とは否定しない」

リリーとは料理したり憚りに行く時以外は大体一緒にいる。なぜならばリリーの方がおっさんに寄つて来るからね。
そう、おっさんに非はない。

「だから少しの時間リリーと一緒にだけにしてもらつたんじゃない
「だつたら一言リリーと一人だけになりたいつておっさんに言えばいいだる。邪魔者をこつそり排除する真似しなくたつて……」
「はいはい悪かったわよ。んじや、まだリリーと一緒にで楽しみたいから薪割り行ってきなさい」

「

「リリーはお母さんと一緒にいようね」

「

「ついてこつちゃダメよ。あこつはまだ仕事があるんだから。まら、わつをと行きなさい」

リリーがおっさんの方へと歩み寄りつとするのを押し止め、ジーナは野良犬を追い払うかの如くおっさんを追いやるつとする。
まあ、本当はおっさんという異分子なんて存在せずにリリーとジーナの一人で生活出来ていたんだと思つとジーナの気持ちもわからぬではない。
だけどおっさんが言つたこととはこえ、いつもあからさまに邪魔者扱いされると物悲しいものだ。

だが、おっさんは話のわかる男である。

その場に無言で背を向けて、広間へと戻ることにした。

「あ、隠し部屋は入口の扉を出て右に十歩くらい歩いたところにあるから。それと……おかえり」

ぶつきらぼうに投げ掛けられた言葉。

だが、それだけでもおっさんにとっては十分な威力を持つていた。

「うん、ただいま。そして行きます
「はいはい」

なんか元気出た。

隠し部屋はジーナの言つた通りの場所にあった。

そこは壁がくり抜かれたような場所で、忍者の隠れ身の術みたいに壁に似せた模様の布で隠蔽されていた。

その中には一年くらいは余裕で持ちそうなほどの大量の薪や、小麦粉、塩などの色んなものが入っていた。

どうして今まで教えてくれなかつたんだと思うが、この洞窟の中で生活する上で最も重要な場所だと言えるので、外様のおっさんには教えてくれなかつたのではないだろうか。

今回、ジーナがおっさんにこの隠し部屋のことを教えてくれたのは多少なりともおっさんを信用してくれたことの表れに違いないと勝手に解釈する。

まずは切り倒してきた木を程よい大きさに切つてから薪割りをしようと。

大体三十センチくらいの長さになると、さすがに木を切つていくのだが、なんとも地道な作業である。なんかもう間怠つこしいな……

「昆虫形態」
インセクトフォーメ

ものは試しとクワガタ形態になり、狙いを定めて顎を閉じた。すると、あっさりと木が切れてしまつ。おっさん、思い付きだつたとはいえ、初めてクワガタの顎の強さを思い知りました。

俄然作業効率も上がり、五分もしないで三十センチのぶつ切りになつた木材が出来た。

あとはとりあえず半分にしどくか。横にした木材を顎で挟んで持ち上げ、一気に閉じる。これを何度も繰り返すとすぐに半分にする作業が終わる。そしてその半分になつた木材を同じ要領でさらに半分にしていくとあつとう間に薪割りは終了だ。

「おっさんに薪割りの才能があるとは……」

「おっつもビッグクリの早業だ。
しかしなんだな……」

この切り刻んだ木材とついで前まで会話してたかと思つたが、間違つた。この木じゃなくて人だったらぶち殺してバラバラにしたようなも

の木だ。

んだ。

そして、さらにそれを火葬するために保管しておく。

……おっさん外道じゃね？

ま、木だし。

いちいち気にしてたら飯も食えなくなるから、あまり感情移入しきるものじゃないよね。

人型に戻つて切つた木を紐で束ねていき、隠し部屋の空いてる場所へと置いていく。

運んでみるとそれなりの量があつたが、いざ備蓄分と比べるとおっさん作つた薪の量は微々たるものだった。

ジーナはこれを一人で用意したのだろうか。

もしかしたらまだ見ぬリリーの実父がセコセコシコシコと用意したのかも知れない。

どちらにせよ関係ないことが。

積んである薪を両手に抱え込み、住居の中へと持つて行くことにする。

しかし、ここで予想外の出来事が起つてしまつ。

隠し部屋から出て住居に戻つてゐる時、いきなりおっさんの抱える薪が燃えだしたのだ。

「あつつい！」

慌てて薪を放り投げる。

一体何が起つたのか。いやいや、何が起つたのかは抱え込んだ薪が燃えたということでファイナルアンサーなのだが、どうして燃えたんだ？

自然発火とかだつたら逆に不自然極まりない。

その答えはすぐに分かることになつた。
なぜなら原因の方から話しあげて来たからだ。

「外してしまいましたわ」

そこに居たのは以前おおさんを殺そつとしたツインテールの貧乳だ
った。
確か名前は…… forgot。とにかく貧乳の少女だつた。

おひれど、侵入者と相対す

「ここな暗い穴蔵に住んでるなんじ、さすが『ハリ虫』ですね」

「こちらを問答無用で攻撃してきた貧乳ツインテールは周りを見回すと大仰な仕草で話しつけてきた。

「なぜここにこりつては愚問かな?」

確かにこいつの目的はドリゴンを殺すことだったはずだ。
ならば狙いはリリー やジーナといつことになるだろ?。

「確かに愚かな問い合わせね。そんなものあなたを殺しこきたに決まりますわ」

え?

あれ、ドリゴンは?

つーか狙いはおひれどんかよ!?

「な、なんで?」

虫人だからか?

いや、言つてないしわからんないはず……

あ、でもこの子の目の前で昆虫形態しちゃつてたな。
もしかしてそつからバレたのか。

「なぜつてそんなの……わたくしのことを貧乳呼ばわりしたからに
決まりますわ」

「……えー」

「今までわたくしはわたくしのことを貧乳と言つた輩を全て半殺し。」全殺しにしてきましたの。わたくしが言つてること理解出来ますかしら? わたくしを貧乳と呼んだ輩は絶対に許さないってことですわよー。」

ちつさいなー。

胸だけでなく器もちつちやー。

「「」めん。君の名前知らないからや。外見の特徴で呼ぶしかないじやん」

「それでしたら女神でも天使でも他に呼びよつがありますわ。そこにきて胸のことを言うなんてわたくしを侮辱する魂胆がスケスケですわ」

理不尽に殺されそうになつておいて、その発端となつた人物を褒めたたえられるような精神構造をおつさんはしていない。

あれだけのことをされておいて、侮辱のひとつもしない方が問題ある。

つーか、おつさんが女性を見るときには胸の大きさつてのは確實に確認する部位だから仕方ないことなのだが、言つたところどどういうなるわけでもないので口に出さないでおぐ。

「つまり、狙いはおつさんだけつてこと?」

「ええ、あなたにはフルコースをお見舞いしてさしあげますわ。まずは両手両足の指を一本ずつ引きちぎり、次に腕、足、耳、鼻ときて、最後に首を捩りとつてあげます」

「フルコースをお見舞いって、君いきなり魔法撃つてきたじやん」「ちゃんと火傷程度で済むよつ手加減しましたわよ。まあ、当たりませんでしたけど……」

話を聞くと、ジーナやジーナのことは知られてないようだな。

そいつは良かつた。

どうやらこれはおっさんが蒔いた種のようだから、ジーナ達に迷惑がかからないようにしないとね。

貧乳の元の狙いがジーナ達である以上、接触させてはいけない。

あーあ、本当に蒔きたい種は未だに下半身で燻つてゐるところに寂しいな。

息子よ、どうやら田の田を見ることはないわせつだ。

「そつか、わかつた」

「あら、抵抗はなしかしら？ せつかあなたのために色々用意してきたのですけど？」

そう言つた貧乳の背後からゾロゾロと「十人くらい」の男達が沸いて来る。

その中には以前捕まつた時に見た男達もいるし、見知らぬ顔もいた。とゆーかやたら小さい髭モジヤやらタイガーマスクだとバラエティ豊かだな。

「んー野郎だけのパーティーでも開くのかな？ おっさんとしては華が欲しいとこだけ？」

貧乳や依然見たお付きの連中くらいの人数なら引き連れたまま洞窟を脱するのも不可能ではなかつたかもしけないが、この人数では無謀だらうな。

ジーナに気付かれないうちにこつらを洞窟から追い出したこと。

「ふふふ、パーティーの華なればわたくしだけで十分ですわ」

「なるほど、納得納得」

「あなたには武器での攻撃が効きませんから徒手格闘技を嗜む者達を集めましたのよ？ 楽しい趣向でしょ？」

「おっさん如きに大袈裟だよ」

しかし、じつやつてこいつらを洞窟の外に連れ出せばいいんだ……
広間から外に繋がる道はあいつらに塞がれている。

飛んで逃げれるかというと無理っぽいな。

なら、口で丸め込んで誘導するしかないか……

「おっさん、抵抗する気は微塵もないけどじつせ死ぬなら最後に空
が見たいな」

「やうなの？ なら、こじで殺すことにしましょ？」

「うそー！？」

「ふふ、だつて最後の望みを叶えてあげると安らかに死んでしまつ
でしょ？ それじゃ楽しくありませんもの」

貧乳がこいつにうぬだつたかもれないってことを忘れてた。
今更真逆のこと言つてもおっさんが外に行きたがつてることを安易
に示してくるようなもんだから、迂闊なことも出来やしない。

「さあ、問答は終わりかしら？ そろそろパーティーをはじめまし
ょうか。あ、そうそうあなたには身重の奥さんと三人の子供がいる
のでしたわよね？ あなたの田の前でまずはあいつらを殺してみる
のもまた一興ですわ」

「え？」

「こじがあなたの住み処なら、その扉の向こつかしら？」

何言つてんだコイツ？

身重の妻と二人の子供？

そんなのおっさんにいるわけがない。

あんなものはあの時のその場凌ぎに出た言葉だ。

それを一々覚えてやがった。

しかも、今の状況が当たらずも遠からずつてところが質が悪い。
おっさんのがジーナやリリーにまで害を及ぼした。

「誰もいないよ」

「その聲音、いると言つてると何義よ？」

「いやいや、いないつてば。おっさんのが浮気性なせいで嫁さんはず
供連れて逃げちやつたんだよ」

もはや騙せるなんて思つていない。

でも、万が一、億が一でも騙されてくれるのなら……

「中を改めれば分かる話ですわ」

やつぱりダメか。

「お行きなさい」

貧乳が指をパチンと鳴らすと男達がそれぞれ向かってくる。
そしてその行き先はジーナやリリーのいる住居の扉だ。

「へやつたれ」

まずはジーナ達からひとつか一

おっさんは男達に先んじて扉の前に陣取る。

距離が近い分おっさんの方が大分早い。

「Jリから先には通れないよ」

そう宣言し、迫り来る男達を睨みつける。

まず、最初におっさんに肉薄したのは細身の顔が猫つてる男だつた。なぜ、男かどうかわかつたかと言うと、上半身が裸で胸毛とギャランドウが生えていたからだ。

そいつはボクサー宜しく構えながらおっさんに近付くとその拳をおっさんの顎へと振り上げた。

それ 자체は見えてはいるが、かわせるかとなると話は別だ。顎が持ち上がり、脳が縦に揺れる。

だが、その衝撃はスキルによって無効化され思つた以上にダメージはない。

しかし、猫頭はおっさんに一撃を加えると斜め後ろにバックステップで下がつてしまつ。

そして中華っぽい服を着た黒髪を後ろで一本の三つ編みにした男が入れ替わるようにして近付き、縦にした拳をおっさんの腹に叩き込んだ。

その後も入れ替わり立ち替わりおっさんを殴り、蹴つていいく男達。特にロー・キックを正確に同じ場所に叩き込んでいく髭モジヤ男がウザつたいことこの上ない。

外側だけを見ればおっさんは壁のように未だにそびえ立ち、男達の攻撃を一心に受け続けている。

だが、内側は結構ボロボロで、全身にかなりの痛みが走つてゐる。

しかし、確かに痛いのだがそれはダメージの総量としての話。一撃一撃に関しては男達の攻撃はジーナの拳に及ばない。とゆーか何気におっさんつてば素の防御力が高いのでは?

まあ、そんなおっさんに大の男よりもダメージを『かるジーナは何者だつて話になる。いや、ジーナはドラゴンか。うん、それなら人間と比べちゃいかんよね。

そうして更にぼけられたのだが、先に悲鳴を上げたのはおっさんをフクロにしていた男達の方だった。

「拳が！ 拳が～！」
「ぐおおお～」
「ヒーイズベリータフだよ」
「アイリスの嬢ちゃん、このままじゃ蹴りすぎて足の骨が折れちまう」

無欲の勝利である。

「まつたく、どこつもこいつも役立たずですわね。下がりなさい」

鶴の一聲で男達はおっさんから離れていく。

「まさか、打撃すらも効かないのではありますわよね？」

貧乳が訝しがり声で聞いてくる。

「どうかな？」

おっさんがそれに真面目に答えてやる必要などない。

「なあ、そろそろ勘弁してくれないかな？」

余裕ぶつてはいるが、一度でも膝をついた瞬間に起き上がりがれなくなつてしまひ」とは間違いない。

「何を言つてますの？ 俄然殺しがいが出てきましたわ」

しかし、どうやらおひさんとの態度は彼女の闘志を漲らせてしまった模様である。

「ザラ、クラン、ヤーロフ」

「はーい」

「はーい」

「はー」

貧乳少女の呼びかけに答えたのは、かつておひさんに剣を振り下ろした細身の男とチワワ男、そして常に少女の側に控えていた重厚な鎧に全身を包んだ巨漢だった。

「お前達にひとつはリベンジね。わたくしが魔法を詠唱する間の時間稼ぎをするもよし、そのまま殺してしまつてもいいですわ」

「まずは奴の前で家族を殺すのではなかつたのですか？」

「そうねえ……でも、どつちにしろ殺すんだから順番はどうでもいいわ。お前達があいつを殺すなら、わたくしはあれの後に妻や子供を飄るだけですもの」

「……御意」

「へーへー、お姫様の言つ通りこしますよつと」

なんかへつて見ると、どうでも悪役剥き出したなと詞しか言わないんだよね。

「では、今一度相手になつてもうおつか」

チワワが大剣を構えながら言つ。

確かおつさんのが壊したはずなのだが、新調したのだろうか。
まあ、所詮は剣。

斬撃無効を持つおつさんにしてみれば怖くない。

「ほら、見ろよ。あんたに剣壊されちまつたからさ、お姫様に頼んで新しいの買つたんだ。前の奴の倍はするんだぜ？」

そう言つて嬉しそうにおつさんに剣を見せてくる細身の男。

「いつも怖くない。
一番怖いのは……

「私は己の武器を壊されたわけではありませんが、主を侮辱されても思わないほど不忠者ではないのでね」

そう言つて、穂先から柄までの全ての色彩が銀色で出来た槍を掲げる鎧の男。

槍の攻撃と言えば突く・払うだ。

恐らく無効化することは出来ない。

「その主が理不尽に他人の命を奪おうとしてるのを諒めてやらないのかい？ 自称忠臣さんは」

「ふん、主が白と言えば例え黒であつても白。それこそが絶対なる
我が忠義だ」

なんだかな～。

とりあえず揚げ足取りでもしてみよっかな。

「だつたら主が死ねつたら死ぬの？」

「無論」

「肉親とか友人を殺せつて言われたら？」

「元よりそんな者などいない」

すつごい寂しい人なんだな。

「もはや、貴様と口で語る言葉はない。あとはこの檜にて問答する
としよう」

「それで語られてもおっさんには全然解読できないからね」

「二人共いくぞつ！ 私に合わせる」

「御意」

「ういっす」

主従揃つて人の話をまともに聞かないんだから！

おっさんと侵入者達との攻防の第一幕が幕を開けた。

おっさん、攻勢に出る

三人が前、右、左の三方から向かってくる。

おっさんが守らなければならないものは皆にした扉への相手の侵入である以上、離れるわけにもいかない。

迫り来るその姿をおっさんはただ見ているしかないのか……
せめて何か一矢報いる攻撃手段がおっさんにもあれば……
あ、ないこともないな。

でもあれだと相手殺しちゃ わないかな？

でもでも実際相手はこいつを殺そうとしてるわけだし、お互
様な感じしない？

しかし実際問題マジで相手が死んだり死んでるよ？

そいつは自業自得だし、正当防衛が成り立つよ。

でも……

ああもう、うつさいな。なら、あの鎧男にやればいいじゃん。
頑丈そつだから死なないしじょ。

なるほど納得。よし、やるわ。

おっさんの中にはいる天使と悪魔の話し合の末、おっさんは田の前
から駆けてくる鎧の巨漢へと攻勢に出ることにした。

まずは半身になり、足を開いてがに股中腰の姿勢をとる。

そして臍の上辺りで左手が下になるようにして重ね合わせ、その中にソフトボールが入るくらいの空間を作る。

そして静かに、されど地の底からはい上がるかのような声でその言葉を唱えた。

「まー」

何か感じているわけではないが、自然と指に力が籠る。

「りょー」

地面に突き刺されとばかりに脚へと力を込め、両手を右側に少しづつずりしていく。

「ぐー」

左腕が限界を迎えるまでずらされた位置にて動きを静止する。今、おっさんはかなり斜めつている。

「はーーーっ！！！」

そして声と共に両手を鎧の巨漢に向けて突き出した。

【魔力波のスキルが発動した】

天の声と共におっさんの手から溢れ出る白い閃光。

それは巨大な光の柱となつて鎧の巨漢へと襲い掛かった。

「……ぬ？」

おっさんの魔力波に当たる直前に鎧の巨漢は両腕を自分の前でクロスさせ、ガードの姿勢をとつた。

しかし、だからどうしたとばかりにおっさんの魔力波はそこにぶち当たつた擧げ句、そのまま鎧の巨漢を連れて壁へとぶつかり、それでも尚止まらず壁に巨漢を道連れに長大な穴を空けていった。

「き、消えろ」

慌てて魔力波を消す。

何と言えばいいのだらう。

とにかく、おっさんの想像より威力が大きかった……
確実に前出した時よりもでかかった。おそらく三倍はあつたな。
よくよく考えれば魔力波なんて最初の一回しか使ってないスキルだ。
そして無色の魔力吸収のスキルは常時発動型であり、おっさんが外にいる間は上限がどこまであるかはわからないが、勝手に魔力を貯蔵していく。
その貯めに貯めた魔力のお陰でこの状況となつたのだらう。

場に呆然とした空気が流れる。

あの貧乳少女でさえも今しき方出来た穴をアホの子みたいに見つめている。

「や、殺つちやつた？」

あれで生きてる可能性なんて希望的観測だよね。
でも死体とかないせいなのか、実はやつちやつた感はあつても殺つちやつた感はあまりなかつたりする。

「ヤ、ヤーハフの田那……」

「ヤーロフ殿……」

他の一人も足を止め、ヤーロフとやらの消えた彼方を見つめる。

「な、なんですの……あの魔力量に任せた美しくない魔法は……」

呆然としたままで貧乳少女が視線をおっさんへと移す。

「まさか武器破壊だけでなく魔法まで……とんでも怪物ですわね……つてー ザラ、クピーン！ あなた達いつまでボーッとしてますのー！ さつさとそいつを殺りなさい！」

「…………ですが」

「いや、お姫様それはさすがに……」

「雇い主の意向に逆らいますの？」

「うーん……おれはヤーロフの旦那と違つてただの傭兵だし、死を覚悟してまでお姫様に従おうとは思わないんだよね。そもそもおれつてば勝てる戦いしかしないタイプなんだよ。クピーンの旦那は？」

「私は……アイリス様に従う」

「そつか、じやあおれは一抜けする。んで、どうだい緑色の旦那。おれを雇わないか？」

「は？」

やばい。話についてけない。

とりあえず、細身の男は敵ではなくなつたのかな？

「いやや、おれとしては勝ち馬に乗りたいわけよ。大丈夫、報酬はいらねーよ。とゆーか勝つこと皿体が報酬かな」

「よくわからんから断る」

ただほど怖いものはないし、すげく怪しい。

つこせつさまで敵だつた奴を無条件に受け入れるほどおっさんは甘くない。

「いや、聞いてくれよ。おれってばあのお姫様と契約してんだけど、状況的に敵前逃亡と離反起こしてるじゃん。これってすっげー馬鹿高い違約金取られる。払えないわけじゃないけど、払いたくないのが人の性だよね。だからさ、踏み倒すためには雇い主に消えていただかないといけないってわけ」

つまり借金してた金融会社が倒産すれば借金帳消しになるとか思つてゐるのか。

「ふつ、借金つてのはな、借りてた金融会社が倒産しようとも別のことろに債権が引き継がれて取り立ては終わらないものなんだよ。いいか、現実にはそんな都合のいいことはないんだよ！」

「よくわからんねーけど、お姫様とおれの契約は傭兵仲介センターを介さない非公式なもんだから、お姫様さえいなくなりやチヤラになるぞ？」

「そんな甘いもんじやないっての！」

「だあーもうつ！ 味方になつてやるつつてんだから、『わーいラッキー』とでも思つて受け入れりやいいじゃねえか！」

「やだよ。味方になる理由がすぐに裏切るフラグにしか見えない

どうせあつちが優勢になつた瞬間に背後から刺すに違ひない。

「裏切らねーからー 絶対裏切らねーからー」

それを今まさに向こうを裏切つている奴に言われても説得力がない。だが、昔の人は言った。

『立つてこる者は親でも使え』

ならば使ってやるのではないか。

だが、保険はかけておくに越したことはない。

「なら、おひさんには今の距離以上に近寄るな。近付いたら敵だと認識するから」

「うわあ、全く信用されてねえな。ま、当然だけど」

「お話は済みまして?」

それまで、なぜか黙つてことの成り行きを見ていた貧乳の少女が声をかけてくる。

「あ、お姫様。わざわざ待つてくれたの? そいつはサンキュー。つーわけでおれ、縁の旦那に付くから」

なんか有名なカップ麺みたいな呼び方だな。
あれっておっさんのこと? へ

「ザラ、あなたのことは腕が立つので重宝してこましたのに残念ですわ」

ちつとも残念なようには聞こえへ、むしろ楽しそうに貧乳の少女は笑みを浮かべてこる。

「確かにお姫様は金払いがいいから密としては最高なんだけど、主としては最低だ。もう、人間椅子にならなくていいかと思つと清楚するぜ」

「あら、悦んでたじやない」

「そりゃあ最初はな。だけビジの一回でよくわかった。お姫様のケ

ツのボリュームは普通の女と変わんないってな！ 胸がないこととそのツインテールに騙されたけど、あんたは幼女でも少女でもない！ 実際、歳も十八だしな

「身長で大体わかるだろう」……

「背がちょっと高めなだけだと思つたんだよ！ 背がちつちやくて巨乳な少女が存在するように背が高くても色々薄い少女もいるんだ！」

「ちょっと、わたくしを口りのカテゴリーに入れてましたの！？」

「……口りコンめ」

「だからおれは口りコンじゃねーよー。あんなちつちやくて童顔であれば二十代だらうと三十代だらうと発情できる連中と一緒にすんな！ おれが好きなのは十代半ば以下の少女とか幼女だけだ！」

「それが口りコンだと言つんだ」

「そうですね。ただ、合法の口りが許せないだけで紛う」と無く口リコンですわ」

貧乳少女とチワワ男と細身の裏切り男の三人が内輪で痴話喧嘩している。

なんとゆーかウザつたいな。

全然話に入れないし、聞いてるのが面倒くさい。

おっさん以外のその他大勢の皆さんも同じような顔をしている。

「あの、喧嘩すんなら外出でくんない？」

「あ、緑の旦那すまねえ。あらぬ濡れ衣を着せられてつい熱くなつちました。よし、いつちょ分からず屋のお姫様にさつきの魔法をぶつ放してくれ」

「黙れ口りコン。命令すんな」

「だから違うつての！」

話を聞いてる限り口りコンとしか判断できない。

この人種は二十五歳以上のバインバインな女性が好きなおっさんとは相容れない存在である。

「さて、時間稼ぎはそろそろいいですわね」

貧乳少女が今までのテンションが嘘だったかのように冷静な声を発す。

「え……あ！ 旦那、まずいつ！」

「どうした口リコン」

「くっそ、ツツ「む時間すら惜しい。早くさつきの技でお姫様を攻撃してくれ」

そうは言つてもあれだけの威力がある以上、おいそれと使うわけにもいかない。

おっさんだつて元日本人だ。

人殺しは良くないことだつて認識が強い。

「グズグズしてつと……」

「く古の契約に基づき 顯現せよ 炎の精霊よ」
サラマンダー

貧乳少女の詠唱が終わると、彼女の目の前に幾何学模様の赤い光で出来た円が浮かび上がり、そこから炎を纏つたトカゲがはい出てくる。

「くそ、おれとの会話は魔法陣に魔力を満たすための時間稼ぎかよ」「ええ、あなた達が口論してる時間だけじゃ 精霊を呼び出すための詠唱の前段階までしかできませんでしたから」

「どうしたこと？」

魔法に疎いおっさんには理解が及ばないが、つまりはあの味方にす
るしないの口論の最中に色々やって、あとは時間稼ぎをしてたって
ことかな?

「ほんとうにお前のせいじやん」

「おれ？ あ、こやー悪くないかうかと言えは悪いかもだけど、あれが四駆をやられた前にちゃんと走り切ったじゃん」

「あれはもう手遅れな段階だつた。んで、あれはなんなの?」

そう言つて炎のトカゲを指差す。

「サラマンダー。お姫様の使う赤の魔法でも超弩級にヤバい代物だ。召喚するのに時間がかかるが、その威力は折り紙付き。さつきの日那の魔法よりも多分強い」

ヤバくない？

「ふふふ、わたくしにこれを使わせた事を誇りに思いなさい。ただのゴミ掃除には滅多に使わないんですから」

すでに勝ち誇ったような少女の笑み。

実際、彼女には自身の勝利のビジョンが見えていることだろう。

だがしかし、そいつはまだ早計といつものだ。

相手が人でないならおっさんはなんの躊躇いもなく、魔力波を撃てる！

「アーティスト」

再び構える。

狙いは炎のトカゲ。

「はーーっ！」

【失敗。魔力残量がない】

「…………」

「…………旦那？」

「…………おしまいだあーーー」

「旦那ーーー？」

一発で終了なのか。

またしてもどんなスキルなのかを検証しなかつた弊害が起こつた。

「お、驚かせてくれましたわね」

少女が身を竦めた体勢から顔を上げ、やたらキヨドリった声を出す。どうやらさつき撃つた魔力波が意識下にあつたために反射的に身構えてしまつたようだ。

「まあ、あれだけの魔法を使つたんですもの。魔力切れをおこすのは当然ですわ。次はこちらの攻撃を……」

「さつきからひるといつーーー！ 今、リリーが眠つたところのよーーー！」

「いたつーーー！」

怒声と共に勢いよく扉を開いてジーナが現れる。
ちなみに扉を背にしていたために開いた時に扉がおっさん後の頭部に当たつてしまつた。

「……なにこれ？」

ジーナは扉の外の光景に事態が飲み込めないようだ。
まあ、いきなり沢山の人がいるわけだしな。

「とりあえず全員敵つてことでいいのかしら？」

ガシッとおっさん頭をわしづかみにしながらジーナが呟く。

……全員つておっさんは入つてませんよね？

ねりやで、攻勢に出る（後書き）

魔力波はド〇クエやつたことある人ならわかるかもですけどマダ〇テのイメージです。

ジーナはおっさんの頭を掴みながらその他大勢を睨みつける。そのえもいわれぬ迫力にロリコン男をはじめ、ほとんどの者がビクッと身を震わせる。

「豚、これはあんたの手引き?」

「断じておっさんの手引きではないです」

「手引き“では”?」

ジーナの指に力が込められる。

「諸々の事情がありまして……」

「やう、なら」こつらを殺した後にでも釈明を聞いてあげるわ。あと、他の奴らはここで殺す

ジーナの口から冷徹な声音で紡がれる言葉によると、とりあえずおっさんの命は猶予期間を得たようだ。

「ちよつ、奥さん? おれは敵じゃないですよ? 味方味方!」

ロリコンが慌てた様子で味方アピールをする。

ジーナはその姿をジロリと見るとすぐに興味を失ったように視線を移した。

「……サラマンダー。へえ、かなりの上級の魔法士がいるみたいね」

視線を移した先にいたのは炎のトカゲ。

それを見たジーナから強烈なまでの殺気が溢れ出す。

「だ、田那。 奥さんおれのこじとガン無視なんですか?」
「ええ……」

同感だ。

多分シーナは物凄く怒っているのだろう

たつでここはシーナにとってのサンケチニアリで、そこには無数の侵入者がいる。

そしてそこでまずはじめに疑うのはエリーゼンを狙う存在のこといや、むしろジーナの中ではもう断定していくてもおかしくはない。ジーナのリリーへの溺愛具合は日に日に増していくと言つても過言ではないから、それを犯そつとする者達への怒りもまた凄まじいのだろう。

つて痛い！なんかおっさんの頭に加えられる握力が強くなってる。
なんかミシミシいつてるーつ！

「せっかく私のことを見せて貰ってるバカがいる干嘛のこいこい？」

「色々誤解があつたんですね！」

「豚、あとの説明次第じや殺すわよ？」 あと、そこのお前「は、はいっ」

「殺す」

「いやいや、いやいやいや！ え、理不尽。すっげー理不尽。なに、奥さんじゃないの？」

理不尽を加減で言つたらお前の元主とどつこごどつこいだな。
ま、ここに侵入してきた時点でジーナの中では殺害対象なのだろう。
おっさんもリリーに懐かれてなきゃヤバかつたに違いない。

「あ、説明するところじょこと長くなるんだけど……っておわっ！」

ロリコンに説明しようと思つた時、急に持ち上げられ横にポイと捨てられた。

「く我 災厄からの護りを 創造す！」

ジーナの言葉と共に彼女の前面に白い光の円が生まれる。その円は複雑な模様が描かれており、貧乳少女がサラマンダーを出した時に出現したものと似通つていた。

円はすぐに消え去り、その円が消えた場所には馬鹿でかい透明な壁が出現した。

そして次の瞬間、その壁に炎がぶつかった。
それは圧倒的な熱量と威力を持つてジーナの円の前に現れた壁に襲い掛かり、ついには壁にひびを入れていく。
そのひびが壁の全面に至つたところでようやく炎が收まり、それと同時に壁は砕けちつてしまつた。

「あら、耐え切りましたの？ なかなかやるようですね」

「お前がサラマンダーを召喚した魔法士か」

「そうですね。希代の魔法士こと、アイリス＝ゴッド・ワイルドと申します」

貧乳少女改めアイリスは優雅に微笑みながら自己紹介をする。
「でも今さつき不意打ちしたように見えない。

「ファミリーネーム持ちだと……貴様、貴族か」

「見たらわかりますでしょ？ この全身から溢れ出る氣品と麗容な

姿。どいつもこもる貴族としての正しい有様を映しますわ

ついでに尊大な態度も想像しつる嫌な貴族そのものだ。

だがしかし

「ただし、胸はない」

それだけでおつさんの中での女としての魅力はマイナス五十点だ。

「今なんつった『グラアー』」

「お前は少し黙つてろ」

「旦那、空氣読めないつてよく言われません?」

三者三用に責められる。

だけど、それでも譲れないものつてあるじゃん。
ね、チワワさん?

視線を黙つてことの成り行きを見ているチワワ男に向ける。
しかし、おつさんの視線を受けたチワワ男はゆっくりと首を左右に
振つた。

よしわかつた。少し黙つてこよう。

「あれのことは置いといて、お前が貴族だらうと手加減はしないぞ」「あら、わたくしも妊婦だらうと容赦はしませんわ」

なんでそこで爆弾投下すんのよー?~
周りの気温が二度程下がった気がした。

「豚、説明次第では一回殺す」

ジーナと田舎の前の発言で「なんにも自分の首を絞めぬ」となるうとは……

でも、ここに辿り着いた経緯を話した時に殺されそうになつたことは教えるから、ちゃんと最初からキッチンと説明したら許してくれるよね？

あ、でもお仕置きがあるならそれはそれで楽しみかもしない。

「ふふふ、説明もなにもあなた方は今から死ぬのですから関係ありませんわ。やりなさい、サラマンダー」

アイリスの声に従い、サラマンダーがその口をジーナに向けて開く。そしてそこから炎を吐き出した。さつきの攻撃もあれか。

「く我 災厄からの…………くつ！」

ジーナが迎え撃とうとしたときの壁の呪文を唱えようとしたといひにチワワ男が自身の得物である大剣を投げつけることで詠唱の妨害をする。

このままではジーナがつ！

身を呈して庇おうと動き出すが、反応が遅れてしまったために間に合わない！

「チツ、限定、部分解除」

迫り来る炎の攻撃を薙ぎ払つて現れたのは右腕をドラゴンのものへと変貌させたジーナの姿。

おっさんのがジーナの無事に安堵する一方で、その他の者の視線はその右腕に集約する。

「は、は、あはははっ！　まさか捜し求めていたドラゴンがこんなところにいるなんてっ！」

最初に口を開いたのはアイリス。その声は心底楽しそうであり、尚且つ抑え切れていなほどの狂気を内在している。

「……ぶつたまげた」「ふむ」

口づけとチワワ男も他に言葉が見つからないとこった様子でジーナを見つめる。

「ジ、ジーナ……」

出来るならば隠しておきたかった。

そうであれば、最悪おっさんの命一つを犠牲にしてジーナとリリーが逃げて助かる道もあつたかもしれないから。だが、知られてしまつた以上アイリスという少女はどこまでもジーナを追いかけていくことだらう。

「なにを不安そうな声を出してるんだ。確かに正体を知られることは色々まずいかもしねないが、田撃者など全て消せばいい話だ。それにバレてしまったのだから隠す必要もない。むしろこれで良かつたよ」

良かったとはあまり思えない。

「ドラゴン。あなたの心臓、このアイリス＝ゴッドウイルドが有効に使ってあげますわ。だから安心して死になさい」

「死ぬのはお前だ。なぜこの空間がこんなにも広い造りなのかわかるか？ それはな……こざとこづ時に私が全力で戦つためだ！ 限定、全解除」

力強いジーナの言葉。

そしてジーナの体が膨張し、着ていた服が破けていき、ついにはリリーの五倍以上はある大きな白いドラゴンへとその身を変えた。

「

耳をつぶさくようなジーナの咆哮に思わず耳を塞ぐ。

「サラマンダー！」

アイリスも同様に耳を塞ぎながらも、視線はドラゴンの姿となつたジーナから逸らさない。

サラマンダーへと指示を飛ばしてジーナと相対する。サラマンダーは召喚者であるアイリスの指示に従い、その口をジーナへと向けて開く。

「遅い」

しかし、サラマンダーが炎を吐き出すよりも速くジーナがサラマンダーへと腕を振るい、サラマンダーを叩き潰してしまった。

「う、うわああああ

それを見ていたその他大勢の内の一人が恐怖に当てられ、広間から洞窟の通路へと続く道へと走り出す。
それに他の者も追従し、通路へとひた走る。

「一匹たりとも逃がさない」

ジーナが息を大きく吸い込む仕草をし、通路へ向けて口を開くとそこから白い光の球が吐き出される。

それが通路付近の壁へと当たたり、通路を塞いでしまった。

「この場所と私の正体を知つた以上、皆殺しだ」

死刑宣告と言えるものを淡々とした調子でジーナが伝える。
そしてその視線がアイリスで固定された。

「まず、一番厄介そうなお前を殺す」

「あ……くつ！ く炎の槍よ 我が敵を貫け」

赤い底辺の直径が一メートルほどの円錐がアイリスの背後に現れる。
円錐は現れた直後に赤い弾丸となつてジーナへと襲い掛かった。

しかし

「ふんつー」

ジーナの腕の一振りで霧散してしまつ。
あれがいわゆるチートって奴なんだろうな。

「そ、そんな……」

たつた数分。

それだけの時間での自信満々なアイリスの姿は消え去ってしまった。

最初は悪役っぽかったのに、立場が逆転したように見えるのはおっさんだけ？

なんかもう、アイリスが哀れになつてきた。

もはや彼女は放心した様子でジーナを見つめることしか出来ない。

「死ね」

そのアイリスに向かいジーナの腕が振り下ろされる。

「アイリス様っ！」

間一髪のところで飛び込んだチワワ男によつて辛うじてアイリスはジーナの腕から逃れることが出来た。

だがそれは少しばかり寿命が延びたに過ぎない。

「ヤーロフをえ、ヤーロフの槍さえあれば……」

ブツブツとアイリスが呟く。

その声は静まりきった広間の中ではいやに響いた。

「ドリゴン殺しの力を持つたあの槍さえあれば、このような無様なことには……」

「アイリス様、お気を確かに」

「ヤーロフの槍さえあれば！」

「無いものねだりをしてもしょつがありません。今はいかにしてこの場を逃れるか考えるべきです」

「逃がさないわよ」

「くつ！」

迫るジーナの追撃をチワワ男はアイリスを抱えて避ける。

だが、いつまでも逃げ切れるわけじゃないだろう。

いつか一人は捕まり、ジーナによつて殺されてしまう。

果たしてそれは良いことなのか。

確かにジーナの正体と居住が知れ渡つたことで口封じに殺すのは合
理的なはずだ。

だけどおっさんは人として、そしてジーナと一緒に週間ほど共に過ごし
た者として彼女に人を殺させてしまつても良いのか。

人としての倫理感とリワー やジーナのためという思いが天秤の両皿
の上に乗り、揺れ動く。

だが、結論はあつたりと出た。

つまらない倫理感に囚われてジーナ達を危険に晒すことは出来ない。
僅か一週間ではあるが、共に暮らしたことは間違いではないし、情
が沸くのは当然のこと。

対してアイリス達はおっさんの命を狙い、ジーナ達をも狙つてゐる。
どちらを取るかは単純な図式だ。
おっさんはアイリス達の死を肯定した。

しかし、そう思つた瞬間、おっさんの中で何かが失われたよつた喪
失感を感じた。

ねつねつ、迷走空間（後書き）

シリアルって難しいです。
特に私の中では主人公はシリアルキャラクターじゃないのでなお難しい。
なのである一つといつてみました。

次話で一連の話は終わりにちる予定ですので出来るだけ早く投稿し
よつと思こます。

おっしゃ、飛びます

ヒツヒツアイリス達は壁際まで追い詰められていた。目の前にはドラゴンの姿となつたジーナが悠然と立ち、最早逃げ場など『えないとばかりに油断なく構えている。

「もつ、鬼じつこは終わりだ」

「……クピン、下ろしなさい」

「アイリス様……」

逃げる』ことを諦めたのかアイリスは抱き上げていたチワワ男に自身を下ろすよう命じる。

チワワ男はそれに異論を挟むこともなく、静かにアイリスを地面上に下ろす。

「命乞いなんてみつともない真似はしませんわ。抗つても無駄なことも理解しています。ですから一言……死んだら呪つて差し上げます」

それが遺言だとばかりにアイリスは言い放つ。ジーナはそれに答えるでもなく、ただただその腕をアイリスに向けて振り下ろした。

『アイリス様が死ぬ必要などありません

それはどこからか聞こえてきた声。

一体誰が……

そう思い辺りを見回そうとした瞬間、

「があつ！」

ジーナのうめき声とも叫び声ともとれる声が耳に届き、視線をジーナの方へと戻す。

そこにはおつさんが魔力波でぶつ飛ばしたはずの鎧の巨漢がいた。しかし、彼の鎧はボロボロと言つても差し支えないくらいで、左腕の肩から先は破損してしまつたらしく腕が剥き出しなつており、その腕も血に濡れ、肘から骨が突き出していた。

それ以外でも所々砕けている箇所は多々あり、フルフェイスの兜も右上の部分が失われ、彼の素顔をかいま見ることができる。そこから覗く理知的な瞳は優しげにアイリスを見つめている。

「不肖ながら」のヤーロフ、帰つてまいりました

鎧の巨漢、ヤーロフはジーナの腕を槍で貫き、強引にアイリスへの軌道をずらされた状態で止まっている。

「よく、生きてましたわね」

おつさんも同意見だ。

あれでよくも生きていられたものだ。

「はい」

「ならばここれから反撃ですわ」

アイリスがかつての勢いを取り戻し、消えかかった蠟燭の火が再び

燃え上がったかのような氣概を見せる。

「申し訳ありませんが私もそつ長くは戦えそつにありません。すぐに撤退を」

「どうして」

「左腕と肋骨が數本折れています。ですが、アイリス様が逃げるまでの時間稼ぎくらいならしてみせます。私が吹き飛ばされた穴を進めば洞窟から出られますから急いでください」

ヤーコフは視線で出口を指し示す。

「ですが」

「クピン、頼む」

「承知」

「あ、こいつクピン離しなさい」

チワワ男がアイリスを再び抱え上げ、ヤーコフが吹き飛ばされた穴へと走る。

「ぐつ、逃がせ、ん」

「あなたは私に付き合つていただきます」

「くそつ」

槍を引き抜いたヤーコフがジーナと向かい合いながら突きを繰り出す。

それをかわしながらジーナは逃げ去るアイリス達の背中を見る。

「そいつがドラゴン殺しの槍か？」

「ええ、魔槍ゲオルキングス。ドラゴンの最大の武器である魔力を喰らう正義の槍です」

「正義ねえ……」

またチラリとジーナがアイリス達を見る。
そしてその表情を苦々しいものに変えたあと視線をヤーロウに戻そ
うとした時におっさんとジーナの視線がピタリと合つ。

「豚、奴らを逃がすなっ！」

「あ、ああ」

「旦那、おれも行きます」

ジーナに言わればつとしたように動き出す。

ロリコンも追従するように後を追つてくるのだが、穴の位置はおっ
さんからかなり遠いため、このままでは間に合はうもない。

「インセクトラーフォーゼ
昆虫形態」

【インセクトラーフォーゼ
昆虫形態のスキルが発動した】

クワガタ状態になつて飛んだ方が速いと判断し、スキルを使う。

「あ、ずるいっ！？」

そう言ってロリコンがおっさんの脚に掴まる。

「脚もげるっ！」

「大丈夫です」

お前が言つなよな。

つーかなんでついて来てるんだよ！

くつそー、振り落としてやる。

「旦那旦那、ヤバいよ……」

「あん？」

慌てたような口づけの声に浮かんだ考えを振り払いながら前方へと目を向けると、アイリスがこっちを見ていた。
その口は何やらパクパクと動いていて

「お姫様、魔法の詠唱してる」

「何!? 何の魔法か分かるか?」

「いや、わかんね」

使えないなー。

そう思つていてるときなり目の前に炎で出来た壁が現れる。

「危なっ！」

このままだと壁に突っ込んでしまう。

だが、おっさんはある程度の高さまでしか飛べないので急上昇してかわすのは無理。

また、ロリコンが掴まつてるので横にかわすような小回りのきいたことも出来ない。

選択肢は止まるの一択しかなかつたのだが、車が急に止まれないようにおっさんも急には止まれない。

「旦那、達者で」

危機を感じ取ったのかロリコンはいち早く手を離して離脱する。

そしておっさんは翅の動きを止めたのだが、慣性の法則に従い、炎の中に飛び込んでしまった。

めちゃくちゃな熱さの中を再び翅を動かすことでぐぐり抜けたもううそこにはアイリスを抱えたチワワ男の姿はなかつた。

「くそ、逃がした」

だがまだ間に合つかもしれない。

急いで穴の中を追いかけようとした時

「ぬうおつやああ
「あやつ」

気合いの入つた野太い声が聞こえ、次いでジーナのものと思われる声が耳に届く。

声のした方を見ればジーナが首から血を吹き出している姿が田に入つた。

「いのつー。」

血を流しながらもジーナが腕を振るうが、それはあまりにも単調な攻撃であり、あつさりとヤーコフはかわしてしまい、田の前を通過する腕を槍の穂先で切りつける。

「くうつ……」

「ドリゴン」自慢の回復力や多彩な魔法もこの槍で傷を負えば形無しだな「フツ、ゲホツ……もう時間はかけられないか」

ヤーコフは苦しそうに咳込むと視線を鋭くさせてジーナを睨む。

「時間稼ぎの役目は果たした。あとは『』への挑戦として『リラゴン』に挑むのみ

「舐めるな人間っ！」

ジーナとヤーゴフの戦いはヤーゴフ優勢のまま進む。

ジーナの腕や尾による攻撃はかわされ、ヤーゴフの攻撃はジーナの体に確実に傷を与える。

だが、一方的なように見えてその実、ヤーゴフは内心冷や汗ものだらう。

なぜならばジーナの攻撃は一撃一撃が人にとって必殺の威力を持ち、今のヤーゴフの体では掠つただけでも致命傷と成りうる。

そうでなくとも槍を一回振る度にヤーゴフの体力はガリガリと物凄い勢いで削れていっている。

このまま時間さえ経てばジーナの勝ちは揺るがない。

だが、なぜか妙な胸騒ぎがする。

気付けばおっさんは穴へと向かわず、ジーナ達の方へと飛んでいた。言い知れぬ不安、まるでジーナが死んでしまうというような嫌な予感。

その予感は決して間違いではなかつた。

「はあつー。」

ジーナが腕を団に噛み付くために口を大きく開く。

しかし、その瞬間こそヤーゴフがずっと待ち望んでいたものだつたのだ。

「外は鱗に覆われて致命傷を『えらねずとも中まではやつ』あるまい！」

スキル発動、グングール
神槍

それはただの突き。

だがしかし、愚直に突きの修練を繰り返し続けた者だけが辿り着くことができる人の限界を超えた神速の突きだ。

それがジーナの口腔へと迫る。

だけど

「間に合つた」

ほんの一瞬だけおっさんのが間に入る方が早かつた。

「なつ！？」

「え？」

槍はクワガタ化したおっさんの腹を貫通し、そこで止まる。今まででもっとも強烈な激痛とも言えるのを感じながら、おっさんの心の内はジーナを守れたことにに対する満足感の方が強かつた。だけど、まだ終わつてない。

この、ジーナを害する『武具』など存在をせではないけない。

「壊れてしまえ」

「しまつ……！」

【武具破壊のスキルが発動した】

崩壊し、ボロボロと崩れ去るドラゴン殺しの銀の槍。

そう、これでジーナの勝利は揺るがない。

おっさんの体は翅に力が入らず地面に落下するが、まだ意識は保つていた。

「今」

ただ一言ジーナにそう告げる。

「

ドリーヌの咆哮とともに振るわれたジーナの腕がヤーロフの体をボールのように吹き飛ばす。

そして淡い光に包まれたジーナの体が段々と人の姿へと戻っていく。だが、問題はそこじゃない。

人の姿に戻ったジーナが体に何ひとつ身につけていないのが一番の問題だ。

「大丈夫っ！？ 死んでない！？」

ジーナが近付いてきているとここの声はどこか遠くから聞こえてくるような気がする。

視界も霞んでいく。

だが、目の前には桃源郷がある。

おっさんは心の録画ボタンを押して、最期の時を焼き付ける。

初めてジーナの生まれたままの姿を見るのだが、透き通るよつた白い肌に美味しそうなメロンが二つ。

ああ……この体が動くのなら飛びつきたい。

「なんで私を庇つて……」

声がまた遠くなる。

お別れの時間が近いのかもしねない。
出来ることなら笑つて終わりたい。

「ただの勘だよ。でも、これがホントの虫の知りせつて奴だね。お
っさんが虫人ムシヒトだけに……」

……四十五点くらいか。

もつ少し捻りが欲しかつた。

そんなことを思いながらおっさんの意識は黒に染まつていつた。

「う、うう……」

最早指一本動かない状態ではあるが、ヤーロフはまだ生きていた。
だが、それはほんの僅かな時間であることはヤーロフ自身にもわか
つていた。

そんなヤーロフの顔の傍に何者かが立つ。

「ありや、ヤーロフの町那つてしままだ生きてんだ。しぶといね
「ザーリザ」

その何者かの名前をヤーハーフは掠れた声で囁く。

「逃げ、なかつたの、か……」

「うーん、どうしようか悩んだんだけど今更お姫様達と同じ立ち位置に立つのもなんなんで」

「どう、こう……」

「ヤーハーフの旦那。おれね、あなたの主を裏切つたんだ」

その言葉にヤーハーフは己の瞳を見開いて、ザラの姿を捉える。ザラは主であるアイリスがいきなり連れてきた者であつたが、剣の腕が立ち、言われたことにも従う素直な男だ。

少し性癖がおかしい点に目を瞑れば、欠点といつものが思いつかないような好青年だ。

ヤーハーフの見解としては裏切るような真似をする男ではなかつた。

「理由はお姫様には適当に言つたけど、本当はちよつと違つんだ。冥途の土産に教えてやるけど実はおれさ、 なんだ」

その言葉に見開からたヤーハーフの目がさらに開く。

「だからあの縁の旦那に興味が出た。旦那ならもしかしたら

になるかもしない」

「あ、れは……もう、死ぬ」

「死なないよ」

ザラは地面に倒れ伏したエメラルドグリーンのやたら大きいクワガタとそれに寄り添つ白い髪の女を見つめながら、やけに確信を持つた様子で言つ。

「もし、生き、ていても、お前が、ドラゴンに殺さ、れる……」

「そこには秘策があるからね」

そう言ってザラは懐から青い小さな瓶を取り出す。

それは、死に行くヤーロフには喉から手が出るほど欲しいもの。

「私に、くれつ……」

「ヤーロフの旦那、あんたはやれないな。代わりにこいつをプレゼント」

ザラはそう言つと腰の剣を引き抜き、ヤーロフの首筋を切り裂いた。生暖かく、赤黒い血が吹き出るのを避けながらザラが呟く。

「さよなら、ヤーロフの旦那」

そつと見て視線をクワガタの方へと向けて、そちらへと向かって走り出した。

「旦那、大丈夫ですかー」

その手に先ほどの青い小瓶を持ちながら

ねつねつ、飛びます（後書き）

一応の収束です。

あ、リリーが全然出てこない……

おっさん、目覚める

【ラルドは貫通耐性のスキルを得た】

【ラルドは九死に一生のスキルを得た】

そんな天の声を目覚ましにして、意識が浮上してくる。目を開いたところに映つたのは洞窟内の住居の天井。どうやらおっさんは死んだわけではなく、天国には行かなかつたようだ。

なんか顔が妙に水っぽいと思つたらビチャビチャに濡れたタオルが頭に載せられていた。

いつの間にか昆虫形態インセクトフォーメは解け、人型に戻つていて自分の手でそのタオルをどけ、目の前で手を掲げて握つたり開いたりを繰り返してみる。

うむ、問題はない。

なぜ助かつたのかはわからないが、ラッキーとでも思つておこう。

そんなことを思つて視線を横に移した時に思考が吹つ飛んだ。

そこでおっさんが見た光景は異常だった。

何せ、縄で芋虫の如く縛られた男が白目を剥いて泡を吹いていたのだから……

訂正しよう。

もしかしたらここは洞窟内の住居や天国など生易しい場所ではなく、地獄なのかもしれない

それからある程度の時間が経ち、縛られていた男が意識を取り戻す。この男ところのがどうかで見たことあるなと思つていたら、ロリコン野郎だった。

「いやー、田那が死んでなかつたよつでなによりです」

「田頃の行いがいいからかもな」

「田頃の行いが良かつたらそもそも死にかけるよつな田には遭わないもんですよ」

なかなか鋭いとこをついてくるじゃねえか。

まあ、そんなくだらないことはどうでもいいんだ。

「ジーナ達はどうなつた?」

「ジーナ……ああ、クラベジーナの姐さんですか？ それなら……」

そう言つてロリコンがあの後どうなつたかを一から説明してくれた。なんでもおつさんがクワガタから人型に戻つたのは瀕死でヤバいつて印だつてんで、たまたまロリコンが持つていた秘薬を飲ませたら治つたとのことだ。

薬一つでの傷が治るとか有り得るのかとも思つが、事実治つてるのでから許容するしかあるまい。

ロリコンはおつさんの命の恩人となるわけだが人間だからという理由で全面的な信頼は出来ないつてことで縛つた掛け句、ジーナは用事があるからつてことでおつさんを見るよう強制されたとのことだ。

「んで、ジーナの用事つて？」

残党狩りにでも出掛けたのだろうか。

「いえ、詳しいことはおれにもわかりません。ヒューカクラベジー
ナ姐さんが腹減つただろ、つって持つてきてくれたものを食つてから
の記憶が曖昧で……」

あれを食つたといふのかー??

「よく生きてたな」

普通の人間だつたら即死しかねないようなものだと思つんだが、そ
んなに毒性はないのか?

「いやー、変な臭いがするんで冗談混じりに毒入つてませんよね?
って聞いたら田の前でうまいって言いながら食つてたんで、大丈
夫臭いだけだと安心して食べたんですけどね。まあ、味もなにも覺
えてませんけど……」

おっさんの時と同じじやん。

本人が目の前で食つたらそりや安心するよね。

「とゆーことはおっさんが意識を失つてからどれくらい時間が経つ
たかはわからなってこと?」

「ですね」

「そうか。まあ、お前がおっさんの命の恩人だつてことはわかつた。
礼を言う。ありがとう、ロリコン」

「まったく感謝されてる気がしないです。あの薬、まず手に入らな
いんですからね!」

「なんこと言われても、おっさんその薬見たわけじゃねーし

「いや、薬の」とはこの際どうでもいいこんです! ロリコンを訂正
して下れ!」

「んじゃ、名前なに?」

「おれの名前はザラと言います。ようじへワルドの田那」

「おっちゃんの名前……」

「ああ、クラベジーナ姉さんから聞きました」

なるほど。

まあ、おっちゃんの名前知つててこいつに話す可能性があるとすればジーナしかいないわな。

それにしても、普段豚とかお前としか呼ばないくせにジーナってばちゃんとおっちゃんの名前覚えてたんだ。

ん? 待てよ……

ジーナと言えば確かにおっさんが意識を失う前、全裸ではなかつただろうか。

目を閉じればあの時しっかりと焼き付けたジーナの裸体が浮かび上がる。

うん、ビューティホーバディ。

じゃなくて、つまりはこのロッコンもそれを見たといつことではないだろうか。

しかも、意識が薄れていくおっさんは違い、しっかりとその眼に焼き付けることが出来たはず。

する。

別にジーナはおっちゃんのものなんだから見てんじゃねーよボケとか言いたいわけじゃない。

むしろあの状況で目を背ける純情ボーイとか、まったく興味すら湧かない不能者なんかよりもずっと評価する。

だがしかし、おっちゃんよりも長い時間見てたつことが羨ましい&妬ましい……

あの裸体をジーナと数日間共に過¹したおっさんに対する神様の「
褒美的なものとするならボッと出のここの方がより長い時間見る
のは不公平極まりない。

「……どんくらい見た？」

「え、何がですか？」

「ジーナの裸だよ。どんくらい見たんだ？」

「……ああ、そういうばあの時姉さん裸でしたね。ババアのには興
味ないんで忘れてました。そりですね……時間を全部足してもそ
んなでもないですよ」

あ、そうか。

こいつ、性的異常者だった。

自分で口つ吻²とが言つておいてそこら辺考慮してなかつた。
つーか口つ吻²でもそこに女の裸があれば興奮するもんだと思つて
た。

「ババアってジーナに失礼だら」

「でも、ドリゴンって千年は軽く生きるって言われてますからわか
んないですよ？ 田那は姉さんの実年齢聞いたことがあります？」

そうこねばないな。

でも、おっさんとしては二十五越えてりや別にどんだけ歳食つてて
ても構わない。

本当に惚れたらヨボヨボの婆ちゃんでも愛せる自信あるし。

「その思想、まったく理解できません」

おっさんの女性観は真っ向から全否定された。
ふん、こいつだつて理解できねーよ。

「それせむりと、わひをから部屋を覗いてる幼女せじひひ様ですか?
? ペロペロしてここですか?」

「ん?」

ザラの言葉に部屋の入口の方に手をやると、体を半分離して顔だけをじゅらに覗かせてくるセリロングの白い髪の蒼い瞳の五、六歳くらいの子供がいた。

おひさんと視線が合ひととの子供はビクリと体を震わせ、髪の間から覗いてくる尖った耳がペロペロと動いた。

「……誰?」

迷子がなんかか?
でも、どつかで見たよつな……

「……おとーちゃん」

「せこ?」

「おとーちゃんとおとーちゃんとおとーちゃんとおとーちゃん。」

その子供はもの凄い勢いでおひさんと瞬きを瞬かないと胸に抱き着き、顔をグリグリと擦りつけた。
この仕草はもしかして……

「リリー?」

「おとーちゃんとおとーちゃんとおとーちゃん」

「あ、せこせこ。んで、おひさんとおとーなのかな?」

「うそ」

子供 リリーが頷いて肯定を示す。

「うやうやしくの子供がリリーってことで間違はせなさわつだ。

それにしても一体いつの間に人型になれるよつになつたと言つんだ。
いや、それは今はどうでもいいか。

今はもっと考えるべきことがある。

それは……

「可愛いなオイ」

天使じやん。

なにこれ、天使じやん！

「旦那……いえ、お義父さん！ その子はいつたい……」

「あ、少し黙つて」

可愛いなあ～。

ドリゴンの姿でも甘える仕草は可愛かったけど、お父さんよつつか
ひやこ今の姿で甘えられる倍可愛いわー。

「おとーさんもひだいじょーぶなの？」

「ああ」

「っこー、おとーさんとこつしょにこいもーい？」

「わらのロンドだよ」

などとロンドを置いてきぼりに初めてとなる本格的な親子の会話

を楽しむ。

だが、楽しみすぎて本題を忘れてはならない。

「お父さんどれくらい寝てた？」
「つーんとね……」

そう言つてリリーは指を一本、一本と立てていへ。
それが両手に差し掛かつたところで動きが止まつた。

「これくら」

「六日か……」

かなり長いこと寝てたみたいだ。

アイリス達はこんな長いこと何もしなかつたのだろうか。
そこら辺も聞きたいんだけどわかるかな？

「えーと、お父さんが寝てる間に変わつたことはなかつたかな？」

「かわつたこと？」

「うん、誰か来なかつた？」

「んーとね、だれもこなかつたよ。おかーさんがだれもこれないよ
うこつていりぐちこわしたんだって」

あ、そつか。

ここは洞窟なんだから入口ぶつ壊せば早々入つてこれないよな。

「あとねー、おかーさんがおひつじあるつてこつてた

ひつじ……引つ越しか！

確かに居場所がバレた以上、ここに留まり続けるのは悪手でしかな
い。

おっさんのがやつたように無理矢理洞窟を魔法で破壊して侵入するこ
とも出来なくはないのだから。

「どこに引つ越すかは知つてゐる？」

「しらなーい。ねえ、おとーさんリリーね、おとーさんのかんびよ
ーしたんだよ」

褒めて褒めてとばかりにリリーが皿をキラキラせしむる。
あ！あのビーチアビーチのタオルはリリーが載せたのか！
最初はなんじやこれとか思つたけど、それなら価値は上昇だ。
これは褒めてやらねばなるまい。

「リリーはこい子だね」

「えへへー」

頭を撫でてやるとすく嬉しそうに皿を細める。

「こいつはデリケーブルの時と変わらぬ」。

「あのー、お義父さん。そろそろおれも話に入れてください」

忘れてた。

つーかお義父さん呼ぶな。

微妙なイントネーションの違いがなぜかわかつてしまつ。

「あ、にんげんのおじちゃんもおきたんだ」

「うひ、まぶしつー」

「わかる。その気持ちわかるー」

「なにを馬鹿やつてるんだお前らは……」

「あ、ジーナ」

「姐さん」

「おかーさんー！」

「まぶしつー」

そこにジーナが現れ、事態は最早収集がつかなくなるかに思えたのだが、

「豚、元気やつでな」よつね

ジーナはすぐに視線をおひやんの顔に向ける」とでコーヒーの放つ光に抗つた。

「お蔭様で」

「わへ、なりやつやと枝度しなやこ」

「それつて」

「うわう」と?

と続けよつとしたおひやんを遮るよつてジーナが言った。

「おひ越しするわよ」

リリーから聞いていたとはいへ、田覚めたばかりのおひやんにはあまりにも急であった。

おひさん、引っ越し前です

おひさんが寝てる間に引っ越しの準備はほとんど全て完了していたらしく、あとはもう荷物を持って出てこなければ完了の段階まできていた。

各部屋はもぬけの殻も同然で、ほとんど何もなー。

つてゆーか、これだけなんにもなかつたら荷物はどんだけの量なんだと思ってしまう。

「見事に何もないね

「つひには必要なものしかないからな

その必要なものの中にはコーヒー用の大量のおもちゃ等も入ってる。

「えーと、荷物は?

「広間に纏めてある

「そつか

一週間ほど（寝てる間も含めればもつとではあるが）時間を過ぎたこの住居ともおわらばか……なんか村にいた頃よりも離れがたい気がする。

「で、どこに行くかは決まってるの?」

せっかくの引っ越しだから海が見えるといいがいいな。だっておひさん、魚派だもん。

「あ」

「あ、ってなによ。決めてないの？」

「全然決めてない。でもリリーが魔力限定期を覚えて人形態になれるようになつたんだから候補はいくらでもあるわ」

「そつかそか。まあ、リリーが人の姿とれるなら、町とかに行つても大丈夫だもんね。それにしても、目を覚ましたらリリーがいきなりちつちつちやい天使になつてたからビックリしたよ」

おつさんがそう言つてジーナは「けらけら」顔を向け、ニヤリと勝ち誇つたような笑みを浮かべる。

「ね、ね、ね？ リリーが初めてしゃべつた言葉なんだと思つ？」「なんだろうな……」

リリーってばおつさんのこと大好きだし、やっぱ『パパ』かな？あ、でも『おとーさん』って呼んでるよな？まあ、まだ人語を話せないドラ「ロンの時からおとーさんって呼んでた気がするからパパはないかな？

「リリーつたらね……お母さんの料理美味しくないって言つたのよ？」

やたら嬉しそうに言つてるが、ちょっと待ちなさい。その発言、ツツ「ロミ所がいくつかありはしないか？」

「いや、初めて話す言葉が長文過ぎる。あと、ジーナつてば否定されてるじゃん」

否定されたのは料理だけだ。

そう言つてしまつたリリーの気持ちはわかるが、初めてがそれはな

いじょー。

「え、普通でしょ？」

「なにが？」

「ゼリテーは話しあけていくとその言葉を覚えていくて、ある程度の語彙が蓄積された状態になつて初めて話せるようになるのよ。私だつて初めてしゃべつた言葉は『お姉ちゃんが』『飯盗つた』だし

ああ、そつか。

『ドラゴンだもんなー。人間と同じ物差しで測つたらダメだよね。

「おとーさんおとーさん」

ずっとおとさんの傍にいて手を繋いでいたリリーがブンブンと振ることで私、聞きたいことあるのアピールをする。

「なに？」

「ねどーかさせこしょーなんてしゃべつたのー？」

無邪気な質問だな。

普通なら自分がなんて言つたかなんて覚えてないのだが、おっさんのはよくネタにされたから記憶に残つてゐる。

前の世界の母曰く

「お父さんはおっぱこつて言つたじょー」

おっさんは他の赤ちゃんよりも早く言葉を話せるようになつたじょーが、結局一ヶ月くらいをこの単語一つで乗り切つたみたいだ。

最初はしゃべつたと大はしゃぎの両親もさすがにこれはどうなんだと息子の将来を心配したらしき。

あらゆる場所でおひさまに恥ずかしかったとグチグチ言われたもんだ。

まあ、次に話した単語がママだつたらしくそれが母の血縁だと言われた時には恥ずかしかつたけど少し嬉しかつた。

ただ、『今のお前は血縁出来ないけどね』つてオチ付けられるんだよなー。

しかも、『の話を初めて聞いた十七歳の正月以来、毎つ回一。
それから一十年近くおひさん母親にとって血縁出来ない血縁十ら
い。

あれ、なんだろ視界がぼやけてく……

「おとーをどびーしたのー?」

「リリー、『れはね?』己の馬鹿を加減を恥じてるのよ?」
「違つから。いや、親つて時に残酷だよなつて思つただけ

「つちが覚えてない」と、こつまでも覚えてやがるから質が悪い。

「私は残酷じやないつー。だつてこんなこつりーを愛してゐるんだ
から!」

そつとつてジーナはリリーをおひさんから引いて離してギューッと抱
きしめる。

あら、リリーの顔がジーナの胸に埋まつてゐるじやない。
羨ましい……おひさんもハグされたい。

「ジーナつてばそんな怒鳴らなくたつていいじやん。あと、ついで
に快氣祝いにおひさんも抱きしめてくんない?」

「は? なに、馬鹿なの? 死ぬの?」

「……冗談だよ。半分」

だからそんなに冷たい目で見ないで……いい意味でゾクゾクしちゃうから！

おっさん、興奮してマジでヘラクレする五秒前だよー。

「リリーがしたげるー」

抱きしめるジーナから逃げるよつこじてリリーがおっさんの腰辺りに抱き着く。

なんかほんわかして、邪な感情が霧散しちゃったよ。

「よつこじよつこじ

「じょーこじー」

リリーの脇に手を入れて持ち上げ、右腕でだっこする。リリーの程よい重さが腕にかかる、なんかいい。だっこするのが癖になりそうだ。

「ず、ずるい」

ジーナがすぐ悔しそうにリリーを見てこる。大方、リリーを取られたとか思つてんだらうな。

「はあ」

溜め息を一つ吐く。

「ジーナ」

そして呼びかけた。

ジーナはその声に反応して視線をおっさんへと移し、リリーを抱き

しめるために屈めていた腰を上げた。

おっさんはそんなジーナへと近付き、あたかもリリーを渡すように見せかけておいて、空いてる左腕でジーナの腰を抱き寄せた。ついで軽く尻にタッチ。つむ、よし。

「なつ……」

言葉を失うことはこの事か、とばかりに絶句しジーナは顔を真っ赤にしていく。

あまり耐性はないのかもしれないな。それにしてこの尻の弾力たまらん。

「は、離せ馬鹿つ
「えー、やだー」
「子供かっ！？」
「リリーも三人の方がいいよねー？」
「うん」

この場合、子供を味方につけたおっさんの勝利と言えるだろ？。リリーの言葉ならジーナもおいそれとは抗えまい。

実際、ジーナも不服そうにしながらも甘んじておっさんの行為を受け入れてくれている。

ならもうちょっと大胆に……

軽いタッチ程度の動きだった左手が撫でる動きへとシフトする。うん、ナイスフォルム！

「いたつ！」

不意にその左手に猛烈な痛みを感じた。

見てみればジーナの左手の指の爪がおっさん的手の甲へと刺さっていた。

「調子乗つてると殺す」

表情はすつ“じ”い爽やかな笑顔ではあるのだが、おっさんこしか聞こえない声でジーナは殺意をあらわにする。はいはいおっさんが悪かったです。

「いいケツだつたＺＥ。ジーナは安産型だな」

ジーナから離した左手でサムズアップして見せる。ほんつといい尻だつた。

まだ少し物足りないけど概ね満足した。

「お前は少しも反省しないのか……」「してんしてん。なんならお仕置きする?」

鞭とか蠅燭希望です。

三角木馬もあながち嫌いじゃない。

あとは鼻フックとかギャグボールとか?

うーん、ギャグボールはいいんだけど鼻フックは鼻毛が気になるからNGだわ。

「なんか喜んでるからお仕置きはしないぞ」

「放置プレイとはまた高度な……」

なるほど。ジーナは高みに至った女なのか。

と感心していたその時、視界の端になんだか気持ち悪いものが見え

てしまった。

「お前と話してると無駄に疲れる……」

「あ、ひどい。ところで……あいつどうすんの？」

おっさんの指が先ほど視界に入った気持ち悪い物体を指し示す。

「ハアハア、リリーたんカワイイ……マジ萌えだよー」

そこにいたのは未だに縄で縛られながら鼻息が荒ぐリリーを凝視する口リゴンの姿があった。

ヒューか萌えの感性はこの世界にもあるのかー？

「あれは捨てていく」

スッパリはつきりとジーナが断言する。
まあ、確かにあれはなんだか危ないからね。
だが、一応おっさんの命の恩人なわけだし、捨てていくってのはち
よつとアレだ。

「せめて生かしてあげたいんだけど」

「まあ、お前の気持ちもわからなくはないが、なんかあの様子を見
てるヒリリーに粘着しそうで嫌なのよ。ああ、リリー……あなたの
愛らしさは早速人を狂わせるのね」

リリーの頬を撫でながら陶酔したようにジーナが言つ。

それにリリーはくすぐったそうにしながらも屈託なく笑つてそれを
受け入れていた。

「うーん……とりあえず本人の意見を聞いてみないか？」

「ああ、リリー可愛いわ」

聞いてねーな。

いいもん。勝手に行つちゃうからね。

「動くな馬鹿」

「はいはい、『めんなさ』によつと。なあ、ロリ……ザラ君、君はこれからどうしたい?」

ロリコンの前に立つたおっさんはロリコンへと問い合わせる。それまではリリーを見つめて悦に浸つて緩んでいたロリコンの表情がおっさんへと向けられると急に真面目になつた。

「出来れば旦那達についていきたいです

「リリーの間違いじゃないの?」

「正直、今は拮抗しかけてますけど、一応旦那にという方が大きいですかね?」

なんの意味があつておっさんなんかに……
はつ！？ まさか！？

「ロリコンの癖に男色もあるの？ なんだか倒錯してんなー。つまりはバイセクシャルってことだる。つーかお前はどんだけ重い十字架を背負つて生まれてきたんだよ」

おっさん、体の大きさは大人だし精神的にもそこそこな年齢だけど、実際のこの体の年齢は一歳かそこらだもんな。

あいつのストライクゾーンに入つちゃつたかー。
なんて鋭い嗅覚してんだ……

恐ろしい奴だ。

「いえ、尻の穴は好きですけど男のは嫌です。そういう訳で、旦那の男気に惚れたんですよ!」

「さうと変態発言したぞ!」
「さうかこの豚に男氣? そんなんないだろ!」

傷付くわー。

「クラベジーナの姉さん、もう忘れたんですか? 旦那つてば体張つて姉さんを守つたじゃないですか!」

「む、うう……」

そうだよー。

ザラ君もつと言つてやつて!

「あとは、お姫様がここに入らなによつて扉の前に立つてここから先は通さないとか言つちやつたりして

あ、逆に恥ずかしつ!

おつせんつてばそんなこと言つてたつけ?

記憶にないな。

「まさに男の中の男ですよ」

褒められ慣れてないからむず痒い。

ま、悪い気はしないけど?

「いい奴じゃないか。連れてつてやうつよ」

「待て。あいつは人間で、私とリリーがドラゴンだってことを知つてるんだぞ? 一万歩譲つて殺さないのは構わないが、連れてくな

んて正氣の沙汰じゃない。絶対無理」

「姐さん、お願ひします。この通りですー。」

「どの通りだよー。」

縄で縛られてなければ土下座でもしそうな勢いだが、生憎ザラの体は縄で縛られたままなので顔を下に向けるくらいしか出来なかつた。それから一人による必死の説得もジーナの心を動かすには至らない。なので最終兵器に出でもらひしかなによつだ。

「リリーはまだいた方がいいと思ひへ。」

対ジーナの最終兵器であるリリーが味方につけなれば一万の兵士を味方につけるよりも心強い。

もし、ジーナの味方につけなればその時は諦めよつ。おっせんはわりと切り替え早いタイプなのだ。

「リリーはね、みんないつしょがたのしことおもひつー。」

「……だつて?」

「うやらリリーはこひらの味方についたようだ。」

まあ、味方つづーかよくわかつてないんだうひがどな。

「ぐつ、リリーをダシにし……でも私はリリーのために……」

悩んでるな。

まあ、ぶつちやけだ!リーンの親とこひ立場からすればジーナの方が正しいのだうひ。

おっせんもこいつが命の恩人でなければ提案を一蹴したのだうが、命の恩人つてわりと重い。

「おかーさんだいじょーぶ？」

「……うん、大丈夫よ。おい、犬」

「おれのことですか？」

「それ以外に誰がいるのよ。いい？ 裏切つたら死よりも恐ろしい目に合わせると共に罪もない人間が死ぬと思いなさい」

やる。彼女はザラが裏切つたら宣言通りに罪もない人間を殺すつもりだ。

だつて目が本気過ぎるもん。

「あと、豚。あんたは命に代えてモリリーを守ると誓いなさい。でなければ……」

「問題ないよ。リリーとジーナはおっさんを守るからね」

今更な話だ。

アイリス達と対峙した時にその覚悟は既に決めていたんだから。

「わ、私のことは別にどうでもいいから！ とにかくリリーだけはしつかり守りなさい」

「姐さん、もしかして照れてます？」

「だ、黙れ。とにかく、お前が一緒に行くことはとりあえず許可する。だが、こちらの提示する条件を全て呑んだ上で、それに抵触するならば即座にデスローダイするからなつ！」

「お、お手柔らかに……」

そうしてザラがおっさん達について来るための条件が決められた。

その条件とは

一、リリーと一入りにはならない

二、リリーに手を出さない

三、誰にも正体がドラゴンである」とを告げない

四、裏切らない

半分がリリーのことというのがなんともジーナらしい条件だと思う
ね。

おへしゃ、引っ越し前です（後書き）

世間ではもうクリスマスですね。

クリスマスネタをやりたかったんですけど、話の流れ的に無理かな?
気が向いたら短編として活報にでも書きます。

ザラの縄を解いて自由にやると彼はひとしきりつ体をほぐすよつて動かす。

パキパキと骨が鳴り、そつとうな時間あの格好だつたんだなと想像させられる。

「問題ない？」

「はい、ちょっと間に違和感があるんですけど概ね良好みたいですね」

それはきっと多分メイビー、ジーナの料理を食べたからだろうな。

「それよつこじを出るなら一秒でも早く出ましょつ。あのお姫様のことだから、金に物を言わせて傭兵集めてるに決まつてます」

この住居は名残惜しいが、もうあの貧弱な胸の少女にはあまり逢いたくない。

そんなこんなで四人は住居から出て広間に行くことにした。
しかし、広間で見た光景はおひねこの頭に疑問符を浮かべてくださつた。

確かジーナは広間に引っ越しの準備を済ませ、荷物を運び出したと言つていた。

当然、住居からなくなつていた荷物が置いてあると思つだろ？
しかし、広間には大きめのリュック一つが絨毯みたいなものの上にチョコンと乗つてる姿しかない。

一体、他の荷物はどこに消えたと言つただ。

「ジーナ、荷物はこれだけ?」

「見ればわかるだろ」

「いや、なんか、もつとなかつたつけ?」

「あれで全部だ」

全部なんだ。

ま、おっさんの私物があつたわけじゃないから何を捨てたかはジーナの勝手だな。

そう、この身一つで転がり込んだおっさんの私物などありはしないのだ。あえて言うならタオルとかのここに来てから使わせてもらつてる日用品がおっさんの私物だな。

「んじゃ、とりあえず行こつか

おっさんはそう言つてリュックへと近付くと、今までだっこしていたリリーを隣に降ろして、代わりにリュックを持ち上げようとした。こうゆうのを率先して持つのが男の嗜みだからね。

「ふぬつ

だが、予想以上にそのリュックは重かった。
いや、予想以上と言つかるむしろ重くて持ち上がらないレベルだ。

「……はあつ!」

【剛力のスキルが発動した】

なんとか持ち上がつたな。
つーか重つ。

「何入つてんのこれ？」

「だから家の荷物」

荷物つて……

なんか家の中のもののほとんどが入つてゐるみたいな重さだぞ。
それがこんなリュック一つに収まるわけが……
あ、そういうこいつて魔法とかある世界だつたな。
だつたらもう四次元ポケット的な物体が存在してもおかしくない。
つまりこいつは四次元リュックというわけだな。

「このリュック、見た目は普通だけど凄いね」

「見た目とゆーか、本当に普通のリュックだが？」

「え、これって許容限界がない四次元リュックでしょ？」

「違うぞ？ 中に入れる物をひとつひとつ私が魔法で小さくしただけ。さすがに一人だと時間がかかつたがな」

なんだ……四次元リュックじゃねえんだ。

だけど、ジーナの発言もそれはそれですげえ。

ポケットはなくても秘密道具的なものはあるんだねつて感じだ。

「とゆーかなんでお前荷物を持つてるんだ？」

「男ですから」

「いや、意味ないから置いておけ。とゆーかよく持てたな」

これつて遠回しに褒められてるのかな？

だとすれば、すごく貴重な経験のような気がする。
おっさんは褒められて伸びる子です。

「はつはつは、おっさんは軽いくらいだよ」

「そうか。じゃ、わざと下に置け」

「なんですか？」

引っ越しするんだから荷物持ちは必須だ。

そんなクソ面倒な役を率先しておっさんがしてやるうとうの……あ、そつか。おっさんが病み上がりだから気にかけてんだなー。変なところで気を遣つてるとかなんというか……なんだかんだで優しいんだよな。

「なんでって、それは……」

「ストップストップ！ わかつて。おっさんもジーナの気持ちはわかつて。でも心配しないで。おっさんは大丈夫だから

だから気を遣わないで、いつものように膝と罵りながらスパンキングするの（注：したことありません）をおっさんはバッヂトイ状態だよ。

「……何言つてんだコイツ」

「姐さん姐さん……もしかしてこれって魔動式浮遊絨毯ですか？」

「ああ」

「じゃあ、旦那はこれを知らないだけじゃないですかね？ これ、最近作られた物ですし、値がそこそこ張りますから、貧乏そうな旦那には手の届かない品でしょうし」

「そういうえば田舎の生まれだつたな……おい、膝。今から犬が説明するからよく聞いておけ」

「何事だい？」

「おれですか？」

「私はリリーの相手をするから」

「はいはい、わかりました。んじゃ旦那いいですか？」

その後、ザラによつてリュックの下に敷かれていた絨毯が魔動式浮遊絨毯と言われる乗り物で、ジーナはそれに乗つて移動するつもりだつたからリュックを下ろせと言つていたという説明を受けた。ネーミングに激しくツッコミたいが、それよりも……ただただ恥ずかしい。

人の話を聞かないにも程がある。勝手に相手の思いを決めつけて、それがそのまま正しいことのように振る舞う。

典型的なバカじゃないか。

そういう小学生の時の通信簿に毎回、他人の話を聞かないところが時折見受けられますって書かれてたな。

おっさん、どんまい。

前の世界での就活時の集団面接を思い出すんだ。あの頃はそこいら辺なんとか出来たじゃないか！

もうあんまり覚えてねーけどなんとかなつてたじやん。

よし、なんか元気出た。

「この絨毯は免許が必要かな？　皿運びじゃないけどおっさんは大型特殊の免許も持つてるんだよねー」

トラクターとか乗つてたからね。

「いえ、魔動式自動滑走四輪とかと違つて免許とかありません。魔動式浮遊絨毯に関しては多く普及してないのもありますが、魔動式自動滑走四輪と違つて接触事故を起こす確率が低いんです。だからまだ免許は必要ないということになつてます。まあ、暗黙の了解で魔動式自動滑走四輪の免許は持つてなきやいけないみたいなところ

ありますけどね」

「なるほどね。ところで……名付けた奴誰？」

「そりゃあ……製作者じゃないですか？」

そつか…… そうだよな。

たまたまだよな。

アラジンとかマリカーとかの名前なんて偶然だよね。

おっさん、ジーナ、リリー、ザラのそれぞれが絨毯の上に乗る。絨毯の大きさは四人が横になつても少し余るくらいの大きさなので、わりとスペースはある。

だが、リリーは胡座をかけて座つているおっさんの上に座つて、こ

こが自分の定位置よとばかりの態度だ。

そしてそれを悔しそうに見ているジーナと羨ましそうに見ているザラ。

「ふふん」

二人に勝ち誇つたような笑みを向けると、更に各自の感情を深くした。

「ねーねーおとーさん、これがどぶの？」

「そうみたいだね」

「リリー、おそらくてはじめてみる！」

「そうか、お父さんはよく空ばつか見てた時期があるよ」

太陽の光を浴びるためにね。

それにしてリリーは初めて外に出る「こと」になるのか。
それなら……

「晴れてるといいな」

「うん」

リリーの頭を撫でる。

リリーが初めて見る空が晴れだつたらどんなにいいことだらう。
今の時間はわからないが、それが日中であれ夜であれリリーの心には美しいものとして映ればいいな。

「起動するわよ」

ジーナが声をかける。

この絨毯は魔力石という魔力を溜め込む石を嵌め込むことで動かせるようになるらしい。

魔力石は内包する魔力が満タンの時は真っ白なのだが、魔力が失くなつていくとだんだん黒くなつていく物で、感じとしては白の絵の具に徐々に黒を足していくような変化が起こるみたいだ。
絨毯の操作は簡単で、その嵌め込んだ石に触れながら念じるだけ。猿でも出来ますって感じ。

今まで固く感じていた尻の感触が柔らかいものに変わる。
ヒューカ沈むような錯覚が起きた。

なんか変なことしたら落ちそうで怖い。

おっさんは近くにある取っ手のようなものを片手で掴み、もう片方でリリーを抱き抱えるようにして固定する。
チャイルドシートなオッサンとでも呼んでもらおうか。

絨毯はどんどん上に上昇していき、ついには天井までできてしまった。そしてジーナが天井を見ながらそろそろと絨毯を横に移動させ、ある場所にて止まる。

「犬、天井の奴剥がして」
「わかりました」

そこについたのは広間にあつた隠し部屋に施してあつたような偽装。ザラがそれを取ると天井にポツカリと大きな穴が出来た。

「ここからはちょっとした迷路みたいな作りになつてゐるよね」

ジーナの言葉通り穴の中は迷路のように入り組んでおり、ジーナが着いたと言つまではかなり長い時間が経つていた。

横穴を抜け出た先にあつたのは透き通るような青空と大きな木だった。

「わー」

リリーが喜びながら空を見上げる。

だが、おっさんは木から目が離せない。

この大きさはきっとここらの長老だらうか。

「さて、どちらに向かうか」
「ジーナ、あの木に近付いてくれない?」
「は? まあ、いいが……」

おっさんの要望通りにジーナは大きな木の側に絨毯を寄せた。

「おっしゃいこねー」「つよ、こよにむけたよ」

木に挨拶する。

「一体誰に……」

「しーつ、少し見守つてもうりえむかな?」

人差し指を鼻先に持つていくジエスチャーでジーナを制する。

「こよにむけたよ」

今一度、挨拶をする。
すると……

『ちーす』

なんか軽いノリで木が挨拶を返してきた。

「あなたがこよにむけたよ一帯で一番偉い木ですか?」

『そつすね』

「挨拶が遅れました。ラルドと申します」

『名前はしらねーけど存在は知つてゐる。うちの連中が会話出来る奴
が来たつて騒いでたからな』

おっしゃん、その会話をした奴を切り倒しちゃいましたけどね。
まあ、不可抗力だわな。

『えーと、ミズドリウムの森の大樹は知つてますか?』

『あのジジイっしょ。知つてんよ』

「じゃあ、その大樹が語った話は聞いてますか？」

一応、ザラの前なので言葉を濁して言つた。
伝わるかな？

『ああ、あの新種の人がどうたらこうたらつて奴っしょ。結構古くからいるのに馬鹿にされてつから必死なのはわかっけど、必死過ぎて逆に笑える』

「あれ、私のことですか？」

『え、マジで！？ 証拠は？』

「えーと、証拠になるかはわかりませんが、リリーちょっとじめんね」

リリーを退けて木に昆虫形態インセクトフォーゼをして見せてやつた。

『へえ……まあ、八割くらいは信用出来る話だな』

「あとの一割はどこがダメでしたか？」

『珍しいスキルを持つた人間とかの可能性もあつから』

確かにそうだよな。

でも八割つてことはほぼ満足出来る結果だな。

「んじゃ、次に根つゝワークで会議をする時は大樹を援護してやつてくれませんかね？」

『オッケー』

軽いなー。

でも大樹、おっさんやつたよ！－

多分目的のタフアンの森じやねーけどあなたの力になつたよ。

『それにしても最近物騒なんだよなー。武器持つた人共がおれっちの領域^{テリトリー}に入つてくつから』

「どういら辺りにいますか?』

木の咳きに心当たりがすぐに思い浮かんてしまつたおっさんは木へと問いただす。

『お前から見て右の方にいっぽい。あ、でも数人がバラけてこそこそやつてるみたいだ』

多分アイリスかアイリスから齧られた情報に釣られた奴だろ。あるいはその両方か。

とにかくすぐに逃げた方が良さそうだ。

「誰もいらない方向つてわかりますか?』

『お前から見て左斜め前方角には今のところ誰もいないぞ。逃げるならそつから逃げる』

「ありがとうございます。ジーナ、アイリス達が来てるらしい。あつちの方角に向かえばとりあえず安全みたいだから行つてくれ』

教えてもらつた方角へと指を差し、ジーナへと指示を出す。

「何を根拠に言つてるんだ』

「この木が教えてくれたからつてのが根拠。おっさん前に言つたよね? 木と話せるつて』

「……わかつた』

おっさんの言葉に素直に従い、ジーナが絨毯を動かす。

『アディオス!』

「本当にありがとうございました」

最後に木に対してもう一度お礼を言つておっさん達は去つていった。
今度改めてお礼しに来れたらいいなと思いながら……

しかし、それは叶うこととはなかつた。

なぜならこの森はおっさん達が去つてから十一日目にアイリスの魔
法によつて焼失してしまつのだから……

おひやご、行き先を決める

眼下の木々がまばらになり、アイリス達からも大分離れたであつた。これまで来た所で、一度絨毯を地上へと下ろした。

いわゆる小休止だ。

そこドジーナとザラは地図を広げて、これからどうするかの意見を交わしあつて居る。

おひやさんはとこつとリリーを膝の上に乗せたままボーッと空を見上げていた。

リリーもおひやさんに倣い同じように空を見上げて居る。

「おひやさんはじめいね」

「やうだよ。田に映るもので多分一番大きいからね」

「やうなの？」

「やうだよ」

ほのぼのとした空間。

そよ風が吹き、体を優しく撫でていぐ。

ゆつくりとした時間の流れに身を任せっこるとつこつこ黙つてしまつた。

「おこ、こつまでやうこつむつもりだ？」

そこドジーナからお声がかかる。

「あ、じめん。暇だつたもんで」

「じつあは」これから進路を話しあつてこねとこつのは……。お前

は参加しないで暇だからと言つてリリーを抱えたままボーッと上を見るだけか

「いや、まあ、仕方ないよ。オッサンという存在は暇だと空を見上げる生き物だからね」

「なんだそれは……」

「いやいやマジな話、空を見上げてるオッサンの八割は暇な人だから。あの二割は天氣を読んでる人」

「そうなのー？」

おっさんの言葉をリリーが不思議そうにしながら聞き返す。
これは、教育として色々教えてあげなきやな。

「そつそつ、だから空を見上げているオッサンは構われると懐くからみだりに声をかけちゃいけません」

「そつかー」

「そしてここからが重要だ。上を見るオッサンは暇だから危険はないけど、下を見るオッサンは危険なんだよ」

「どゆこと？」

「下を見るオッサンはね、およそ七割が人生に絶望しちゃってるから。そして、残りは全て蟻の行列の行く末を観察してる人だ。どつちにしろ絶対に話し掛けてはダメだからね」

下を向いてる人にはついつい何かあつたのかな、とか落ち込んでるのかなみたいに思い、「大丈夫ですか?」と声をかけたくなる。

しかし、例えば蟻の観察をしている人の場合、相手はただ蟻の観察してるだけなのに大丈夫かと聞かれてしまい、無性に恥ずかしいことだろう。

声をかけた方にしてみれば、蟻の観察をしてたと言われてもなんか困る。

結果、両方モニャモニャする。

次に、人生に絶望してる人の場合だが、大丈夫かと聞かれても結果大丈夫じゃない。

よつて下を見てるオッサンには声をかけてはいけないのだ。

「わかつた」

うん、リリーは良い子だ。

「なんか、すつげー極論ですね」

「別にどうでもいい。とゆーか知らない人に声をかける」と自体が良くないだろ」

二人には不評だつたようだ。

だが、これこそがおっさんの持論だ。

むしろ、おっさんはオッサンの立場で言つてるから一部脚色があつてもあながち間違いじゃないんだぞ？

「それよりこれからどうするかだ。西の方と東の方に町があるので、とりあえずどちらかを田指すことにした」

「海が見える方で」

即決だ。

理由は魚が食いたい。

これただひとつであります。

あ、あとリリーにも海見せたいよね。

あわよくばジーナの水着姿も見れるかも……

「どつちも海はありませんよ」

「テンショント下がるなー。」

じゃあ川か？

川魚と海魚を比べると海魚の方が一般的に思える。

だって、海は広いからな。

漁で獲れる量が違う。

“漁”で獲れる“量”……イケるか？

「おっさん、ダジャレ思ついたんだけ……」

「じつせぐだらなにからこらなに

一蹴された。

ダジャレってくだらなにシャレって意味なのにあんまりだ……

「おひとさん、リリーがきいてあげるよ」

「リ、リリー……じゃあ、聞いてください。おっさんのセクハラダ
ジャレシリーズN.O.・1、クラベジーナの胸とメロンを比べちゃう
な～」

さつき思いついのとは違つたけど、ずっと温めてたんだ。

シリーズは現在3までしかないけどね。

「おーいおーい

手をパチパチ叩きながらリリーが褒めたたえてくれる。

おっさんも気分がいいです。

だが逆の気分になる方もいらっしゃるわけで……

「豚、その口をじぱりと閉じていないとシバくわよ？」

「正直、本人目の前に立つとか自殺志願者かと疑うレベルのダジャ
レですよ。田那、あなたのハートの強さ半端ないです」

たかが冗句で殺されちゃうの？

あ、でも一回冗句言うために殺されそうになつた経験あつたな。
あれがアイリスとの出会いのきっかけだつて？
シャレのわからん奴が多い世界だな。

「やひいえば、旦那つて木と会話出来るつてほんとの話なんですか

？」

「ん

ジーナの言い付けに従い、口を開きはしないが肯定の意を示すために頷いておく。

「へー、どんな感じなんですか？」

「んんん、んんー」

「なんて？」

「喋つていいぞ」

ジーナからのお許しがでた。

これで心置きなく語れるつてなもんよ。

「わりと普通

だが、語るべきものが無いのが寂しいところだね。

「普通つてのは？」

「木もそれぞれ自我があつて個性もある。つこでに性感帶みたいな
ところもね。そういう意味で普通

「くえ、やうなんですか」

そうなんです。

「本当に会話してみたいなど」と驚いた。ずっとお前の脳内設定だと思つてたからな……」

ジーナさん?

すうじい失礼な発言ですよ。

「おどーさんはおどもだちがこっぽいなんだね」「友達……」

一緒に酒飲んだわけじゃないんだけど……うん、そういうて差し支えないかもな。

特にミズドリウムの大樹は……ってそうだ!?

「ジーナ、おつさんタファンの森に行きたいんだけど?」「タファンの森?」

「そこつてヒルフの連中のねぐらじやないですか?」

「なぜだ?」

「友達との約束だからね」

この世界に来たおつさんを導いてくれた存在でもある。

「でも、ヒルフって自分達が人の中で一番偉いって思つてる鼻持ちならない奴らですよ?」

「なんだ。でも、約束は約束だし」

「……約束、か。わかつたタファンの森に行こひ」

「姐さん?」

「約束は守らなければいけないからな……」

ジーナはおつさんではなく、リリーを見つめながら言ひ。

いや、リリーを通して誰かを見ている。そんな感じがした。

「わかりました。それなら西の町に行つた方がいいですね」

「どんな町なんだ？」

「なんてことない町ですよ。そこそこ栄えていますけど、王都とかの大都市に比べれば一枚も一枚も劣ります」

へえー、王都。

つまりはここはなんとか王国つてことか。

ん？ でも確かに大樹はプリなんぢやら公国つて言つてなかつたっけか？

その辺聞いてみよつと。

「王都つてさつとき言つたけど、ここつて王国なの？」

「今さら何を当たり前のことを聞いてるんですか？」

「知らないもんは知らないんだから仕方ないじやん」

馬鹿にしやがつて。

「ちとら異世界からきとんのじやい！」

まあ、実際そんなに頭良くなーけどな。

「一年前に戦争があつてな。それまではこいら一帯はプリオニ公国といつ歴史ある国だつたんだが、公国の隣の小国であつたオリヘン王国にその戦争で負けてしまい、併合されたんだ」

ジーナがわかりやすく説明してくれた。

それにしても戦争か。

どこにでもあるんだな。

「オリヘンには英雄がいますからね」

「英雄？」

「ああ、魔王を討伐した英雄だ」

勇者様つて奴？

ファンタジーの定番だよね。

やっぱ勇者の鎧とか勇者の剣とか装備して、魔王の前に立った時「我に付けば世界の半分をやろう」とか言われたんかな？

一度会つて是非ともそこら辺りを聞いてみたいものだ。

「ま、王国の話や英雄の話はまた今度にしましょ。それよりも西の町の続きを……と言つても言つべきことは言つた気がしますし、あとは……酒造が盛んで特に焼酎がうまいってくらいですかね」

「行こう。すぐ行こう。ああ、酒がおっさんを呼んでるよ」

おっさんの中で王国とか英雄の話がぶつ飛んだ。
酒。

なんて甘美な響きなんだ。

ジーナ達と過ごすようになつてから意図せぬ禁酒を強いられていたおっさんとしては心が躍る。

とつあえずアルコールを摂取したいと体が疼いてきやがるぜ。

「さけつてなーに？」

「大人にとつての命の水みたいなものだよ。リリーがもう少し大きくなつたら本格的に教えてあげるよ」

まだ早い。

お酒は二十歳を過ぎてから。

ま、大体の奴らがその前に親戚とか親に飲まされるんだけどね。

おっさんもお酒ヴァージンは十四歳の時に親戚に奪われた。

以来、父親の目を盗んでは冷蔵庫に常備されてるビールをいただい

たものだ。

「 さあ、ジーナ。移動しよう。」

「 なんかお前が喜んでるのを見ると行きたくなくなっちゃうな」

そんなサジツ気を今出さんでもいいのに……

いつもだつたら」褒美として受け止める」事ができるが、今回ばかりは純粹な苦行になつてしまつ。

「[冗談だ。ちゃんと西の町に行くよ。あ、勘違いするなよ? 別にお前を喜ばせるためではないからな。まあ、お前に約束を守らせるためにひとつお前の為になつやつやつナビ……」

冗談は冗談っぽく言つてほし。」

マジのトーンの「冗談とか恐ろしいな。

まあ、とにかく酒だ酒。

我慢してた分、たくさん飲もう。

再び絨毯が浮かび上がり、西へと進路をとつて進む。
目指すは西の町だ。

ちなみにあつやんの所持金ゼロなり

ねつねつ、行き先を決める（後書き）

活動報告においてクリスマスネタの短編を掲載しているので、興味があればどうぞ
本編にはあまり関係ありません。

おっさん、金を使ひ

程なくしておっさん達は町へと辿り着いた。

未だ上空に浮かぶ絨毯から町を見下ろせば町並みがよく見えた。木造や石を切り出して造ったような建物が整然と並び、その間を舗装された道が通っている。

幅の広い道では何やらゴーカートのような乗り物や馬などが走つており、そうでない狭い通りの両端には露店が軒を連ね、行き交う人達は喧騒に包まれている。

『ルタオ』

それがこの町の名前だ。

おっさんがルタオの町を珍しげに見ているのと同様にルタオの人々もおっさん達の乗る魔動式浮遊絨毯を物珍しげに見上げていた。

見られてる。おっさん、超見られてる。

とゆーことでこちらを見る人達に手を振つてみると、何人かは振り返してくれた。

旅人に優しいな。

どつかのアイリスにもこの優しさを分けてあげて欲しいよ。

ただ、動物の仮装してる人がそれなりにいるのはなぜだろ？
今流行りの恰好なのだろうか。

気になるので聞いてみた。

その答えは単純明快、なんてことのないもの。

つまりは……

「あれが獣人……」

「なんで知らないんですか。つーかクピンの曰那で獣人は一回見てるでしょ」

「かわいいマスクだと思ってたんだ……」

「いや、獣人なので生まれた時からあんな顔のはずですよ」

な、なんてこつた……

おっさんの中で獣人とゆーのは、バーニガールみたいな頭に動物耳のある人間だと思ってたのにまんま獣な頭してんのか。

いや、待て。

おっさんが見たのは男の獣人だけだ。

種族的な違いで女はバーニガールかも知れない。

聞け、聞いてみるんだおっさん。

その扉を開くんだ。

と、その時おっさんの視界の端にスカートを履いた巨乳の姿がひっかかった。

スタイルのいい女性を見るとつい見てしまうのは男の性、首ごと視線を持っていつてその女性の姿を捉えた。

……顔が牛だつた。

あれがホンマモンのホルスタイン。

おっさんはムツ○ロウジやないから、彼女の顔を見た瞬間に股間がED宣言してるよ。

まあ、でも顔さえ見なきや眼福もんだな。
あの乳には百点を付けてあげよ。

「降りるぞ」

ジーナはそう言つと適度に拓けた場所に絨毯を着陸させた。

「着いた着いた」

「まずは宿を探そう。ほら、お前はこれを持って」

リュックを渡される。

相変わらず重いので、剛力のスキルを発動させながら背負い込む。あとに残った絨毯はジーナが丸めて口をボソボソと動かすとみるみる内に小さくなつていった。

あれが物体を小さくする魔法か。
なんでもありだな。

そしてジーナはボールペンくらいにまで小さくなつたそれをリュックに括り付けた。

「おっさんは温泉付きの宿希望です」

「そんなもん高級旅館でもなきやありませんよ」

「ならばそこに行こう。温泉は私も好きだからな」

ジーナの鶴の一聲の決定で宿は温泉付きの高級旅館になつた。

道行く人にそういう宿があるかどうかを聞いた上で、たどり着いたのは厳かな外觀のまさに老舗と言うに相應しい木造の和風な建物。庭もまた和を感じる作りで、剪定された松っぽい木や小石が敷き詰められており、庭の真ん中には小さな池まである。

「いらっしゃいませ。」宿泊ですか？」

旅館の中に入ると、着物姿の女将らしき人物が出迎えてくるた。青い髪を女将スタイルに束ねあげた人間でうなじが覗いているのが

妙に色つペーな、オイ。

「ええ、」の子と私の一人でお願い」

こんな美人な女将に酌をされながら飲む酒は格別だらうな。

……あれ？

「ちよ、ジーナ？ おつさんば？」

「おれもっす」

なんか普通に除外されちゃったよ？

女将に気を取られて危うくスルーするとこだつた。

「お前らは別口で泊まれ。どうせ払いは別なんだ」

「あ、そう言わなければそうですね」

ザラはジーナの言葉に納得したように頷く。

しかし、おつさんはその言葉に戦慄したように固まる」としか出来なかつた。

なぜなら、おつさんは無一文だからね！

今まで金なんて使つたことないから金の存在を忘れてたよ。

村で暮らしてた頃は奢つてもらつてばっかだつたし、働きはしたが報酬は直接渡されるわけではなく、おつさんに日々の食事を出すことでいつの間にか話がついていた。

そう、おつさんばの宿に泊まれない所か駄菓子すらも買えないのだ。

「……旦那？」

「どうした？」

「おとーさん、どうしたの？」

固まつたまま動かないおっさんを訝しんでそれぞれが声をかけてくれる。

ここは正直に話すしかない。

「お金がありません！」

ないもんはない。

だから

「貸して下さい」

土下座して頼む。

プライド？

そんなもんはない。

なぜならオッサンとは大体が半分は惨めで出来てる存在だからさ。

「ふう、さっきのは訂正だ。宿泊は三人で頼む。部屋は二つで」「はい、かしこまりました」

ジーナの言葉に女将が傳ぐ。

「ジ、ジーナ……」

「野宿させるわけにもいかないからな。それにお前がいないとリリーが寂しがる」

「あ、ああ……リリー、一緒に温泉に入らうね」

「うん」

「是非ともおれも」一緒にさせて下さい」

「……やっぱ止めといつ。リリーはお母さんと一緒に入りなさい」

「賢明だな。私もせつかくの温泉を赤く染めたくない。それと、ほら」

ジーナがおっさんの手に何かを握らせる。

手の平を開いて見れば、そこにあるのは五枚の銀色のコイン。なんかよくわからん人物の肖像が刻まれている。

「とりあえず貸しだ。まつたく持つてないのも不便だらうからな」

「あ、あざーす」

「姐さん優しー」

「あげたんじゃなくて貸したんだ。利息は付けないから必ず返せ」

これが世のお父さん方が嫁さんにもらつお小遣いなるものか……まあ、おっさんの場合は正確に言えば借金なんだがな。

とりあえず部屋に行き、荷物を置いてひとつ風呂入ったあと、おっさんは一人で町へと繰り出した。

なぜならこれから向かうのは大人の社交場。

お酒を飲みに行くからだ。

旅館においても夕食と一緒に飲めるのだろうが、早く飲みたいとゆーことで町に出たのだ。

ジーナはリリーさえいれば特に不満は出ないので面倒を見るのは任せてきた。

リリーは温泉が気に入つたらしく、早くも一回田をジーナに所望してたから大丈夫だろう。

ザラに関しては父親と一緒に男湯に入ってきた他の幼女に夢中で、

股間を押さえだしたので誘いもしなかった。

それにしても、浴場に入ったときの他の客のおっさんに対する視線の痛々しさつたらないな。

なんかすっげー奇異の視線で見てくるんだもん。原因はわかってる。

それはおっさんの姿だ。

一見すれば鎧と兜を着用しているようしか見えないおっさんの姿は「鎧脱いで来いよ」とでも言いたくなつたに違いない。実際、ザラには面と向かつて言われたのだが、どうしようもないことなので仕方ない。

その場は体の一部だからと強引かつただの真実で押し通した。ある意味不便な体である。

セツノハシヒーいる内に歓楽街へと辿り着いた。

提灯やら看板やらといかにもな酒の香りのする場所がそこらかしこに存在する。

だが、残念なことにそこ元書いてある文字は一部を除いて判読できない。

ここは異世界。

そういう事もある。
しかしながら

「なぜ漢字が存在する?」

判読できる一部とは漢字で書かれた部分。

酒や呑といったわかりやすい文字が存在するのだ。

しかし、確かに異世界のような外国のようなくわからぬ文字もある。

それはハングルのようなアルファベットのよつなギリシャ文字のよ

うなよくわからないもの。基本的にや、で構成されているものが多く見られる。

これらはおそらく日本語でいう平仮名とかの役割だと推測する。まあ、大して興味もないし異郷の地においても文字が大体の意図がわかるのは僥倖という他ない。

とりあえずはどこかいい店はないかと物色することにする。

通りをただブラブラ歩いているだけでもすぐ楽しい。

頭が色んな動物の人々がたくさんいるし、背が腰くらいまでしかないずんぐりむつくりな体形の鬱モジヤ男もそこそこいる。これがおそらくドワーフではないだろうか。

同じような体形の女性も存在しており、こちらは鬱などは生えていないだけで少し背の低い人間の女性とあまり見分けがつかなそうなものなのだが、なぜか知らんがドワーフだと認識できる。この感覚は同じアジア人でも日本人と韓国・中国人の見分けがなんとなくつく感じと似ている。

驚きだったのは人の頭の部分に青魚を乗せたような人物が数歩歩くごとに頭に水をぶつかけていた光景だろうか。多分魚人だろう。道行く人を観察するだけでも時間を忘れてしまいそうだ。

だが、おっさんの目的はあくまで酒。
それ以外には……

と決意を固めて適当な店に入ろうとしたおっさんの瞳に映つたある文字が思考をせき止める。
その文字とは

『賭』

一際喧騒に包まれた豪奢な佇まいのその建物に見つけた文字に心が

奪われる。

おそらくあそこは賭場。

どんな賭け事なのかは知らんが、とにかくギャンブルの場だ。

おっさんつてばパチンコとか競馬大好きなのよー。

あの文字見たら行くしかなくない?

あ、でもジーナから借りた金をギャンブルに注ぎ込むのはさすがにアウトだろ。
でも行きたいなー……。

うし、行こつ。

ギャンブルだつとなんだつと最終的には勝つてしまえばいい話。
そうすりや持ち金も増やせてジーナへも速攻で金を返せる。
いいことぬくしだ。

今日のおっさんに負けるビジョンは見えない。
むしろ一獲千金でウハウハしながらジーナやリリーにプレゼントを
渡すビジョンが見えるぜい。

あと、風俗にも行きたいな。

温泉も良かつたけど時間制限ありの高級なお風呂も大好きですから。

そんなこんなおっさんは意氣揚々と店に突撃して行へのだつた……

（数十分後）

「まあかこなことになるとは……。いや、ある意味予定調和か……」

……

結果的に負けた。

完璧に負けた。

あそこで赤が出てれば……

おっさんのが挑んだのはラスベガスでお馴染みのルーレットに似たゲーム。

細かいことは違うかもしけんが玉を転がして入った数字の所在を当てるということと自体は同じ。

堅実にいじうと色と偶数・奇数にのみ賭けたのだが、見事に外れた。手元にあるは自制心を効かせて残しておいた銀色の硬貨ただ一枚のみ。

ジーナから借りた金の五分の四を早くも失ったという結果である。何してんだおっさんは……

一時間くらい前に戻つて過去の自分を殴りたい。

ま、過去を悔やんでもどうにもならん。貯金したとでも思つていつかりベンジ決めて引き下ろしてやるぜ！

とりあえず当初の目的を果たそう。とは言つても店で飲むとどんなくらいかかるか皆田見当もつかないので、酒屋でも見つけてやつすい酒でも買って旅館でチビチビと飲むか。

酒屋を探してまた通りを歩く。

そしてある程度歩いたところで今度はまた違う店に視線を釘付けにされてしまった。

そこは女子供が喜びそうなファンシーな小物やら何やらが置いてある店。

そこからでも見えるよつてイスプレイされたぬいぐるみに視線を固定された。

犬なのか猫なのか熊なのかよくわからんキャラクターのぬいぐるみだが、普通に可愛いんだよ。

リリー「プレゼントしてやつたら喜ぶだりつなー。

でも、酒の金が……

悩むじやつなー。

一時の悦楽か、リリーの喜ぶ顔か。

言葉にしてみれば簡単に決着がつきそうな物だが、酒が好きなおつさんとしては拮抗するものがある。

だが、ギャンブルで金を使って残りは酒。

随分なダメ人間だよなー。

よしわかつた。

ぬいぐるみを買おうではないか。

リリー「あつと喜ぶやー。

「すいません、ちょっと足りないみたいですね」

「あ、そうですか……」

はい、問題発生。

ギャンブルで金を使い過ぎたせいぬいぐるみが買えません。

つーか高いよ。

カジノで知ったけど、この銀硬貨一枚で一万円くらいの価値あんただぞ？

確かにこのぬいぐるみは下手なドワーフくらにでかいけどわあ……

でも、銀硬貨一枚で買えるみたいだし、望みをかけてもつ一度、ギャンブルしてみるか？

いやいや、なんか負けそうな気がする。

他のを買つて手もあるけど、第一印象から決めてたからな……

よし、だつたら金を稼ごうじゃないか。

でも真つ当に探しでもすぐに金をもらえる仕事なんてないからな。

こにはストリートミュージシャン風に歌で稼ごう。

元の世界の名曲でも歌つてやれば、感動を巻き起こして一大ムーブメントになっちゃうかもな。

……あ、ダメだこれ。おっさん楽器弾けないもん。アカペラで勝負できるほど歌唱力に自信もないから却下だな。

んー……でもストリート系の思考は悪くないかもな。

あとは大道芸か。

でも特質すべき芸なんてないな。

強いて言えば昆虫形態インセクトフォーメしてクワガタになれるくらい?

だけどそれがどうしたって言われたらそれでおしまいだな。

いつそのこと、当たり屋でもするか?

なんか楽に稼げそうな気が……そうだ! それだよ。

これこそ趣味と実益を兼ねた格好な商売だ。

早速準備をしよう。

おっさんはこの店で揃えることができるものを購入し、ぬいぐるみに予約を入れると残りの材料を購入するために店の外へと飛び出した。

ヒューわけで準備が完了した。

おっさんが残り一枚の硬貨を使って購入したのは紙とペンと砂時計。

そしてグローブ。

これだけで十分である。

紙には通行人を使ってこいつ記してもらつた。

『 女性限定 疎られ屋

砂時計の砂が落ちきるまで殴りたい放題

一回 お値段要相談

』

さあ、お仕事の時間だぜ

おひせで、金を使づ（後書き）

主人公に関してはろくな金の使い道が思い浮かびませんでした。
つーかこの世界、人種どころか文化もサラダボール状態。
あんまり深くは突っ込まんといて下さい。

多分これが今年最後の投稿ですかね。
では、よいお年を～

ねつぜん 失敗する（前書き）

あけましておめでとうございます。

おひさん、失敗する

年を取つて中年くらいになつた時に開かれる同窓会なんかでよく「仕事何してんの?」とか「仕事は順調か?」とか聞かれることがある。

常々思うのだが、その問いの答えが「いや、仕事しないから……」とか「リストラされそなんだ……」みたいな言葉の後に点々が付きそうな暗いものだつたらどう答えるつもりなのだろう。ぶつちやけ、「あの先生がぶちギレた時は全然怖くなくて逆に笑い出しそうになつた」的な過去を懐かしんで楽しくお喋りするだけで十分じやん。

人は触れられたくないことを誰かしら持つてるものなんだ。

そひ、今のおひさんのよう

仕事をはじめてから早数時間が経とつとしていた。

それなのにだ!

それなのにも関わらず……

全つ然寄こねーよ!

むしろこっち見てヒソヒソ知り合いみたいな人達と話し合つてるんですけど!

なに? そんな変な目で見られるような商売なわけ?

女性の視線はまだいい。

まだいい、というかむしろもつとその視線で見てくれと思う。

だが野郎にそんな蔑まれた視線で見られるのは不愉快だ。

プラスマイナスで考えてマイナスに天秤が傾くくらいに不愉快だ。

「見てんじやねーよ

客が来ないイライラと不愉快な視線に晒されるイライラの相乗効果でおっさんの口から尖った言葉が発せられる。もちろん睨みつけるような視線もセットだ。

だが、所詮はおっさんから発せられたもの。

威厳とか淒味がないのか視線はマイナス方向に強まってしまった。

「くそつ、どいつもこいつも社会の底辺を見るような目をしやがつて……同情するなら金をプリーズ」

場に静寂が訪れる。

どうやら盛大に外したようだ。

心なしか視線が変人を見るようなものから可哀相な人を見るようなものに変わった気がする。

「皆さん聞いてください。おっさん、子供にぬいぐるみを買ってあげたいんです。だからお客さんいらっしゃいな」

「……なあ、あんた」

「なに?」

話し掛けってきたのは頭が鼠の男。

鼠と言つてもミッ〇ーみたいな可愛らしいもんではなく、灰色の毛の生えたリアルな鼠だ。

「子供にプレゼントしたいなら真面目に職を探しなよ。こんな事で稼いだ金でプレゼントされても子供は喜ばないよ。あと、ちゃんとした服着な」

すつげー真面目なトーンで諭された。

え……もしかしておっさん、説教されてる?

それも鼠にか？

ちよつと悲しくなつた。

「これやるからまでは身なりを整えな」

鼠はそういつておひさんに銀硬貨を一枚渡すと颯爽と去つていつた。
なぜだかその背中にキコンときた。

説教はウザかつたけど、渋いなあいつ……

「兄ちゃん、俺からも餞別だ」

「オレも」

「ボクからも」

「あたしも……」

鼠男を皮切りに続々と寄附が募る。
早くも目標金額を超えてしまつた。

でも、なんか納得いかない。

完全に施されてるじやん。

これはありがたく貰つとくけど、この金でリリーのプレゼントは買
えないだろ。

例えどんな恥辱に塗れてもおひさんが体を張つて稼いだ金で買った
方が募金された金で買うよりいいに決まつてゐる。

この募金はありがたくお酒を買つのに使わせてもらひや。

とにかく、ここでは客が来そつにない。
ならば場所を移動するしかあるまい。

だが、どこに行けばいいのやら……

そうだ！ もつと卑猥な香りのする場所でやうやく。

と言つたとで、場所をストレスと欲望渦巻くピンク色の世界に移し

た。

そこは赤やピンクのネオンが煌めく大人の遊園地のある通り。バラエティに富んだ卑猥な看板があちこちにあるよ。なんだあの『棒険王』って……

どこを探索するんですか？

もしかしてさくらんぼを探しに登山したり、縮れた森から栗の木や水場でも探すんですか？

そんな探検なら是非ともしてみたいじゃないか！

此処こそがおっさんのあるべき場所ではなかろうか。

「お兄さんちよつと寄つていきませんか？」

感慨に耽つていると、ピンク色の法被姿の男がどでかい看板を掲げて声をかけてくる。

この人はおそらく密引きだらう。

頭髪がちょつとばかりバーード調だが、至つてノーマルな中年のオッサンである。

なんか親近感が湧くなー。

いや、おっさんは虫人ムシヒトになる前からフツサフツサだったけどね。

……さすがに言い過ぎた感があるな。でも丘髪はあつたけど禿げとはいなかつたんだからね！

それにも看板に書かれた『女医』ってなんて書いてんだ？ 気になるじゃねーか。

「間に合つてるんで……」

だが、おっさんは中年の密引きに対し丁寧に断りを入れる。気にはなるが金がねーから致し方ない。

「そんなこと言わないでよ。若くて可愛い娘いるよ~」

「女性に過度の若さは求めてないんで……」

「なに、お兄さん熟女好き?」

若さを求めてないと熟女好きをイコールで結ばないで欲しい。

確かに嫌いではないけど、一番好きなゾーンは三十前後だからね。

あの微妙な若さと熟した感じが入り混じったようなのが堪らん。

「うーん、うちは最高で三十五歳くらいまでの娘しかいないんだよね~。熟女好きじゃ、まだカウントされてないよね?」

ドストライクだよバカヤロー。

「でも熟女好きだつたらうちの系列の『完熟 デリケート俱乐部』にならお兄さんのお眼鏡に叶う娘がいるかもね」

猛烈にその俱乐部に入部したい……

「ちなみにあなたの持つてる看板のお店はどーじ?」

「うん? ああ、それならあそこだよ」

密引きが指し示した先にあつたのは一見すれば隠れ家的なレストランでもしてそうな洋風の建物。

だが、でかでかと『女医』の看板が立てられているためにそんな勘違いをする奴はいない。

やっぱりあの店名が気になつて仕方ない。

「ちなみにあればなんて読むのかな?」

好奇心に抗えず聞いていました。

「お、興味持つちゃった？ ま、漢字で書かれてちゃ読めないのも仕方ないね。あれはね、女医って読むんだ」

「いや、女医は読めるんだよ。その後が気になんの」

「え？ 漢字が読めてグレンツュ文字が読めないって変わってんねー。つーかそんな人初めて会ったよ」

「ほー、あの文字はグレンツュ文字っていうのか。

「そんなんに変わってる？」

「漢字はここ二、三年で爆発的に広まつた文字だからほとんどの奴は読めるけど、読めない人はまだ珍しくない。でもグレンツュ文字はずっと昔から使われてるだろ。どっちも読めないなら文字の学習の必要のない田舎から来たってことで説明がつくからまだしも、漢字だけ読めるのは変だろ」

まあ、言われてみるとおかしいかな？

おっさん的な見解を示すと普通の日本語は読めないのに、ギャル文字は読めるみたいなことかいな。

……なんか頭悪そうな女子高生にしそうだな。

うん、おかしくない。

たまたまこの寄引きが初めて出合つたのがおっさんだつただけだ。その「つか」の寄引きもおっさんのような存在に出合つはず。

「おっさんの勉強が偏つてただけだつて。んで、なんて読むの？」

「ありやあ、女医フルつて読むんだ」

「ヨウフル」と女医を掛けたんか。

すつしへく楽しめそうな店名じやないか。

「ちなみに女医フルのフルはフル○ンのフルね
「なるほど、泌尿器科なわけね」

自分で言つといてなんだが、なにがなるほどなんだろう。

「ある意味間違つちやいませんよ」

どういう意味かは推して知るべしである。

「診察でカテーテル入れられたり、直腸検査されたりするんだろうなー」

「それはオプションで別料金になりますね。で、どうですか？ 寄つてきましょ」

別料金と聞いて、金がない」と再び思い出した。
つーかりリーへのプレゼント買つための仕事をするためここに来
たんだつた。

「金がないからまた今度ね

「あ、そうですか」

金がないって言つたら密引きの野郎、速攻で別の奴の所に行きやが
つた。

寂しいねー。

もづ少し粘つてくれてもいいじゃんか。

まあいい。

おっさんはおっさんで商売を始めをせてもうらう。

「殴られ屋でーす。溜まつたストレスを人を殴ることで解消。鬱憤

の溜まつた女性は寄つてらつしゃい見てらつしゃい。時間は砂時計の砂が落ちきるまで。値段は応相談「

声を張り上げて宣伝する。

その声量はそこいらに徘徊する密引きなんかにや負けやしない。

現に道行く人達は皆おっさんに注目してくる。

「ちよつとちよつと、お兄さん… こきなり何? 営業妨害だよ…！」

なんかわつきの密引きが来やがつた。
そちらいじや営業妨害だと言いたい。

「おっさん、商売はじめたんだ」

「商売はじめるのは結構だけど別のどいやつじよ」

邪魔者扱いか。

確かにおっさんの存在は彼のことつては邪魔かもしけない。だが、
譲れないこともある。

「おっさんも切実なんだよ……」

「はつきり言うけど、邪魔なんだよ」

「役人でもないくせに偉そудан」

「なんだその態度は? ここは俺のトリトリーだつて言つてるだけだ。商売すんなら余所でやれ」

急に高圧的になりやがつた。

ドスの効いた声がえらく様になつてゐるじやないか。
ま、ジーナの方が怖いからおっさんには全然効果はないけどね。

「よし、やじまでも黙つたり」れをやるから黙認してくれ

そつ言つておつたのは密引きの中年に先ほど貰つた金から一部を取り出して握らせる。
びつせい道は酒でしかない金なのだから惜しくはない。

「……賄賂かよ」

「そつです。賄賂です」

「あんた、汚い大人だなー」

「争いを回避するための紳士的な対応でしょうが。で、ついでに協力してくんない?」

わらに金を握らせる。

「あん? 協力つて?」

「知り合この女の子におわんの」と紹介してよ

「……まあ、もう少しで店に勤めてる早番の娘も上がる時間だから声掛けてやつてもいいが、これじゃ足りねえな」

もつと寄越せと催促してくる密引きの男。

結構がめつにな。

ま、いいけど。

そう思つて更に金を握らせた。

「くく、毎度」

「ちゃんとやれよ

「わかつてゐよ」

ホントにわかつてんのかねー?

つて今気付いたけど、あの金で女医フルに行つとけば良かつた!?

なにほともあれ、おっさんの仕事に対するパートナーが出来ました。

おひやご、失敗する（後書き）

新年一発目の内容がこんなでいいません。
次話は本日の夜か明日辺りに投稿する予定です。

ねつぞく、更に失敗する（前書き）

タグにもあるのド！」了承済みとは思いますが、あえて警笛を……
この話には『変態』が含まれております。ご注意下さい。

ねつねつ、更に失敗する

あの密引きに助力を求めたのは正解と言えるだらけ。
なぜならば

「あのー、ポロトさんに紹介されて来たんですけど……」

早速客が来たからだ。

最初の客は顔が猫、体は女体なお方。
紛れもなく女性である。

ポロトっていうのはおそらくあの密引きで間違いない。
だっておっさんを紹介してくれる人なんてあいつしかいないからね。
うまくやつてくれたみたいだ。

「こひりしゃこませー。どうも殴られ屋です。殴りしたの、辛いことあつたの？」

「はいにや、今日のお客さんがすつじに脳ざつててそのくせに××
×しきりひて言つてきて……もうホンシトにムカついたのこー」

ああ、そいつは辛い。
ムカつくるもしょうがない。

そんなこと要求するのは最早嫌がりセレベルだね。

とゆーか語尾にこやとか付くと癪されるな。これで顔がリアル猫じ
やなかつたらなあ……

「よし、ならばその鬱憤をぬつとこぶつけなさい。はい、このグ
ローブ着けて。そんで砂時計ひつくり返したらスタートね」

「はーにゅ

猫女がグローブを装着したのを確認して砂時計をひっくり返す。
「あ、初仕事の時間だ。

「こべにゃー ていつー」

「おうつ

なかなかいいパンチ持つてるじゃねーか。
顎にクリーンヒットだ。

「こべにゃー こべにゃー こべにゃー つー」

「ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ

連續パンチとは恐れ入った。
中々速いな。

「ふにゃつー

「お

強烈なボディフックが鳩尾に入る。
こいつは効いた。

「…………あの、ちょっとタイムお願ひしますにゃ

「どうした、もっと来いよー！」

「いえ、あの…………つまんないこ

猫女は凄く冷めた声で意外なことを述べた。

「どーが？」

当然、彼女の態度が急変したことは疑問である。

それに意見を参考にして悪い所を改善していくのも仕事の一つである。

「えっと……」

「言い濶むことはないから、忌憚なき意見を言ひてくれ」

「そうですかにゃ、じゃあ遠慮なく言わせてもらひにゃ。まぢ……
グローブが安物すぎなのかしんないけど手が痛い。あと、あなたの
リアクションが薄くて全然スカッとしない。とりあえず、兜と鎧は
脱ぎなわこよ」

語尾のにやはどこにいつたんだ猫女つ。

まあ、それはこの際いい。

問題は猫女からあげられた意見をどうするかだ。

とりあえず格好はどうにもならない。おっさんだつてキャストオフ
出来るならしたい。

グローブに関して金がなかつたんだから仕方ないよね。
どうひつ出来る問題じゃない。

では、おっさんのリアクションが薄いつてのはどうだらうか。
もちろん痛みはあるからおっさんも痛がつたりとかそれなりのリア
クションはしてる。

でも、衝撃無効のスキルのせいで殴られても微動だにしない。
要は発声する丸太人形を殴つてるようなもんか。
確かにこれじや面白くないかもしんない。

ならば演技するか？

でも、殴られたタイミングに合わせてのけ反つたりするには功夫が
足りない。

付け焼き刃じやどうひつなるもんでもあるまい。

何か妙案はないものか……

「やうだ！ そうだよ……顔と腹を殴つても面白くなにならケツを攻撃すればいいじゃない」

なんて名案なんだ！

おっさんはもしかしたら天才じゃないのか？

おっさんの身体で最も柔らかい部位の一つに数えられるもの、それが尻。

しかも尻ならば攻撃されてのけ反るなどのコアクションが薄くてもそんなに不自然じゃない。

「いや、お尻をぶつ叩くとかやつこいつプレイはなしでお願いしますいや。どうしてもお尻を叩いてして欲しかったらお店に来て下さいいや」

いやが戻った。

つかプレイじゃないし。

ただの天才的発想なだけだし。

「ケツをペンペんされるプレイならおっさんもお金払つてやつてもらつよ。だけここれは仕事。おっさんが提案するのは尻を氣の向くまま感情のままにとにかく好きなように蹴りなさいこと。あ、でも鞭とかあつた方がいいのかな？」

アイディアが次々と湧き出していく。

覚醒したな……

おっさん、覚醒しちゃったよ。

「やういう激しいプレイがしたいならちよつと裏に行つたとこハーデルMのお店があるこいや」

「だからプレイじゃないっての。わざわざもったよつておっさんも

本気で責められたい時はツボのわかつてる女王様のいるお店に行くから！ だけど世の中にはそういう気質を表に出せないで溜め込んでやつ女性がいる。おっさんはそういう女性の心を満たすためにこの仕事をはじめたんだ」「

取つて付けた様な言葉。

実際はただ女人の人に殴られたついでにお金も稼げて一挙両得だと思つたに過ぎない。

「あなたの気持ちはわかつたにゃ」「

だが、口先だけの言葉を猫女は信じてくれたようだ。

「ならおっさん、四つん這いになつてケツを突き出すから思いつきりやつてくれ」「

砂時計の砂が落ちきつたのを確認し、ひつくり返す。

さあ、今度こそ初仕事だ。

「てりやつ」「はうつ

全力の蹴りがおっさんのケツに叩き込まれる。

衝撃は露ほどないが、痛みは本物。

その痛みを受けて背中が自然とのけ反る。

こいつはいい。

おっさんのリアクションも意図せずして元壁ではなかりつか。

その後も時間制限いっぱいまでおっさんの尻を蹴り、踏み付けた猫女は満足した様子で僅かばかりの金を払つて去つていった。

ありがとう猫女。

君のおかげでおっさんは一つ上のステージに到達したよ。

その後にも客は疎らではあるが訪れてくれて、彼女達の満足度に応じた金銭を払ってくれた。

おっさんも調子に乗つて近くのおもちゃ屋で鞭を購入してしまった。鞭の形状は乗馬鞭といわれる馬を追い立てる際に使用される物で、打撃が重いことで有名である。

これを使用した際の客の反応は何かに田覚めたように頬を上気させ、一心不乱に鞭を打つてくれるという大変満足した……じゃなくて、満足してくれた様子だった。

延べ十数人を相手にした結果、田標金額に届いた頃には田はとっぷりと暮れてしまっていた。

「そろそろ店じまいするか」

結構痛め付けられたというのにおっさんはまだまだ元気なのだが、あまり遅くなつては飯を食いつぱぐれそうだし、何よりリリーが生まれてからこれだけ長い時間離れてることもなかつたので心配だ。

「あの、まだやりますか？」

そんなことを考えながら、店じまいの支度をしていると声をかけられた。

そちらを見てみれば、長い黒髪の幸薄そうな人間の女性がおっさんをみつめていた。

その女性は幸が薄そなだけではなく身体付きも色々薄かつたが、仕事に関しては好みだなんだと選んでる余裕などないために訪れた女性は貧乳だらうと口り顔だらうと等しく接してきた。

彼女でも何一つ問題はない。

「滑り込みヤーフ。ちよつと舐めていたんだけどね
「すいません……」

「いやいや、ヤーフだから問題ないですよ。本日最後のお客さんだ
ね。よし、じゃあこの鞭でおつさんをぶつかおもつくそ蹴ってね。
わあ、来い」

砂時計をひっくり返して四つん這いにならとヒュド気合こを込めて言ひ。

「い、こきまよ……」

女性が怖ず怖ずと出陣前の声掛けをしてくる。
声が弱々しいな。じりや、期待できないかもね。

「はあっー」

「○ ×ーー！」

だが、おつさんは身体を貫いた今までにない痛みに悶え苦しむ」と
になつた。

衝撃無効なはずなのに内臓に衝撃がきたよ！

何が起こったのか説明しよ。

女性が蹴つたのはおつさんの尻の穴。
いわゆるア○ルだ。

しかも、トウーキック（つま先で蹴る）と的確におつさんの尻

の割れ目の中にある秘境に当ってきた。

今までのお客さんだつてそこいら辺は配慮して尻の面に対する攻撃しかしてこなつたのに……

さすがにこれを快楽へと変換するのは時間がかかる。

「だ、大丈夫ですか？」

「も、モーマンタイ無問題。でも、出来れば回復するまでは違つとこ蹴つて

「は、はい」

深呼吸をして呼吸を整える。

とりあえず肛門活約筋を引き締めて第一撃に備えよう。

「バツチコイ」

「い、いきますよー」

この弱々しい声に騙されてはいけない。
腹に力を込めてケツも固くした。

これで準備はオッケーだ。

いつでも来やがれ。

「えいっ」

繰り出される女性の蹴り。

その蹴りは先ほどとコースは同じ。
しかし、その軌道は少しだけ下方で

「ぬあっ」

それつきり言葉を発することが出来なくなる。
この女アマ、結婚式の挨拶でもよく使われる大切な袋の一つであるキャ

ンタマ袋を蹴りやがった。

しかも相変わらずのトウーキック。

あえてどんな痛みかは語らないが、とりあえず下つ腹が痛い。

【ラルドは打撃耐性のスキルを得た】

天の声うるせーよ。

つーかおせーよ。

もつおつさんのキャントマは手遅れだよ。

あ、やばい……意識が遠のいてきた……

「…………ません…………ですか」

女性が何かしらおつさんに声をかけている。

だが、その声を理解することなくおつさんは意識を失ってしまった。

明るい光によつて意識を覚醒され、田を覚ますとおつさんはどこかの部屋のベッドに寝ていた。

ピンクを基調としたあまり広くない部屋。

置かれた小物やらで判断するならば一人暮らしの女性の部屋っぽい。

一体、何がどうなつたのだろうか。

窓からこぼれる光から判断するとななくとも結構な時間が経つている。

意識を失う前のこととは龍げだが覚えている。

おつさんはキャンタマを蹴られて気を失つたのだ。

「うそ、一個ある」

触つて確かめた結果、ちゃんとあつた。

数が変わつてなくて何よりである。

とゆーか、不思議とすでに痛みはないよつだ。

「あ、起きましたか？」

そこへ登場したのはあのトウーキックの女。
ちゅうとだけ心の中のおっさんが怯えておつます。

「昨夜はすいませんでした。わたし、人を蹴つたことってないもので加減がわからなくて……」

「加減云々じゃなくて君の場合、蹴り方に問題があるんだけどね。ゴールデンボールを包みこんだおいなりさんは百戦錬磨の格闘家でもねつは鍛えられない部位だから」

ま、そういうこともあるだらうし、狙つてやつたんじゃないんなら特に怒る気はない。

むしろ、商売として尻を蹴られたおっさんの方に問題がある。

「あの、お詫びの品としてなにか差し上げたいのですけど……」

「お構いなく。トゥーキックを禁止にしなかつたこちりの落ち度ですから」

「いいえ、無事だったとはいえ、もう少しで子供が作れない身体にしてしまつといひだつたんですから遠慮なさいす」

参つたなー。

なんか恐縮しちゃうよ。

ん？ なんで無事だつたと断言したんだ？
まさか！

「ねえ、もしかしておつさんのキャンタマ見た？
「容態が気になつたもので……」

ちよつと恥ずかしいね。

ま、でもあの界隈においておつさんに声をかけてきたんだからやうこ
うお仕事の人だつ。

ならば必要以上に恥ずかしがる」とはない。いや、いいはねしや……

「おひさんどのじつだつた？」

社交辞令としていつて聞くのが正しこ。

「あの、平常状態だつたので何とも言えません……」「めんなせこ」

なるほどね。

まあ、彼女のボディに意識を失おうともおつさんの股間のカブトム
シがへラクレスるなんてことせまらないだらつから仕方ないね。
などとちよつと失礼なことを考えてくるとおつさんの腹が空腹を告
げる鐘を鳴らした。

「あ、気がつかなくて」「めんなせこ。朝食用意したので持つてきま
すね」

そう言つて女性はキッチンの方へと向かつていつた。
せつから作つてくれたんだし、『相伴にあずかりましょうかね。

ベッドから起き上がつて背伸びをひとつ。

窓の外を見てみると晴れ渡つた青い空が見えた。

「いい天気だな」

のんきにもそんな言葉が口から漏れる。

だが、おっさんは重要なことを忘れていた。

いや、もしかしたら意識的に忘れようと現実逃避していたのかもしれない。

だが、現実はおっさんを逃がすなんて真似はしないのだ。

コンコンと扉をノックする音が聞こえてくる。

それに女性がはーいと答えて扉に向かう音も

おっさんは今、死に神の鎌を首に突き付けられているに等しい状態。だが、そんなことすらおっさんは気付けない。いや、気付かないようにしていた。

だが、ここは無理矢理にでも思い出しておけば誤魔化しよつもあつただろう。

なにを思い出すべきか。

それは、おっさんが宿に部屋をとつていたということ。

そしておっさんには娘があり、未だ長い時間を離れるなんて出来ないといふこと。

最後に最も重要なことは

「あの、お父さん届ますかつて訪ねてきた人達がいるんですけど…

…」

その娘がなんとかわからんが、おっさんの居場所を見つけ出す特技を持つてはいることだった。

おひやご、更に失敗する（後書き）

タグに新たに『下ネタ注意』を付けました。

ねつねつ、誤解されやすい性質です

若干の冷や汗をかきながら玄関の扉を開くと、そこには満面の笑みを浮かべながらおとさん抱きつこうとするコリーとそれをまつたの無表情で羽交い締めにして阻止するジーナ。苦笑いをしてるザの三人がいた。

「おとーさん…」

「あ、おはようコニー」

朝の挨拶といえどもやつぱりおはよーうーうーのが合っているだろ？
だが、この雰囲気にはあまりやぐわないかもしけれない。

「おかーさんはなしてー」

「…………」
「お前は」

ジーナがリリーの言葉を無視して問いかけてくる。
あのジーナがリリーの言葉をスルーしてるのだ。

なんだか浮氣を責められた時みたいな空気感が場に漂っている。
だが、ジーナの問い合わせに対する答えは考えるまでもなく『何もしてない』だ。

強いて言えばこれから飯を食わせてもらひくらうてあとは寝てただけだし。

いつそ本当のことを言つた方が良いだろ？

「寝てた」

正直に、あくまでも眞実を言つただけなのだがジーナの顔が無表情

から怒りに変わつていぐ。

「人が好意で宿に部屋をとつてやつたところに、町で適当な女をひつかけて朝までしつぽりと合体運動だと？」
「言つてない言つてない」

どんな曲解だよ……

いや、おっさん言葉が足りないのか。

「寝るつてそつちの意味じやないよ。むしろ氣絶してたから」

「氣絶するほど何度もイッただと……」

「なにそのファンタジスタな思考」

おっさん、そんな誤解を生むよつた発言した?
してないよね?

「だから……」

「もういい、もつ牒るなー。リリーの教育に悪い！ R18指定のダメ男の発言はまだこの子には早い」

まつたく話を聞いてくれない。

じつゆづ時じうすればいいんだろうか。

「とにかくしづらく視界に入つてくるな。リリー、行ひ」

「あ、おとーさん……」

そのままジーナはリリーを連れていつてしまつた。

その光景は実家に帰る妻と子供の図でそれを見てるおっさんの姿は実家に帰ることに反対したけど最後には許容して妻子を寂しそうに見送る夫のようだつた。

「あくまでもじゅうくの間だけの話ですよ旦那」

ポンと肩に手を置き、おっさんを慰めるかのよつぱラが言った。

「なんであんなに怒つてんの？」

「いや、だつて、旦那全然帰つてこないんだから普通心配するでしょ？ そりやあ、おれや姐さんは特に気にしてなかつたけどリリーたんがお父さんはいつ帰つてくるの？ つて何度も聞いてくるもんでしたから……」

ザラによつて昨夜のジーナ達の説明が行われる。

何度もリリーがおっさんがいつ帰つてくるのか聞いてくるので、仕方なくザラが町で捜索に走つた。おっさんの容姿は結構目立つので簡単なミッションかに思えたし、足跡も簡単に掘めたのだがある場所で降の足取りがわからなくなつてしまつた。

それがおっさんの氣絶以後のことだ。

そつからは夜通し探したがどうにも探せずに宿に戻つて報告したところ「おとーさんあつちにいるよ」とリリーが指差した方向に進んできた結果、ここにたどり着いたらしい。

「で、結局旦那はどういった経緯の末にここに来たんですか？」

「要約すると、リリーにプレゼントを買おうとしたけれどギャンブルで金を摩つて足りないから、仕事に従事したら悪魔の一撃をもらつて氣絶して、起きたらここだつた」

「まあ、なんか変な仕事してたのは聞き込みしたんでわかつてましたけど、何故姐さんに最初からそう言わないんですか？」

「プレゼントってのはサプライズが大切なんだよ。あと、ギャンブルのぐだりで怒られそうな気がして……」

「後者が本音っぽいですね。ま、おれの方からフォロー入れときま

すから機を見て合流して下れこ」

そつ言つてザラはジーナ達の跡を追つていった。

頼むぞザラ。

フォローの際はギャンブルの辺りを誤魔化してくれい。

「あ、あの……」「めんなさい。わたしのせいで園さんに誤解を『』えてしまつたよ。」

トウーキックの女性が暗い顔をしながら謝罪する。

まあ、一割くらいは彼女のせいかもしれないがあとの八割はおつさん自身のせいだ。

彼女を責めることなど出来ない。

「嫉妬されるなんて愛されてるんですね……」

「いや、嫉妬なんてしてないと思う。ジーナは親バカだから本当に子供の教育に悪いって考えてるんだよ。だってジーナとおつさんは夫婦でもなければ恋人でもないんだから」

「そりなんですか？ でもお二人にはお子さんが……なんか複雑なんですねえ」

複雑と言えば複雑なのかな。

まあ、わりと単純だつたりもするけど事情を話してやるほど親しい間柄でもないので説明する義務はない。

「そんなことより、飯食わせてくんない？ 腹減っちゃつた」

「え？ あ、はい。用意は出来てますけど……大丈夫なんですか？」

「何が？ 大丈夫だよ」

「どうせしばりくは帰れないだろ？」
ザラのフォローに期待だ。

その後、彼女の用意してくれたパンやスープ、オムレツなどの食事を食べながら、互いに軽い自己紹介なんぞをした。
いつまでもトウーキックの女性って認識するのは例え心中だけでも失礼だろ？からね。

彼女の名前はスピカ。

おっさんと予想した通り風俗のお店に勤めてる娘で、おっさんのことはケツ殴り商売を利用したという友達に聞いたらしい。
誰かと思ってよくよく聞いてみたら最初の猫女のことだった。
あの人、改善に手を貸してくれただけでなく宣伝もしてくれたんだな。

今度会つたら拌んどいつ。

そんなことを考えていると、扉がドンドンと叩かれた。

「ん？ ザラの奴かな？」

早くもフォローに失敗したのだろうか。

「あ、いえ、多分違います。すいません、ちょっと隠れて下さい」

なぜに？

家主の言葉だから従いはするけども……なんか間男っぽいな。

「居るんだろ？ 早く開けるよ」

扉の外から荒っぽい男の声が聞こえてきた。

「『』『』めんなさい。今開けます」

おつさんをクローゼットに閉じ込めてスピカが玄関へと向かう。ガチャリとスピカが扉を開けると何者が部屋の中に入つてくる気がする。

「スピカ、金くれ」

「え、この前渡したばかりだよ？」

「うつせーな！　いいから寄越せ」

クローゼットから光が漏れている。

どうやら覗けそうだ。

そつと隙間から様子を伺つことにした。

部屋にいたのは金髪にピアスをしたそこそこなイケメン。ただどことなくチャラついているように思える。

イケメンは床に置いてあるバッグを勝手に漁りだし、そこからスピカの財布らしきものを取り出して勝手に中身を取り出していた。

「ちつ、しけてんな……」

「じめんなさい」

スピカはなにか謝るようなことをしたのだろうか。

とゆーかおつさんは今、完全な間男状態になつてしまつてゐるんですけど……

「ねえ、本当にそのお金はハルンの夢のために使つてゐるんだよね？」「何、当たり前のこと言つてんだよ。オレが信用出来ないのか？」
「うつん、信用してゐよ」

「なら、余計な心配してんじゃねえよ。ん？ 誰かいたのか？」「

そこでハルンといつ男がテーブルに手を止める。

そこにはさつさまで食事をしていたためにおつせんの使っていた食器などがある。

スピカの分も含めると明らかに誰かがいたことは明白だ。

「「」、これは……」

「誰かいるのか？ おい、誰だ！」

ハルンが部屋をキョロキョロとしながら怒鳴りつける。

誰かが隠れると推測したのだろう。

正解です。

「「」の部屋にはさつ隠れる場所はねえ……」

そう言つてハルンが真つすぐに向かってきたのはおつせんのいるクローゼット。

一発かよ。勘が鋭いな。

「だ、だめっ」

「ふーん、「」か。人の女に手を出すくせ野郎が居るのねー…

やましいことなんか何もしてないのになあ……

でも見つかるのは面倒な気がする。

よし、おつせんは「」にある服の一着だ。なりきれ、なりきるんだ。

【認識偽装のスキルが発動した】

天の声が聞こえたのとハルンがクローゼットを開けたのはほぼ同時

だつた。

「あれ、 いねえ」

「え?」

田の前におっさんがいるといつにハルンはなんか拍子抜けのよつ
な顔をしている。

その後ろではスピカも不思議そうな顔をしていた。
なんだか知らないが助かったみたいだ。

「とにかく、おめえ浮氣しただろー。」

「してない」

「嘘つくんじやねえよー。」

「嘘じやない、嘘じやないから怒りなじでよ……」

「胸糞わりい……帰る」

そう言つてハルンは部屋から出でこつてしまつた。

「彼氏?」

「ふあつー。え? ラルドさん? ビ、ビーリーこつてたんですか?」

スピカに声をかけるとビクッとした後、視線をしつかりとおっさん
へと向ける。
ビーリーおっさんと見えていたよつだ。

「ビーリーすつと西たんだけどね

「そうなんですか……」

「で、彼氏?」

「はー」

「ふーん、ヒモ?」

確認するまでもないけどね。

「ち、違います。彼はその、お店を開くためにお金が必要なだけです……」

つまりはヒモだ。

とゆーかなんだその十中八九、店を開かなそうな王道の金をせびる理由は……

「ダマされてるんじゃないの?」「そんなこと……ありません」

男を信じてるというか、男を信じたいという声音でスピカは言つ。彼女自身もダマされてるのではないかといつ疑いを持つてるのだろう。

まあ、他人であるおっさんが深く関わつていいい問題ではないのかもしれない。

「お互い大変だね」「……はい」「……」

笑いかけておっさんが言つてやると、スピカも微笑みながら頷いた。

「あ、そうだ。ラルドさんに渡さなくてはいけないものがありました」

スピカは部屋の隅からなにか持つてきとおっさんに渡す。それは鞭と砂時計、そしてお金の入った袋。

「ハルンに取られなによつて呪嗟に陥したんです。お金、ちゃんと全部あるか確認して下せ。」

「なんと、これはおっさん稼いだ金か。」

本当なら信用してるので意味を込めて数えずに受け取つた方がカッコイイのだが、おっさんこいつの気になつちやうタイプなんだよね。」

とゆーわけでサクッと数えてみたのだが、どう数えても二〇。

「増えてるんだけど……」

「あ、それはわたしの分の代金も入れたからだと思います」

スピカはさう言つたが、増えた分は他の客の最高支払い金額の倍以上だ。

これじゃ、多過ぎるな。

「やつが、毎度。んじや、これ宿泊代と朝食代ね」

増えた分をそのままスピカに手渡す。

「こんなのはいたしませんよ」

「いいからいいから。んじや、世話をなつたね」

金を突き返すスピカを置き去つにしておっさんはそのままスピカの部屋を出た。

さて、ジーナの怒りが収まるまでビリビリ行つかなー。
やつぱカジノ?

あ、でも今度は金がなくなる前にリリーへのプレゼント買つてしまつ。

ねつねつ、誤解されやすい性質ですか（後書き）

ただの下ネタから脱却出来ましたよね？
次話でルタオの町編は終了予定です。

おひしゃ、決める？

その後、リリーへのプレゼントであるぬごぐるみとついでにジーナへも大した額ではないがプレゼントを用意したために、カップ酒のような器に入っている透明な甘い酒を一つ買つたら金がなくなってしまった。

今思えばスピカに突き返した金は惜しかった。

おっせんつてば昔つから金遣いに對しての計画性がないんだよね。お年玉とか貰つてもパーツと使つちゃう。

そして冬休み明けにお年玉の話題になつた時に友人の中に必ず一人はいる貯金派の奴を尊敬と疑問の瞳で見つめるのさ。

テキトーに歩き回つて見つけた公園のベンチに座り、横にぬいぐるみを置いてボーッと空を見つめながら酒を飲む。

なんて優雅な時間なのだろう。

残念なのは、どう頑張つても一時間も経つ頃には酒が空になつてしまつたことだろうか。

さすがにこの量ではほろ酔いにすらならない。

まあ、とりあえずはここで時間を潰しておこつかな。

「あ、本当にいた」

そんな声を聞いたのはベンチに座つてから結構長い時間が経つた頃だった。

声の主に視線を移すと、紙の袋を抱きながらじりりと近づいてく

るザラの姿があつた。

「こやー、リリーさんがこいつに来てから来てみたんですけど、百発百中なんですかね？」

「おそらくはな。で、フォローはつまくいつたのか？」

「ああ、大丈夫です。まったく信じてもらえませんでした」

全然大丈夫ではないじゃないか。

「とゆーか基本的に姉さんはおれの話つて聞いてくれないんですよ。近くに旦那がいるならまだマシなんですが、いないと最低限の会話をうこしかしてくれません。なんて言つんでしょう。警戒してるとゆーか……」

「信用されてないねお前

「現段階のあなたに言われわけいつですか？　あ、これ差し入れです」

ザラが紙袋を渡してくれる。

中には肉まんらしきものが数個入っていた。

「ついでに酒も買つてきてくれない？」

「図々しこと/orかなんというか……ダメですよ。それ食つたら一緒に姉さんのところに行くんですから酒の匂いなんてさせちゃいけないです」

「あ、そつなの？」

「そつです」

なら、言い訳とか諸々考えておくか。

場所をジーナ達が泊まっている宿に移す。

ジーナの部屋の扉をノックするとすぐに扉が開き、中からリリーが飛び出してきた。

「おとーさん、 おかえりー」

「ただいま」

じゃれついてくるリリーを抱き上げて部屋の中に入ると頬杖をついた状態で窓の外を眺めながら微動だにしないジーナもいた。

「しばらく視界に入つてくるなと言つたはずだが？」

そう言いながらもジーナの身体は動かない。

結果的に視界には入つてないのでセーフである。

「ジーナがそうしている以上問題ないよ。おっさんは視界に入つてはダメとは言われたけど話したくないとは言われてないから」

「ふん」

どうやら話を聞いてくれそうだな。

とゆーわけでリリーを降ろしてから今度はキチンと、ただしギャンブルの辺りは適切なボカシを入れて説明した。

一応の配慮としてリリーの両耳は塞いでおく。

「一から十まで全てを信じることは出来ない」

「そつか、まあ人つてのは嘘つく生き物だからね」

「別に私は浮気だとかそんなことで怒つてゐるのではない。ただ、もう少しリリーの父親だという自覚を持った行動をして欲しいんだ」

「浮氣もなにも、おっさんとジーナは恋人でも夫婦でもないでしょ？ あ、もしかして知らず知らずの内にそんな間柄になつてたの？ よし、わかつた。リリーに妹を作つてあげよリジヤないか」

「リリーは離しか生まれないつて前に説明されてたしね。

「ただの言葉の綾でそつ言つたまでだ！ 勘違にするなつ！」

真つ赤になつてジーナが否定の言葉を言つ。

まあ、おっさんも分かつて揚げ足取つたんだけど、そんなに力いつぱい否定されるとただただ残念だ。

心のどこかで「リリーの妹作りは夜になつてからだ」とか妖艶に微笑みながら返してくるという淡い期待をしてたよ。

「それはいいとして、リリーの親だつて自覚をおっさん自身に促すためにプレゼントを用意しました。ザラ君、あれ持つてきて」

落胆する内心を覆い隠し、部屋の外へと呼びかける。
程なくしてでかいぬいぐるみを抱えたザラが入ってきた。
ずっと外でスタンバイさせてました。

「リリー、お父さんからのプレゼントだよ」

ぬいぐるみを受け取つてリリーへ渡してやる。

「かわいい～。おとーさん、ありがとー！」

「かわいいのはお前だよ。

「あなたのおなまえはヴェルトだね」

え、そんな名前なん?

もつ少し子供らしさの付けて欲しかった。

「ジーナにもはい」

「は？」

ヴェルトと戯れるリリーとそれを見てなぜか鼻を押さえてこるザラを横目にジーナにもあらかじめ買っておいたプレゼントを渡す。中身は数種類のヘアピンだ。

一個一個は高くないが十個はあるのでおしゃべりの少ない財政には痛手だったが、女性へのプレゼントでケチるよつた真似は避けたい。

「これは……」

「おっさん、デコ出した髪型が好きなんだ」

ジーナの普段の髪型である何の変哲もないロングも似合つてるので好きなのだが、これは別腹である。

「付き合つてもない女に趣味を強要したプレゼントとか女にモテないタイプだな

嘘、マジ？

そうなの？

やつベーカー、おっさんをやつすと結構ちつてこや。

「だが、無駄にするのももつたといいかりとつあえず受け取つてや

る

とつあえず受け取つてもらえたよつて何よりだ。

「この町に長居する理由もないし、明日少し買い物をしてから町を出よ。いいな？」

「オッケー」

と、いうわけでそのままここも行かず、温泉に浸かり、旅館で出された食事に舌鼓をひきつつ、夜におっさん部屋にきたりリーベ共に早い時間に寝た。

次の日、食料などを買い込んだおっさん達は四人で昼食を摂り、魔動式浮遊絨毯アラジンを広げるのに適した場所を求めておっさんが昨日時間を潰すのに使った公園へと向かっていた。

その間ずっとおっさんはクソ重いリュックを背負つてゐるわけだが、機嫌は超いい。

なぜなら、ジーナの髪におっさんがプレゼントしたヘアピンが使用されていたからだ。

生憎、テロ出しのためではなく、耳を出すために使用されていたのだが、それでも使つてくれるというだけで嬉しい。もう何時間でもリュック持つちゃうよ。

「ん？ あの女は……」

ジーナの髪を凝視していると、ジーナが前方を見つめた状態で立ち止まる。

その視線を追つてみると、スピカがこちらに向かって歩いてくるのが見えた。

スピカの方もおっさんと並んで立つてゐたようで、小走りに近寄つてくる。

「や

「「んにちは。誤解が解けたんですね。良かったです」

挨拶すると、本当に安堵したという表情でスピカが応える。

「お蔭様でね。今から仕事？」

「いえ、今日はお休みなので買い出しに……。ところでその荷物は？」

「今から町を出るんだ。ここは旅の途中に寄つただけだから」

「そうなんですか。あの、お見送りしていいですか？」

「もちろん。この人はクラベジーナ。ジーナ、この娘はスピカ

ジーナとスピカにお互いを紹介する。

「このバカが迷惑をかけたな」

「いいえ、わたしこそご迷惑をおかけしてすいませんでした」

スピカが深々と頭を下げる。

そこまで恐縮せんでもいいのにな。

「で、この子がリリー。おっさんの娘で天使です」

「こんにちはー」

「こんにちは。かわいいね」

リリーのかわいさがわかるとは珍々のもんだ。

「で、こつはロココン」

「違うつーのー」

「あははは。よろしくお願ひします」

ザラは特に紹介しなくてもいいよね？」

ヒューリヒだちやんとした紹介はしない。

スピカは若干氣圧をされていたようだが、わりと和氣あいあいとした感じで公園までやってきた。

そして拓けた場所を見つけて魔動式浮遊絨毯を広げる。

なんかピクニックに来てビニールシート広げてるみたいに見えるな。

「あ……」

いざ四人が魔動式浮遊絨毯に乗つて飛ぼうとした時、スピカが何かを発見した。

少し遅れておっさんも同じものを見つける。

「どうした？」

ジーナも視線を辿るが、おっさん達が何を見つけたのかはわからないだろ？。

スピカとおっさんが見つめる先に居たのは一人の金髪男の姿。

いや、正確には一人ではなく女性と仲良しそうに腕を組んだ状態の男。

名前はハルン。

スピカと付き合っているはずの男だ。

「あ、スピカ」

スピカがハルンに向かつて止める間もなく駆けていく。

こんなところで修羅場るの？

「なんなんだ？」

「あつちにスピカが付き合つてゐる男が女連れでいたんだ」

「うわあ……」

疑問符を浮かべるジーナに説明してやるとそれを聞いたザラが明らかに嫌な顔をした。

その感情には同感だ。

「ちょっと行つてくる」

「出発前に面倒をおこすな」

「まあまあ、姐さん」

三人をその場に残し、おつさんはスピカの後を追つた。

「ハルンつ！」

スピカが声をかけるとハルンは隣の女に向けていた視線をスピカに向ける。

「ちつ、なんでここにいんだよ」

「その人誰？」

「誰つて、彼女」

「あんたこそ誰よ？」

ハルンの隣の女がスピカへと問い合わせる。

「わたし……わたしは……」

「ほら、前に言つたことあんたが？」

「ああ、あの金づるの女？」

「そう、そいつ」

スピカが言い淀んでいるとハルンが女に説明してやる。
金づるとはまた酷い。

「ハ、ハルン……」

「んだよ?」

「えっと、わたしたち付き合つてるんだよね?」

縋るようなスピカの視線をハルンは鼻で笑つて散らした。

「この状況見てわかんねーの? 鈍いなー。つーかさ、風俗やって誰にでも股開くような女とこの俺がマジで付き合つとでも思つてたわけ?」

「そんなつ! お金が必要だからつて風俗のお店を紹介したのはハルンでしょ?」

「キャハツ、え、この女そんなんで風俗に勤めたわけ? あつたま

わるーい

「だろ?」

二人がスピカを笑う。

女のキャハツって笑い声におひさんイラツときました。

「嘘……嘘だよね?」

スピカがハルンに近づき、袖を掴む。

だが、それはすぐに離すこととなつた。

鈍い打撃音とともにスピカが地面へと転がつた。

「つづぜーんだよ! ばれた時点でもつお前いらねえんだよつーのをつあと消えるよ」

あの野郎、女殴りやがつた……

しかも悪びれた様子など微塵もない。

スピカは殴られ、赤くなつた頬を押さえながら上半身だけを起き上がらせる。

その目には涙が滲んでいた。

「いい加減にしろよ」

もう我慢は出来ない。

おつさんはスピカとハルンの間に立ち、ハルンを睨みつけた。

「誰？ つーか関係ない奴は引っ込んでくんない？」

「関係なくはない。スピカは友人だ」

だからこそ、こんな目に合わせるなんて許せない。

「スピカの友達？ こいつにそんなのいたのかよ。あ、もしかしてお前、昨日こいつの部屋に隠れてた奴か？」

「だつたらどうした？」

否定はしない。

なぜならそれは事実だからだ。

「だつたらそれやるよ。俺、もういらないし。ま、そいつのテクは惜しいけどな。店で仕込まれたのかしんないけど中々良かつたろ？」

「黙れガキ。お前みたいなのをクズつて言つんだ」「はあ？」

なぜ、スピカがおっさんのことにもかかわらず疑問だった。

人を殴ったこともなく、氣を失ったおっさんをわざわざ自宅に運んで介抱して飯まで用意するような優しい女がどうして金を払つてまで人を蹴るのか。

そりや、こんなクズと付き合つてたら蹴りたくもなる。

「言つとくけど、おっさんとスピカに合体履歴なんてもんはない。本当にただの友人だ。おっさんが隠れたのもスピカはただお前に誤解されたくなかっただけだ」

「だからどうした?」

「どうもしない。事実を教えてやつただけだ。あんだけ好かれてるのにこんな仕打ちはないだろ」

「うつせーよ

「やめてー!」

ハルンが殴り掛かつてくる。

スピカの悲鳴が聞こえるが、それでハルンの拳の勢いが弱まる」とはない。

だが、おっさんはあえてそれを避けることはせずに顔面で受け止める。

「ぐわー

うめき声をあげたのはハルンの方。

おっさんにも少なからず痛みはあつたが、こんなもの蚊に刺されたようなものだ。

「クズの放つたヘナチヨ ロパンチなんておっさんには効かないよ」

「ぐわー

更にハルンが殴り掛かってくる。

だが、その攻撃は衝撃無効のスキルもあり、おっさんを微動だにさせることは出来ない。それにプラスして打撃耐性のスキルでダメージはほとんどない。

「お前の気持ちがどうであれ、スピカと付き合つてたのは事実だろ。あの時、お前は浮氣だなんだとスピカを怒鳴りつけてた。それが証拠だ」

「くそっ、効いてねえのか！？」

「だが、実際はお前の方が浮氣してんじゃねーカ。自分は棚にあげてよくもまあ言えたもんだ」

拳を握りしめる。

「結論はまじう帰結しようともお前がクズで揺るがない。そして……いい加減一方的に殴られるのも限界だ。正当防衛だ、歯あ食いしばれ」

「ひつ」

拳を振り上げる。

ハルンはとつさに手で顔を庇うようにするが関係ない。

おっさんはそのまま拳をハルンの顔に叩き込……まずに股間を蹴つた。

「なつ」

「どうだ！ つここの間食らつたばかりのおっさんの苦しみは…」

「あれは痛い」と誰かが呟いたのが聞こえた。ちらりと背後を振り返ればジーナ、リリー、ザラをはじめとしたギャラリーが出来上がっていた。

目立つてゐる。

ぬれで、皿をひしゃくしてゐる。

よし、決めゼリフだ。

「いいか、例え女が浮氣しようともそれは繋ぎ止めきれない男のせい。そして、男の浮氣は單なる発情。浮氣するなら墓場まで持つてく覚悟でしょ」

ビシッとハルンに指差しながら言い放つ。
決まった。

「女を金づるとして食い物にしてるクズに対する説教だろ？ なんで浮気云々になつてんだ？ なんか話微妙におかしくないか？」
「とゆーかよくよく聞くと浮気否定しませんよ」

卷之三

リリー以外には不評なようだ。

「とにかく一度とその汚い面スピカに見せんじゃねーそその場合、生涯EDで苦しむことになると覚えておけ」

まあ、感触的にしばらくは機能しないだろ？がな。

「立てるか？」

スピ力に近づき、手を差し出す。

「はい」

スピカがおつせんの手を握つたので立たせてやる。

「移動しよう」

そうしてスピカをギャラリーを搔き分けて進み、その場からそこを離れたベンチに連れてていき、座らせた。

「これを頬に当てとけ」

ジーナが濡らした布をスピカに渡すとありがとハジヤコマサと弦いで受け取り、黙つてそれを頬に当てた。

「バカですね……わたし」

スピカが自嘲気味に呟く。

「騙されてるって心のどこかで思つてたのに、それでも彼はわたしを好きでいてくれてると思い込んでた……」

スピカの目から涙が零れる。

女に泣かれたらそれが例えどんな相手でもおつせんにはどうするとも出来ない。

ただ、スピカの頭を撫でてやつた。

確かにバカだとは思う。

でも、それだけ人を好きになれるってことは悪いことではない。ただ、その感情を向ける相手が悪かった。

「お前は男を見る目がないな。男なんて皆バカでクズだが、あいつはその中でも特上だ。今度はもう少しマシなバカを選べ」

ジーナがスピカに語りかける。

これって一応慰めてるんだよね?
おっさんそう取っちゃうからね?

「だいじょーぶ?」

「うん、大丈夫。心配してくれてありがとね」

リリーがスピカの膝に手を置いて問いかけると無理矢理作ったような笑顔で答えた。

だが、それも一瞬のことと今度は顔を伏せて泣き出してしまった。ジーナがスピカの隣に座り、その背中に手を置いて宥めるように撫でるのをおっさんはただ見ていることしか出来なかつた。

スピカはひとしきり泣くと今度は無理矢理作ったような笑顔ではなく、自然な微笑みを浮かべていた。

「もう大丈夫です。すいません、わたしのせいで出発を妨げてしまつて……」

「問題ない」

「いえ、本当に申し訳ないです。わたしは本当に大丈夫ですから出発なさつて下さい」

「だが……」

「いつまでもわたしのために出発を遅らせてしまつるのは心苦しいんです」

「そりが、よし出発するぞ」

ジーナは切り替えが早いな。

おっさんはまだ気になるんですけど……

急ぐ旅でもないんだし、スピカが本当に落ち着くまでの町に留てもいいのではないだろ？

「あんまりスピカを困らせるな」

そいつでジーナに引きずるよ？にして連行された。

「ではな」

「はい。クラベジーナさん、お元氣で。わたし、男を見る目を養います」

「そつか」

全員が魔動式浮遊絨毯に乗った状態で別れの言葉を交わす。

「おねーちゃんバイバイ」

「うん、リリーちゃん元氣でね」

「うん」

元氣よくリリーが頷く。

「ラルドさん、また会えますよね？」

おっさんに対してもスピカが言つた言葉。
これの意味はもしかして……

「おっさん惚れちゃった？ 悪いんだけど……」
「あ、違います」

即否定入りました。

「友人として、また会えますか？」

恋愛的な面で期待してたわけじゃないけど、即否定されるのは普通に傷ついたからね。
でも、スピカは別に好みのゾーンといつわけじゃないし、まあいつか。

「ああ、必ず会いにくるよ。またケツを蹴られるためにね！ その時はトウーキックは禁止だかんね」

「……ええと」

「反応に困ることを言つた。普通に別れる」

では、仕切り直しまして……

「またね」「はい」

絨毯が上昇する。

その高度はぐんぐん上がっていく。

「クラベジーナさん、リリーちゃん、ラルドさん。また会える日を待つてます」

不意に下の方でスピカの声が聞こえた。

リリーが身を乗り出して手を振るのを落ちないよう固定する。高度を上げた絨毯が前方に進み出すまでそれは続けられた。

「おれ、すんげー空氣扱いだつた……。最後名前呼ばねーし
そしてザラは誰のツツコミも受けずに一人嘆いていた。

おひれど、決める? (後書き)

一話に纏めようとして結構唐突かつざわめきになつて申し訳ありません。

ただ、おひれどの別れの言葉のために書いただけなもので……

ここに一つ裏設定を

ハルン　『尿』

ヴェルト　『世界』

共にドイツ語です。

名前からして色々な悪意に満ちています

おっさん、遊ぶ

ルタオの町を出てからいくつかの町や村を経由し、田的地であるファンの森まであと少しというところまで来たところで、休息をとることになった。

おっさんらの旅は大人ばかりの旅ではなく、リリーとこう子供も随伴してゐるためどうしても移動だけで長い時間を過ごすということは出来ない。

正確に言えば、リリーはそれでも文句や不満をあらわにすることはないのだが、そこら辺は大人の気配りつて奴だ。

まあ、いつどこで休みをいれるかは魔動式浮遊絨毯を操作してゐるジーナの意志ひとつで決定するので休息の回数はわりと多めだ。時々はザラも魔力を注ぎ込んで魔動式浮遊絨毯を操作してゐるが、内包する魔力量の問題からジーナに比べると時間は短い。その点おっさんはそういう細かいことが出来ないので一回も魔動式浮遊絨毯を操作したことはない。

お荷物？

ああ、そうや。

おっさんは一行のお荷物に過ぎないさ。

これまで立ち寄った町でも、その都度宿はジーナの好意に甘え、その度に小遣いという名の借金をする。

単なるダメ男なのさ。

だが、ヒモではない。

だつてお金は借金だから！

ルタオの町で行つた商売は面倒に巻き込まれる臭いがするつてジーナに禁止されちゃつたから返すアテなどないのだが、いづれ返すつもりはある。

それが今際の際にならないことを祈るばかりだ。

この世界にも保険金の制度があれば死んでも安心だけど残念ながらないので仕事して稼ぐしかないんだよなー。

旅の道中で王都には学校があるってことを知った。
出来ることならセイヒンリーを通してやるだけの稼ぎが得られる仕事に就きたいもんだ。

「おとーさん、あそぼー」

「はこはこ、キヤッチボールでもしようかね」

リリーに遊びをせがまれ、おとせさんのイメージする子供とやる遊びを擧げる。

こんなことあるつかとボールは町で購入済みだ。
仕事のことは後で考える」とひょい。

「旦那へ、もう少し女の子たち遊びしてやつたらいいじゃないですか～」

ザラからケチが入る。

女の子らしい遊びか……

確かにキャッチボールは男の子がやるイメージだ。
だけど女の子のやる遊びっておっさんよく知らねーぞ?
でも代表的なのは分かる。

「おままごととか?」

「お、それいっすね~」

「やるやる~。おかーさんも」

「ええ」

全員のつてきたな。

んじやまでは配役を決めるとするか。

「リリーは何役がやりたい?」

「リリーはね~、おかーさんやりたい」

「んじや、リリーはお母さん役ね。んで、ジーナが娘役」

「私が? お前はお父さん役か?...」

ノンノン間違つてる。

おっさんはそんなつまらない配役なんて御免だ。

もう少しジードロした感じのおまかじがやりたい。

「おっさんは娘の彼氏で結婚の挨拶に初めて彼女の家に訪れた時に、若い母親に彼女と会つた時以来のトキメキを感じた男の役やるから。あと、ザラはペットのちくわ」

「ちくわをペットにするつてどんな家庭ですか!?」

「そんなことよりお前の配役の設定が気持ち悪い。お父さん役がないだろ」

「そこは未亡人の設定。おっさんもその方が演技に熱が入る」

「旦那、普通おれか旦那がお父さんでしょ」

「やだよ、お前だと夫婦設定を活かしてリリーに襲い掛かりそうだし、おっさんがお父さん役つてまんまじやん。大丈夫、脚本的にはちゃんと娘の方とくつづくから」

「リリーはそれでも?」

「絶対ダメっ!」

ジーナとザラの声が重なつた。

結局、スタンダードにリリーが母親、おっさんが父親、ジーナが娘としてままじとをした。

ザラは大分妥協した結果、ペットの犬になつた。

関係ない話ではあるが、動物をペットになると獣人に嫌われる。む

しろ過激な奴は殺しにくるから要注意だ。

似たようなことで魚人の前で魚を食すと嫌われます。

そのため魚人が多く住む海辺の港町には逆に魚を出す店は少なく、むしろ隣町の方に多いとの情報を得た。

タフアンの森で用事を済ませたあとは是非ともそこに行こう。

「ふう、ままごとつて大変だな」

「お前が真面目にやれば大した労力など必要ない」

そんなことないんだよ。

ままごとつて簡単に言えば即興のアドリブ芝居だから結構考えさせられる。

「おじちゃんだいじょーぶ?」

「…………」

おっさんとジーナが会話している後ろでザラが地面を相手に犬神家状態になっている。

ままごと中にペットの立場を悪用してリリーを文字通り舐めようとした末にジーナにバックドロップを喰らわされた結果だ。

ある意味当然の処置。

リリーに心配してもらつてるだけ幸せなことだらつ。

べ、別にひらやましいなんて思つてないんだからねつ！？

「とにかく、スポーツとか体動かす方が気楽でいいや」

「ふーん、例えばお前の得意なスポーツってなんだ？」

「え、そりやあ……棒を使って白いものを穴の中へとぶち込むスポーツかな？」

「なつ……」

「まあ、リリーも出来なぐはないけど、まだ早いたつー!?」

話の途中で殴られた。

打撃耐性のスキルを得たといつのに相変わらずジーナの攻撃は効くなー。

おっさん的にはオッケーですけど、人の話は最後まで聞くべきって教わらなかつたのだろうか。

「お前はリリーに何を教えるつもりだつー!?」

「何つて、おっさんの得意なスポーツをジーナが聞いてきたから答えただけじゃん。リリーにはまだ早いつて思つてゐるよ」

「まだつてことはいづれ教えるつもりなのか……?」

「機会があれば教えてもいいかな?」

「そんな破廉恥なことをリリーに教えるつもりなのかつー! 例え親であつてもそんなこと……」

どつやらジーナは勘違いをしてゐるらしい。

なぜならばおっさんの言つてるスポーツとはゴルフのことだからだ。おっさん、接待とかでやつたりしてたからそこそこイケる。

ベストスコアは81。アベレージでは90に近い。

ゴルフがわからないなら、素人としてはうまい方つて覚えておいてくれたまえ。

まあ、ジーナの勘違いはおっさんの思惑通りなんだがなー!ー!

「えー? おっさんの言つてるスポーツってゴルフっていう小さな白い球をクラブつて棒で打つて遠くにある穴に入れるつていうれつきとしたスポーツのことなんだけどなー?」

「は……」

「ジーナはいつたいな～にを想像したのかな～？」

「う……」

自分の想像したものを見い出したのか、ジーナの顔が羞恥に赤く染まる。

これなんだよな。

ジーナって時々「うわ～うわ～」ふな反応するからたまらん。ついついからかいたくなっちゃう。

「お、お前が変な言い方するから……」

「でも間違つたことは言つてないよ？ そこから恥ずかしい想像したのはジーナなんだけど？」

「くうつ……」

「何ならジーナの想像したことをリリーの前で実践する？ 性教育は子供のためにも重要だと思つんだ」

「し、死ねつ……」

「はぶつ……」

口は攻撃しちゃダメでしょ……

やばい、やつ～うつ～してゐつちにジーナがアイアンクローの体勢に入つた。

「このまま頭蓋を碎いてやる」

ア、アカン！

からかいすぎた！

調子に乗つた末路がこれか……

「なにしてるのー？」

脳裏に響く頭蓋骨の軋む音の狭間に我が天使の声が聞こえる。

「何でもないのよ」

その声によつておつさんの頭はジーナの手から解放される。
さすがにヤバかった。

いつたいジーナの握力はいくつくらいあるんだりつへ。
少なくとも林檎ならば簡単に潰せるはずだ。

まあ、確かに痛かったけどその痛みは全然嫌いじゃない。
多分また懲りずにジーナをからかうことだらう。

そして再びお仕置きといつ名の桃源郷を味わうことになるはずだ。
なんか考えとかねーと……

「馬鹿の相手してたら疲れたわ」

「それじゃあ、ジーナは少し休んでなよ。リリーはお父さんとキヤツチボールしよう。あ、ボールは市販のボールを使います。決しておつさんの股間のボールを使うわけではないからね」

「余計なこと言わんでいいからやるならやつたとやれ
「おとーさんはやくー！」

リコックからボールを取り出してリリーに投げてやる。

それをリリーはいとも簡単にキャッチしてみせた。

この子は才能の塊じや。

「こぐよー」

リリーがボールを投げ返す。

つてはやつ！

子供が投げる球速じやねえよ。

「ナイスボール。その調子」

ギリギリ捕れたけどあのスピードはなんなの?
ぶつけ抜け百キロ近くは出てたんじゃね?

「うん、どうせ私もうわざうつねーながねー」

え、嘘……たつきの本気じゃないの？

- ४८ -

リリーが再度投げたボールは気付けばおっさんの胸に直撃していた。
痛みはそこそこ。

と鮮明に残る。

その身体スペックは異常ともいえるほどに高い。

「も、もうちよつと力抜いて投げよつか。リリーが怪我しちやいけ

「わかつた」

必死に体面を繕つ。

今はまだ幼いリリーに、お嬢さんが自分よりも憐れな存在だと憚らせる
ないようにしよう。

やつぱり父親つてのは偉大な存在であるべきだからな。

だけど、若干手遅れになりかけてる気もするんだよなー。

自分が愛するべき存在であるリリーとなし崩し的にその父親となつた男が仲良く戯れているのをクラベジーナは微笑ましげに見つめていた。

元々クラベジーナにとつては男は邪魔で目障りな存在であったのだが、それも共に過ごすうちに段々と薄れ、今では一緒にいるのも悪くないと思つていた。

何より男と一緒にいることでリリーが幸せそうにしている。ただそれだけで男と共にいる理由としては十分だ。

見ればリリーがドラゴンとしての高い身体能力を活かして男に球を投げている。

それに男は全く反応出来ずにぶつかり、なんだかんだ言いながらリリーの力を制限しようと口を回らせていく。

大方、リリーには情けないところを見せたくないのだらつと当たりをつけた。

「バーカ」

そんなことしてもリリーもいざれば男がビリショウもない奴だと気付くだろう。

でも、それでもリリーが男を見放すことはない。

なぜならそれがドラゴンという存在。

固体数が少ないためなのか、ドラゴンは家族というものを大事にする。それは恐らく本能のレベルで。

だからリリーは父親と認識した男にあれだけ懐く。

本当はそうなる前に引き離さなければならなかつたのだが、家族であるリリーを悲しませることはクラベジーナのドラゴンとしての本能が許さなかつた。

「本当にこれで良かつたのかな？」

クラベジーナは人知れず呟く。

それが誰に対する問い掛けなのかはクラベジーナしか知らない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0990y/>

オッサンの異世界記

2012年1月8日19時10分発行